

まどか「お願い…カー
ビィ！」「ぽよ！」

めぐるうさぎ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

星が落ちてきたその日、彼女はピンクの悪魔と出会った。

お声を頂いたのでPixiv様の方でも投稿していきます。

目次

夜空の輝きの下で	1
1. 闇に隠れる影	6
2. 鳥かごの魔女Battle!	16
3. 一難去つてまた一難	24
4. ハチャメチャが押し寄せてくる	34
5. ピンクの悪魔と白の悪魔	45
6. 地球のお菓子は美味しい	55
7. 薔薇園の魔女Battle!	63
8. バマミとの出会い	70

9. 魔法少女体験コース第一弾	79
10. お菓子の魔女Battle!	前
編	86
11. お菓子の魔女Battle!	中
編	95
12. お菓子の魔女Battle!	後
編	106
13. 佐倉杏子との出会い	115
14. 打倒!ワルプルギスの夜!	
125	
15. ハコの魔女Battle!	前編
16. ハコの魔女Battle!	後編
133	

27.	ママさん救出大作戦！	258	28.	ママさん救出大作戦2！	268
249			29.	佐倉杏子とバママ	278
26.	寂しがり屋の少女は月下に眠る	238	30.	絶望を抱いた少女に希望を！	289
25.	悲しき結末	228	31.	明かされる真実	303
24.	絶望に沈む人魚姫	217	32.	ハッピーエンドに終わらせる為に	313
23.	悪夢の始まり	206	33.	なんて事ない日常	323
22.	ほんの少しの僅かな闇	193	34.	見滝原の魔法少女	335
21.	魔法少女と魔女	184	35.	この宇宙を守る者との戦い	360
20.	敵か味方か…	174	36.	銀河にねがいを	360
19.	魔法少女達の集結	165			
18.	なくしてしまった記憶	156			
17.	忘却の魔法少女	145			

夜空の輝きの下で

少女は暗闇の中、空を見上げていた。視界いっぱい広がる美しい夜空に見惚れてしまっていたのだ。今の時刻はもう12時を回っており、人々はもう眠りについていている時間。

少女：鹿目まどかももうパジャマへと着替えており、眠りにつこうとしていたのだが、そんな中カーテンの隙間から漏れる幻想的な光につられてついカーテンを開き、窓から顔を覗かせていた。

「綺麗……こんな綺麗な星空見たの初めて……」

夜の闇に染まったこの町を優しく照らす月明かりと今にも落ちてきそうな星々を見て、彼女はそう呟く。生まれてこの方14年あまり……この星空は彼女がこれまで見てきた中で最高だと言える程に素晴らしいものだった。

少しずつ流れていく時間を忘れ、その景色に見惚れていたまどかだった……が、ふと星空の中で一つの変化が訪れている事に気づく。

「あれ…あの星ってあんなに大きかったかなあ？」

美しい星空の中で一際強い光を放っていた星が先ほどよりも少し多くなったような気がした。その輝きも心なしかどんどん強くなっているようにも思える。

「気のせい…じゃない…!？」

少しずつ…少しずつ大きくなっていくその星にこれはただ事ではない…そう子供ながら感じとったまどかは思わず立ち上がって窓を開き、ベランダへと出る。

その間にも星は大きくなる…というよりは、よりかはどんどんこちらに近づいてきているというのが正しかった。

「うそっ！も、もしかして隕石!？」

輝きを放ちながら落ちてくる飛来物は微かにピンクの影が見える。あれがもし…もしこの町に落ちてきたらどうなるだろうか。それほど大きな物ではないようには見えない

るが、たとえ小さな物であっても町に甚大な被害を及ぼすと新聞やテレビでも言っていた。

それを思い出したまどかは咄嗟にその場にうずくまって目を閉じる。こんな事をしても落ちてくる隕石の前には何の役にもたないであろう。しかし、この少女にできる事はこのくらいの事しかなかった。

「……………あれ？」

最悪の事態も考えて、いつ世界が消滅してもいいようにと衝撃に備えていた少女だったが、いつまでたつても何かが起こる気配がなく、おそろおそろと目を開く。

視界に飛び込んできたのは何の変哲もないこの町の風景だった。目をこすつて何度も確認してみるがいつもの見慣れた見滝原の町である。

「もう寝よう…多分疲れてるんだよ、私」

と振り返り、ベランダから部屋へ戻るまどか。その時《ほびゆつ》という何か柔らかなものが潰れたようなそんな音がどこからか聞こえてきた。

その音が聞こえてきたのは彼女のベッドで暗闇の中、目を凝らして見るとそこで何か
が蠢いているのがわかった。何だろうと思つたまどかが部屋の明かりをつける。する
と、そこにいたのは…

(っ——)っへ…ぼ…よ…

ピンク色の丸い胴体にぱちりと開かれた大きな目と口。そのボールのような胴体
から生える短い手、赤い足と可愛らしい生き物がベッドの上でぐったりと倒れていた！

「えっ?!?ええ~~~~~っ?!」

突然の出来事に大声を出して驚いてしまうまどかだったが今が深夜だという事を思
い出し、自分の口をパツと抑える。すーはーすーはーと何度も深呼吸をしてよう
やく落ち着いた彼女は倒れているピンクの生き物におそるおそる近づいてコミュニ
ケーションを図ってみる。

「ね、ねえ…大丈夫?」

(っ——) つゝグウウウ…

謎の生き物からの返事はなかった。しかし、そのかわりに返ってきたのはグウウとい
うお腹が鳴る音。もしかしたらと思い、部屋の中に置いてあったおやつのだーナツと飲
みかけのお水をそつと差し出す。謎の生命体は一瞬顔を上げたかと思うと…

(っ?~?~?c) モグモグ

「わっ！もう食べちゃった…お腹がすいてるの？」

まるで吸い込んだかのように消えていったドーナツとお水を容器ごと食べてか、彼は
少し元氣を取り戻したように見える。

しかし、まだぐったりとしていたので彼女は「冷蔵庫から何か持ってくるから待つて
て…」と言い残し、部屋からそつと飛び出していく。

これがカービィとの出会いの始まりであった。星のカービィと呼ばれている彼との
出会いは鹿目まどかと窓から一連の流れを見ていたもう一人の少女の運命を大きく変
える事となる…

1. 闇に隠れる影

(妖精さん…なのかな。お星様の妖精)

寝静まった家族が起きないようにそつと冷蔵庫からプリンやおにぎり、ソフトクリーム、etc.:彼が喜びそうな物を持ってきたまどかは美味しそうにそれらを食べる謎の生物の事をそう思っていた。

瞬く間に食べ物を食べ終えたピンクボールはゆっくりと立ち上がる。そして…

(つつ???) (つくはあい!)

その場でくるりと一回転!そして、口いっぱい空気を吸い込み、膨らんだかと思うと…

「と、飛んだ~~~~つ!」

なんと、その場で浮かび上がって見せたのだ！彼は短い手足をばたつかせてこの部屋の中を飛び回ったり、その場でホバリングして動きを確認しているような素振りを見せた。

c (? ~ ?) つつワフワ

「わあああ…夢じゃないんだよね、これって…」

ピンクの生き物が自分の部屋を縦横無尽に駆け回る姿を見て、これは夢ではないのか？そう思ったまどかは自分の頬を軽く引っぱたく。

「い、痛い…って事は!？」

ちゃんと痛みを感じた事で夢ではないと悟った彼女は飛び回る謎の生き物に向かって再び声をかけてみる事にした。

「ね、ねえ！私の言葉わかる？私…鹿目まどか！」

(つ ???) つへカービィ！

空気を吐き出して降りてきた彼はまどかの言葉に頷いて見せ、舌足らずな声でカービィと名乗った。

コミュニケーションが通じる事からどこからきたの〜とか何をしにここに〜だとか色々聞いてみる…もそのいずれも返答は曖昧なもの。

結局色々聞いてわかったのは彼の名前とかなり大食らいという事だけであった。

そんな中、食べ物を食べた事により満足したのか、柔らかな笑みを浮かべていた彼の顔つきがふいに鋭いものになった。そして、キョロキョロと周りを見渡したかと思えば、窓の方へ向いて外をジッと見る。

(っ?…?…?)



「どうしたのカービィ?」

不安そうなまどかの声にハッと振り向いて笑顔になったカービィは感謝を伝える為だろうか…短い手を彼女に向かってブンブン降ると彼は大きくジャンプ。

そのまま窓の外に出て行ってしまふ。慌ててベランダに出るまどかだったが、カービィの姿は闇にとけ、もうどこにもいない。

「カービィ…」

しばらくはカービィの姿を探していたまどかだったがいつまでたつても見つからなかった為、諦めてベッドへ潜り込む。

カービィは何故急に出て行ってしまったのだろうか…そんな事を考えながら彼女は眠りに落ちていった。

………

………

………

どうしてカービィは彼女の家を急に飛び出したのか…それは外から部屋を覗く何者

かの視線に気がついたからである。姿こそ巧妙に隠していたものの、数々の戦いを潜り抜けてきた彼にとつては見つける事は容易な事。

視線に気づき、飛び出してきたピンクボールに驚きつつもその影はすかさず屋根から屋根へと高速で移動して逃走する。それをカービィはグルメレース感覚で追いかけていた。

しばらく深夜の見滝原の町の中でその者と鬼ごっこが続いたが、とうとうその人物を真つ暗で人つ子一人いない自然公園へと追い詰める事に成功する。

「ふうん、なかなか素早いピンク玉ね…」

月明かりが映し出すのは長く伸びた髪をなびかせ、顔面スライディング着地するカービィを見下ろす一人の少女。

彼女が見せるその余裕から追いつめていたつもりのカービィはどうやらその少女におびき出されていたらしい事に気づく。

(っ?~?) っへムツ…カービィ!

ピンク玉と呼ばれた事が気に入らなかつたカービィは少し怒つた様子で自分の名前を告げる。その者はカービィの言葉に鼻を鳴らすとどこからか取り出した物を彼に向けた！

それは彼女のような少女が持つべきものではないであろうヤクザや警官の武器、拳銃であつた。安全装置を抜き、真剣な顔つきで構える様から本物である事がわかる。

「…あなたは何者？あの子に近づいて何が目的なの。死にたくなければ答えなさい」
インキュベーター
 (…奴らの亜種…それとも魔女の使い魔か…いずれにしてもこんな事は初めてよ)

銃を向けられているカービィだったが、それを意に介する事なく付近をキョロキョロと見渡している。公園内の遊具や植えられている植物など、彼がいた星では物珍しいものばかり…彼はどうしても気になつてしまつていた。そんな脳天気なカービィに彼女は面食らいつつも彼の足元に銃弾を放つ。

「次はないわ。私の質問に…っ!？」
 シ(っ?っ?)

拳銃を構えてカービィを脅していた彼女はふいに言葉を切ったかと思うと顔をしかめて舌打ちをする。カービィも周囲の異変に気づいたようでのほほんとした顔から真剣な顔つきに変わり、辺りを見渡していた。

すると、彼らが立っていた地面は大きく揺らぎ目に見えていた景色も瞬く間に変化していく…

「これは鳥かこの魔女結界…こんな時に…!」

c (?o?) つへうわああ

まるで宇宙空間と言うべきであろうか。二人はいた所はあつという間に草木が生い茂る自然公園から緑、黄色、赤といったキューブが浮かぶ謎の空間に変わってしまった。いた。

カービィが見渡してみる限りその空間内はとてつもなく広く果てがない。辺りには色とりどりのキューブと辺りを警戒している謎の少女の姿しかなかった。

「この魔女は本体の力は弱いけどこの広い結界の中のどこに潜んでいるかはわからない…」

そう言った黒髪の少女は無邪気にくるくと回って遊んでいるカービィを見る。その姿はまるで好奇心旺盛な子供のようであり、敵意の欠片もない彼に彼女も毒気を抜かれてしまう。

C (???) c) へぼよぼよ

「しらみつぶしに回っていくしかないか。はあ…あなたはもう後でいいわ」

遊んでいたカービィだったが、ハッと黒髪の少女がいた事を思い出し、彼女の方を見る。黒髪の少女はこの謎の空間を足早に進んでいた。

先ほど魔女だの結界だの聞き覚えのない言葉を言っていた。事情を知っていそうだし、どこか放っておけない雰囲気醸し出す彼女にカービィもついていく事に決めて彼女の隣まで行く。

ε || ε || ε || (???)) つ へはあい！

「…ふん」

彼が歩く度にぶよぶよと間延びした音がこの空間に響いていた。それにはクールに振る舞う少女の顔も次第に緩んでいく。その時。

っ

(?・o?) (ミっっ)

っ

「…なに?」

何かわからない事があるのか、先ほどから足を執拗につついてくるカービィに彼女は不機嫌そうに返事を返した。

何が何だかさっぱりといった様子のカービィは同じ目に遭っているというのに冷静に状況を判断し、すぐさま行動に移す彼女に説明を頼んでいるようだった。

「…本当にわからないの?」

(っ???) っ へぼよ!

自信満々に頷いてみせるカービィ。少女は溜め息を吐いていたが、なんだかんだ説明をしてくれた。

2. 鳥かごの魔女Battle!

(っ、お、c) ミシミシ

「なにこれ…」

ピンク玉が逃げようとする鳥マツチョコを凄いい勢いで吸い込む…黒髪の少女の目の前では今、そんな光景が繰り広げられていた。

逃げる鳥マツチョコと鳥かごの魔女の使い魔は羽根をばたつかせて必死に逃げようとしている…のだが、まるで某掃除機ダイトンが汚れを吸い取るかのような吸引力を見せている。カービイの口に使った魔の身体はどんどん吸い込まれていく!

ものの数秒もしない内に使い魔は口の中に吸い込まれ、それをカービイが飲み込んでしまった。すると…

「カービイの姿が変わった…!?鳥…?」

yyyyyyyy

!!(っ???)!へウイング!

ピンクボールだった彼の身体からは色鮮やかな鳥の羽根が生え、インディアン風の羽根飾りがカービィの頭に着けられていた。

彼は吸い込み飲み込んだ敵の能力を「コピーする能力」を持っているのだ！その力を用いたり用いなかったりで数々の星を救ってきたのはまた別のお話…

y y y y y

!! (???) !! へほよよ!

u u

「えっ?カービィ…きやつ!」

彼は羽根を広げると…大地を蹴って驚いている彼女を掴み、空高く舞い上がった!

宙に浮かぶキューブをかわしながら勢いに乗って軽快に進んでいくカービィ。その姿はまるで大空を高く翔けぬけていく荒鷲をイメージさせるのだが、どこかお間抜けな顔がそれを台無しにしている。

「…上から探すというのはいい案だけど、急に掴んで飛ぶのはやめてほしかったわ。カービィ」

上空から結界内を見渡すという作戦は功を成したようで、この結界を生み出している魔女を発見する事に成功した！

カービィの指差すその姿は鳥かこの魔女と言うだけあって人間の大きさを遥かに上回るほどの巨大な鳥かご、その中にはたまたまた巨大な人間の足が入っているという訳の分からない構造をしていた。

中の足は片方が普通の靴下でもう片方がハイソックスというのがおそらく魔女なりのお洒落なのだろう。

「…あれが魔女。あの魔女をあなたは倒せるかしら？」

y y y y y

c (???) つへぼくよぼよ！

地上に降りたカービィは黒髪の少女ほむらを降ろし、鳥かこの魔女を見上げる。人間から見ても大きなサイズ、彼からしてみれば山のような大きさだ。しかし、彼は臆すことなくその山に向かってダッシュしていく！

同時に彼の接近に気づいた鳥かこの魔女が足で軽快にタップダンスを刻み、付近にい

る数体の使い魔に命令をしていた。

「鳥かごの魔女は本体の力が弱いけど使い魔の数は多い。まずは使い魔から片付ける事をオススメするわ」

yyyyyy

シ(???) シへやつ!

魔女を庇うように立つのは先ほどカービイが吸い込んだ使い魔たち。突進の勢いに乗ったカービイは一番手前にいる使い魔を体格の差をもつともせず頭上へ投げ飛ばし、追い討ちをかけるかのように体当たりシャトルルーフ！そして、その使い魔を近くにいた使い魔に向かつて弾き飛ばす。

体勢を崩した使い魔たちに一瞬、構えをとったカービイは身体を高速回転させてそのままだ頭突きコンドルずつきで突撃していく！その頭突きで地上にいた使い魔は霧散し全滅となる。

残った空中で浮かぶ使い魔たちが動揺している隙に彼は素早く翼を広げ、何本か羽根フェザーガシを飛ばすとその羽根は寸分狂わず使い魔の胸に突き刺さり、残りの使い魔たちが地上へと落ちてくる。

（かなりの数の使い魔を無駄なく一瞬で倒す…あの子、見かけによらず戦い慣れている！）

はたして自分にあれほどの事ができるだろうか…暁美ほむらはカービイの戦闘能力を素直に賞賛していた。

瞬く間に使い魔たちを消滅させ、開けた道をカービイは加速し一直線鳥かごの魔女でボスへと向かう。

「さあ、次は何を見せてくれるの…！カービイ」

目にも留まらぬスピードで魔女まで近づいた彼は方向を変え、その場所から遙か上空へと急上昇する！結界の天井と思われる所まできたカービイはそこから勢いをつけて急降下！

高速で回転しながら風を切るようなスピードでぐんぐん加速し、巨大な鳥かご目掛けで落下していく。そして、勢いに乗ったまま頭突きを繰り返した！鳥かごとカービイのぶつかり合った衝撃が離れているほむらまで伝わってくる。

「…まだよ。カービィ!」

魔女を覆っていた鳥かごは落下の衝撃によって割れ、中の足が露わになる。しかし、カービィの攻撃はかなりのダメージを与えたものの仕留めるまでには至っていない!

ほむらはどこからか拳銃を取り出し、ふらつきながら立ち上がった足に構えるがそれは必要のない事だ。なぜなら…

y y y y y

c (???) v へぶいっ

立ち上がった足もとい鳥かごの魔女の中身の全体にはカービィの投げた羽根が突き刺さっていた。羽根が突き刺さった魔女はゆっくりと後ろに向かって倒れ、粒子状となって消えていく…とぼけた顔をしているものの戦闘においてはカービィは抜け目がないのだ。

「単独で魔女を容易に倒す程の実力…か」

っc

(???) シへはあい!

巨大な敵を倒したカービイはくるくると回転したり、ジャンプしたりして嬉しさをダンスに表現していた。そんな子供のような純粹さの裏側に魔女を軽く屠る實力を持つカービイ…そんな彼にほむらは興味を引かれていた。

(彼ならばもしかしたら…)

信じてみる価値はありそうね…パキパキと空間が割れ、元の自然公園の風景に戻っていく中喜びのダンスを踊っているカービイを見てそう呟く。

彼女、暁美ほむらもまたカービイとの出会いで未来が変わった者の一人である。

3. 一難去ってまた一難

魔女结界の中に閉じ込められたカービィとほむらの二人。カービィが鳥かごの魔女を倒した事で二人は無事に現実の世界に帰ってくる事ができた。

《ウイング》の能力を吐き出し、見慣れたいつものピンクボールの姿になるカービィ。吐き出した能力は星の形となってカービィの周りをクルクルと回っていたが、やがてポーンと音を立てて霧散していった。

そして、カービィはほむらの足元に行くのだが彼女は夜空を見上げて何やら難しい顔つき…心ここに在らずといった感じだ。

つつ

(っ?o?) つつ へぼよ?

つつ

「ああ…ごめんなさい。少し考え事をね…」

夜風でなびく髪をそつと抑え、彼女はクスツと笑みを浮かべる。そして、彼女は20cmほどのカービィの身長にあわせてかがみ、キョトンとしている彼に向かって手を差

し出した。

「カービー、あなたさえよければ、その…私の手伝いをしてもらえないかしら？もちろん、手伝ってくれるなら何だって…」

(っ???) っギョッ

ほむらの言葉を聞かない内に彼女の手を取ったカービー。というより何でもと言う言葉を聞いた瞬間に彼は素早く手を取ってコクコクと頷いていた。

なんだって…と言われた彼の頭はおそらく食べる事一色となっているだろうが、初対面のほむらはそれに気づかない。そして、ジユルリとよだれを垂らすカービーの身体を優しく抱きしめる。

「ありがとうカービー。ふふっ…よく見てみるとあなたって可愛いわね。どこかの白鰻頭とは大違い…」

どこかできゅっぷいというくしゃみやみかゲップかそんな声が聞こえてくる気がする…彼女はそのままカービーを腕で抱き上げるとどこかに歩き始めた。

時刻はもう深夜1時、もともと眠る事も大好きという事もあるが、戦闘の疲れがどつどつとでてきたカービィは目をパチパチとさせていた。そして、ほむらがずっと背中を優しく撫でていた事もあり、すぐに安らかにいびきをかいて眠りに落ちるカービィ。

(~~~~) ^::zzzz

u u

「私がどうしてあなたを信用したかわかる？カービィ」

腕の中で気持ちよさそうに眠っているカービィにほむらは独り言のように呟く。ほむらがカービィを信用した理由、それは…

「ふふっ…こんな事を言ったら二人は怒るかもしれないけどね。あなたがあの子にどこか似ていたからなのよ？」

ほむらが話すあの子というのはカービィが最初にあつた鹿目まどかの事だ。このピントをイメージさせる身体、今日知り合つたばかりで怪しさ全開のほむらをも信頼し、大胆にもこの腕の中で眠る純粹さ、そして戦闘の時に見せるいざという時の決断力…や

はり彼と彼女はそっくりだと思った。

(~~~~) ^:: z z z :: おやつ ::

U U

「…この子って何食べるのかしら。ドッグフードとかでいいの…？それとも虫とか魚？」

明日の帰りにでも見に行こう…そう思い彼女は到着した家のドアを開くのであった。

………

………

………

次の日、この日は月曜日で彼女…暁美ほむらは朝6時30分のアラームで目を覚ま

す。そこは中学生の少女とは思えない程、何も飾り気がない無機質な部屋。あるのはこじんまりとした机、小さな冷蔵庫、申し訳程度にある古い機種ノートPC…といった日常生活で必要なものばかり。

だが、そんな部屋の中で一際異彩を放つモノがあった。それはやはり…

(つゝー)へ…zzzz

「カービィ…さすがに起こすのは可哀想よね?でも、学校行かないと…」

実は今日はほむらが鹿目まどかも通う見滝原中学校に転校する日。彼女もここ見滝原に最近越してきたばかりで部屋の隅に積み重なっているダンボールがそれを物語っていた。

カービィのいびきをバツクに身支度を整えていくほむら。学校の制服へと着替えた彼女はカロリーメイトを朝食にし、素早く栄養補給もすませる。これで後は学校へ行くだけののだが…

「カービィをどうするのがいいのかしら…?お留守番はできないと思うし…」

チラツと眠りこけているカービィを見る。もし目を覚ました時、そばにほむらがいないかつたらどうなるだろうか：家の中で暴れるぶんなら全然構わない。だがもし、ほむらを探しに外へ出て付近の人の目についてしまえば確実に面倒な事になってしまう。

彼女としては一緒に行動したい所だが、連れて歩いてしまえばそれこそ本末転倒だ。何かいい案はないかと思っていた所：

「人目に付かないようにこの子を連れて歩く方法：あつ！そうだわ」

暁美ほむらの左手の中指に付いた指輪が妖しく発光する！すると、一瞬にしてほむらの左腕に中心部に黄金の装飾がついた円盤状の盾が装着される。

そして、ほむらは布団の毛布で大の字で寝ているカービィを優しく包むと：彼をその小盾の中へ“収納”した。後にこの判断は失敗であったと気づくのだが：今の彼女は問題が片付いた事に軽く一息つく。

「さあ、学校へいきましようか」

.....

.....

.....

「今日は皆さんに転校生を紹介します！いらっしやい暁美さん！」

ドアの前に待機していたほむらは一呼吸おいて教室の中へ入る。教室中の視線が黒髪を揺らして堂々と歩くほむらへと注がれた。

その中には昨夜カービィと出会って眠そうにしている鹿目まどかの姿もあった。ほむらは視線を意に介する事なく黒板に自身の名前を書いていく。

「自己紹介をお願いします！」

「…暁美ほむらです。よろしくお願いします」

無難に自己紹介をした彼女はぺこりと頭を下げた。えっ…もう終わり？とクラスの一同はポカンとしていたが、担任の教師である早乙女先生が慌てて拍手した事から一斉

にほむらに向けて拍手が送られる。

「じゃあ暁美さん！席は…その席についてね」

「はい」

短く返事をし、ほむらは座るように指示された席に座ろうとしたその時…

『ぼよー…ぼよよ!!』

「っ!？」

この教室内に舌足らずな声が響く！聞き覚えのあるその声に思わずほむらはビクツとし、その場で立ち止まってしまった。

クラスの一同は突然響いた動物の鳴き声のようなこの声にビククリしてザワザワしている。その声はいつたいたどこから聞こえてくるのか…それはほむらの左指についてある指輪からであった。

『ぼよー…ぼよっぼよ……』

「……………すみません…携帯の電源を切り忘れていました。それと、ちよつと気分が悪くなつたので保健室に行つてもいいでしょうか？」

「え…ええっ！学校で携帯は厳禁ですよ。気をつけてくださいね！」

急いでこの教室から出ようとするほむらだがその時、何やら複雑な顔をしたまどかが手を挙げて立ち上がる。

「先生！暁美さんは転校してきたばかりで保健室の場所がわからないと思うので私、案内してきてもいいですか？」

「あつ、そうですね！鹿目さん、お願いします！」

これには苦い顔をしていたほむらの顔がもつと苦いものとなるが、今はカービーへ説明する事が先なので力なく頷いた。そして、まどかと共に教室を出て行く…

余談だがクラスメートの一同は彼女…暁美ほむらに自己紹介や立ち振る舞いからクールな印象を受けていた。

しかし、あれが携帯の着信音であるならば彼女は意外と可愛いものが好きなのでは？

∴そういう噂がクラス内に急速に広まっていったという。

4. ハチャメチャが押し寄せてくる

コツコツコツ…全国を探しても珍しい全面ガラス張りの廊下をまどかに先導されて歩くほむら。今は授業中である為か、出歩く生徒や先生はまどかとはむらを除いていない。それは不幸中の幸いといったところだろう。なぜなら…

『ぼよーぼよぼよー』

「……………」

ほむら達が教室を出た後もカービイの音がずっと発されていたからだ。携帯の着信音と誤魔化したほむらだが、さすがにカービイの存在を知っているまどかは騙す事はないだろう…そう思っていると意を決したという様子のまどかが口を開く。

「その…あ、曉美さん…!」

「……………ほむらでいいわ。何かしら、まどか?」

オドオドしているまどかとは対照的に冷静に返事をするほむら。だが、彼女はぼよぼよ声を少しでも抑える為か、指輪ごと中指をギュツと握りしめていた。これで廊下に響く声も少しはマシになる。

「ざつきから曉美さんの方から聞こえてくるこの声ってカービイの声…だよね…あつ！
カービイって言うのは…きほんはまるって感じの子で…」

《まろか〜！まろか〜!!》

彼女の声が聞こえたのか、まどかの名前を叫び始めたカービイ。もうどうにでもなれ…ほむらはため息をついて左腕に円盤状の盾を展開させる。そして…

(つ・o・c) へぼよっ!?

「カービイが出てきた!?!ど、どどどうなってるのっ…」

ぼにゆつと言う独特な音と立てて床に顔を思いつきり突っ込んだカービイがまどかの目の前に現れた!彼は起きあがるとキョロキョロと周りを見渡し、頭にハテナマークを浮かべている。

そして、ほむらすかさずカービィを抱きかかえて円盤状の小盾を傾けた。すると…

「ねえ！ほ、ほむらちや…」

（ つゝ？ ）へんん？

まるでビデオの停止ボタンを押したかのようにまどかの言葉が不意に途切れる。いや…まどかだけではない。カービィがガラス張りの窓の外を見ると風で揺れていた木も青々とした空に流れる雲も全てが動きを忘れたかのようにその場で静止していたのだ！

それはほむらと彼女が抱きかかえているカービィの二人を除いて…

「…これが私の能力なんだけど、こんな所で見せるとは思わなかったわ。カービィ」

（ つゝ？ ） つくのりよくう？

「そう、私と私が触れている物以外の時間を止める能力よ。それと…さつきあなたがいたアレも能力の一つね」

時間停止、それと盾の中に物を出し入れできる能力。それが彼女が保有する能力なの

だが…カービィは首を傾げてぼんやりとした顔でほむらを見ている。

「どうしたの？何かわからない事がある…？」

（？…？）へおなか、すいた！

ほむらはここで誤解をしていた事に気づいた。盾の中の空間で目が覚めたカービィ、てつきりどうしてここにいるんだろう？そして、ほむらはどこにいるんだろう？それを説明してほしいくてカービィはずっと声をあげていたものだと思っていた。

しかし、実際は空腹を訴えてほむらを呼んでいたただけだったのだ！

「あなた、よく悩みのない子だとかって言われるでしょ…」

（っ…っ、）っへんむっ！

つんつんとカービィの頬を軽くつつきながら呆れ混じりに呟くほむらにカービィは少し怒ったような雰囲気ですっぽを向く。

その子供のような仕草に笑ってしまうほむらであったが、ふとカービィが口をモゴモゴさせている事に気がついた。

「カービー…？何を食べてるの？盾の中には食べられるような物はなかったと思うけれど」

（ つ ・ ― ）へペツ…まづい…

そう言つてカービーが吐き出したのは拳銃に装填する弾だ。カランコロンと音を立てて床に転がるソレを見た時、ほむらは無性に嫌な予感が頭の中をよぎる。

（いや…まさか、カービーが盾の中の物を食べるなんて事は…）

急いで盾の中の物を確認するほむら。彼女が手をつ突っ込んで中をまさぐると…スカツと空気を掴んだ感触がする。やはり、嫌な予感は的中していた。

「……………全部ない…手榴弾からロケットランチャー…その他もろもろ全部無くなつて…食べた、の？」

（ つ ・ ・ ）へぼよ…

それにはしばらく放心していたほむらだったが深いため息をつき、起こってしまった事は仕方がないと気持ちを切り替える。

武器はまた手に入れる事ができるので…子供を前に怒りを露わにする程、ほむらの心は狭くはなかった。言い聞かせてなかった自分が悪いと考え、彼の頭をそつと撫でる。

「カービィ…お昼まで静かに我慢できそう？我慢したら今日の夕飯、好きなものを食べさせてあげる」

（――く――）へ………あいつ

盾の中では遊んでもいいけどあまりうるさくしない事。それと何か緊急の用事がある時以外は話しかけない事。

それを守れたら好きなものを食べさせる事を条件にしぶしぶ盾の中へ戻っていったカービィ。これでひとまず問題は片付いた…残る問題は…

「まどかをどうするか、ね…」

口元に手を当ててあたふたした状態で動きを止めているまどかを見ながらほむらは

考える。もういつその事、自分の素性とカービイの事を話してしまおうか…

もうそんな事まで考えてしまっていたが頭をぶんぶんと横に振り、しばらく考えた末にほむらは溜め息をついて時間停止を解いた。

……

……

…

「ねえ…！ほむらちゃん！いったい何がどうなって…あれ？あの子は…」

先ほど何かのマジックのように目の前に突然現れたカービイの事を尋ねようとしたまどか。

しかし、当のカービイは影も形もなくこの場にいるのはまどかとほむらの二人だけ。

周りを見渡してカービイを探すまどかにほむらは…

「……………何の事かしら?」

ほむらが選んだのはいかにも、私は何も見ていませんし聞いていませんといった様子で振る舞う事だった。

少し…いやかなり厳しいかもしれないがカービイは姿を消し、能力を解除した際に左手の盾も消えた為、この場に残った証拠は何もない。

「えっ!?か、カービイだよ!さっきここに…いたはずなんだけど…あつ!私の名前を呼ぶ声も聞こえたよね?」

「カービイ?声?さて…私には何の事だかさっぱりね。それより保健室はこの先だったかしら?」

「そ、そうだけどお…もうカービイの声も聞こえないし…気のせいなのかな?」

自分は確かにこの目で見たような気がした…けれど、一緒にいた彼女が見ていないのであればあれは幻か何かだったのではないか?まどかは徐々にそう考え始めていた。

非日常的な現象は案外簡単に丸め込めるものだ、これでまどかもスルーしてくれるはず……そう確信するほむらであつたが……

「……また会えたかと思つただけだな……家にカービイが喜びそうなおやつも用意してあるのに……」

マズいとほむらが思つた時には遅かつた。盾の中のカービイは敏感にその言葉に反応し、今度は『まろか〜おやつ〜』と声を出し始めたのだ！これにはほむらももうお手上げである……

「……………放課後、あいてる？」

「……………うん、カービイの事とかいろいろ教えてね。ほむらちゃん」

……………

……………

……………

それ以降はカービィは約束を守って静かにしていた（昼寝をしていた）為、特に問題はなくこの日の授業を終えるほむら。

転校生で思わず目を引いてしまう程の美少女…なおかつ授業では成績優秀、運動神経抜群と超ハイスペックぶりを見せた彼女にはクラスメート達から次々と遊びのお誘いがくる。

しかし、先約があるからまた今度と断った彼女は皆に挨拶をしてまどかと待ち合わせた校門の前に行った。するとそこには…

「よっ！転校生！」

「ごめんね、ほむらちゃん…私もダメだってさやかちゃんには言ったんだけど…」

同じクラスでまどかと仲が良い美樹さやかがまどかと共に待っていたのだ。はあ…と深いため息をついたほむらは重い足取りで彼女たちの隣へ行く。

「あたしは美樹さやかだよ！よろしくっ！」

「…ついてくるのは構わないけどこの事は絶対に他の人に話さない事。いいわね、美樹さん?」

「りよ〜かい! 軽くまどかから聞いたんだけど…デュエルディスクみたいな物からピカチュウみたいなモンスターを召喚? できるんでしょ?」

「……………ん?」

5. ピンクの悪魔と白の悪魔

——まどかの家

人目につかない所がいい…そうほむらの一声でとりあえず三人はまどかの家に行くことにした。

そして、彼女の部屋に入るとまず目を引いたのは勉強机の上に置かれたまどか一人で
は到底食べきれないであろう大量のお菓子の山だ。

「ま、まどか…このROCKYにんまい棒その他もろもろ…いったいどうしたのさ？」

「えっ？ ああ…昨日の事、さやかちゃんにも話したよね？ お菓子をこうして置いてたら
カービィが帰ってきてくれるかなって…」

「という事はこの部屋の有り様も…」

彼女の部屋の窓は開きっぱなし…そして、床に散りばめられた多種多様なぬいぐるみ
達…これらはまどかが先ほど言っていた言葉から間違はなくカービィの事を意識して

いる事がわかった。

「どうやらまどかはほむらの想像以上にカービィに会いたがっていたらしい。それはカービィも同じようで…」

『まろか〜！おやつ〜！』

「あつ！カービィの声が聞こえる！」

「これがピンクのピカチュウの声…朝聞いた声と同じだ…」

昨日、運命的な出会いをして空腹の所を助けてもらったカービィもまどかの事をかなり好いているだろう。ほむらの事はまだ名前を覚えて貰えていないだけかもしれないが、これまで一度として名前を呼ばれた事はなかった。

しかし、まどかの事は朝に廊下で話した時からずっと名前を呼んでいる。おそらくご飯を基準に考えるカービィの中ではまどか〜ほむらとなっているのだと思った。

「…ほ、ほむらちゃん！カービィを…」

「そうね。まずはカービィを外に出してあげましょうか…」

ほむらが左手を前に突き出すと彼女の左腕が紫の光を放ち、何かを形作っていく。それは円盤状の小盾で先ほどから聞こえてきていたカービイの声もより鮮明に聞き取れるようになった。

そして、ほむらはカービイの腕をイメージして盾の中に手を突っ込むと…一気に掴み出す！その手にはピンク色の丸っこい生き物、カービイがいた。

（ー 〇?）へぼよっ!?

「カービイ！わあああ…会いたかったよ〜」

ほむらが取り出したカービイをすかさず抱きしめて「ルミナス」をするまどか。（注：ルミナスとは↓（つ、ω、（ω、c）ほっぺたすりすりの事）その様子にはほむらとさやかもビツクリである。

「ピンクのボールみたいなのだけだ…こいつはいったい何なのさ？それにあんたのそのデュエルディスクも…」

「はあ…これはデュエルディスクじゃないわ。盾よ、盾！まったく…これはね…」

“——それは僕から説明させてもらってもいいかな？暁美ほむら…”

それは突然の事であった。ほむらの言葉を遮ったのは男性とも女性とも言えるであろう中性的な声。その声を聞いた瞬間、ほむらはすかさず盾に手を突っ込み武器を取り出そうとする。

しかし、あいにく盾の中の物は全てカービィに食べられたばかり。空気を掴んだ感触しかなく、自分が何も出来ない事を悟るととびつきりに顔を歪め、湧き上がる怒りに舌打ちをして顔を上げる。するとそこには：

「キュウベえ……」

開いた窓の所には白兎のように真っ白な毛並みをした小動物がいた。ほむらが吐き捨てた言葉から彼はキュウベえと言う名前である事がわかる。

キュウベえの赤いビー玉のような瞳は憎しみを込めて睨む少女へ向けた後、隣で驚いている様子のまどか：いや、彼女が腕に抱くカービィを見つめていた。

“ ……驚いたよ。まさか、こんな所で君と出会う事になるとはね。噂はかねがね聞いているよ？カービィ”

（ つゝ？ ） へんん？

目を閉じて首を振るキュウベえはまるでカービイを知っているかのような口振りです。カービイはキョトンとしている為、キュウベえが一方的に知っているようだ。それにはほむらも驚いた様子で窓の前で佇む彼に詰め寄る。

「まって…あなた、カービイを知っているの!？」

“ …いい意味でも悪い意味でも彼は有名だからね。それより彼女たちと話をしたいんだけど構わないかな？”

「ね…ねえ、さつきから色々な事がありすぎてわけがわからないんだけど…そいつは誰なの？ピカチュウの親戚？」

ハテナマークを頭いっぱい詰り込ませた様子のさやかとその後ろで不安そうにギョツとカービイを抱き締めているまどかが全てを知っているであろうほむらを見る。

彼女は複雑な顔をしていたがやがて観念したのか頭を抑えながらキュウベえに背を向けた。話してもいいと取ったキュウベえは床にちよこんと飛び移り、床に散りばめられた大量の人形を避けてまどかとさやかの前に行く。

“ 僕の名前はキュウベえ。僕は君たちにお願いがあつてここにきたんだ！まどか、さやか！ ”

「あ、あたし達の名前を!？」

「お願いって何なの？キュウベえ」

“ 僕と契約して魔法少女になって欲しいんだ！あつ…魔法少女というのはね…”

魔法少女、それは魔力の源であるソウルジェムを手にしてみんなに希望を振りまく存在の事らしい。

魔法少女になった者はこの世に絶望を撒き散らす魔女と呼ばれる存在と戦わなければならぬ。その魔女や魔法少女が生み出す使い魔は人間たちを死に追いやるという。

この世界で起こってしまった訳の分からない自殺や殺人事件のそのほとんどが魔法少女が原因のものと言われている。

“ ……ここまではいいかな？ ”

「うん…魔法少女っていうのは正義の味方だって事はわかったよ」

人間たちを死なせてしまう魔女をやつつけるのが魔法少女。そう理解したまどかやさやか。ちなみにカービィはまどかの腕からするりと抜け出し、勉強机に大量に置かれていたお菓子を美味しそうに食べていた。

話の腰を折らないようにと気を使ってか、それともただ単にお菓子が食べたかっただけなのか…おそらく、いや確実に後者だろう。

「でも、魔法少女になったらさ…魔女つてやつと戦わなきゃいけないでしょ？今のご時世そんな事する奴いんの？」

“ そうだね。だから、僕は魔法少女になってくれたら何でも一つだけ！君たちの願いを何でも叶えてあげる事にしてるんだ！”

（ 〇 — 〇 ） へっ!!

何でもという言葉にまたしても反応するカービィ。キュウベえに呆れた様子で“君は人間じゃないから無理だよ”と言われガツカリしている、がすぐに復活してお菓子を食べ続けていた。

「えっ！何でも一つだけってなにその強化前のドラゴンボール」

“その認識で間違いはないよ。願いを決めて僕との契約で出来上がるのが今曉美ほむらの左手についてある宝石、ソウルジェムだ。どうやら彼女も魔法少女みたいだね”

「みたいだねって…あんたが契約？したんじゃないの？」

“…僕は彼女と契約した覚えはない。どうして彼女が魔法少女になっているのか？それは僕が知りたいくらいさ”

首を傾げて可愛らしく視線を向けるキュウベえに忌まわしそうに鼻を鳴らしてそっぽを向くほむら。彼女はカービイの隣へ行き、笑顔でお菓子を頬張り続ける彼の為にんまい棒の包装紙を剥がしてあげていた。

“曉美ほむら…彼女は素性の知れない魔法少女だ。決して信用はしない方がいい。それにあのカービイもね”

キュウベえはほむらとカービイに聞こえないようにまどかとさやかに語りかける。怪訝な顔をしている二人へキュウベえは畳みかけるように説明を加えていく。

“カービイ、彼はこの星の生命体ではない。この宇宙の辺境にあるポップスターとい

う星に住んでいたはずなんだ。なぜ彼がこの地球にやってきたのか…何か考えがあったら教えてきたのは間違いないだろう”

“ そんな二人が組んでいる…これは間違いない何かを企んでいると思わないかい？だから、決して心を許さない方がいいよ…”

シリアスな雰囲気でキュウベえは話しているのだが、後ろで大きく口を開いているカービーへほむらが開封したんまい棒を3本手にしてあくんをしている姿を見ると二人は何とも言えない表情となってしまう。

「…ふふっ…あつー…ほん…くだらない魔法少女の話は終わったのかしら？」

“ うん、だいたいはね。どうだいまどか、さやか。素晴らしい魔法少女について興味がわいてきたんじゃないかな？”

「…叶えたい願い…かあ…私はまだよく考えられないなあ」

「そうだね…金銀財宝とか不老不死とか満漢全席とか考えられるには考えられるけど…」

さやかの発した満漢全席にカービーはピクリと反応する。おそらく言葉の意味はわ

からないもののがそれが食べ物とを差す言葉である事はわかったようだ。彼の並外れた食欲にこの場の皆が驚愕する…

“…とにかく今すぐには言わないからよく考えてみるといいよ！それとカービー、二人だけ話したいんだ。少しいいかな？”

（ つ？〜c）へモグモグムシヤムシヤ ゴクン

c（ ??? ） つへはあい！

6. 地球のお菓子は美味しい

桃色で丸っこい身体をした一頭身の生物。そして、それに対峙するのはこれまた小動物を模したぬいぐるみのような白い獣。彼らはまどかのベッドの上で向かい合っていた。

その様子を何とも言えない表情で見ているまどかとさやかとほむらの三人。今現在、キュウベえがカービィと話がしたいと言い出した為、彼らはテレパシーで会話をしている最中だ。

「いったい何を話してるんだろ…」

「さあ、あの白饅頭の事だからどうせろくでもない事を言ってるんじゃないかしらね」

ふんと鼻を鳴らし、ほむらは腕を組む。彼女は何故か魔法少女のサポーターだというキュウベえを嫌っている。先ほどキュウベえは彼女を信用してはいけない…と言っていた事を思い出すまどかだが、首を横に振ってその理由を聞いてみる事にした。

「ほ、ほむらちゃん…キュウベえの事が嫌いなのか？」

「…奴は人間の価値観が通用しない生き物よ。そんな奴を好きになんて絶対にならないわ」

「なんかやましい事をしているからじゃないんだよね？転校生」

話に加わってきたさやかは疑惑の目をほむらに向けているようだ。とはいってもまだ半信半疑といった様子でキュウベえの事もいまいち信じられていないように見える。

「私はただ私の願いの為に戦っているだけよ。そう…私が叶えた願いの為に…」

「願い？ほむらちゃんはどんな願いで魔法少女になったの…？」

「っ！…それは…あなたが知る必要はない事よ」

そう言ってそつぽを向くほむらにさやかはうぐんと唸り、やはり信用できていなさそうだ。しかし、ほむらのそんな様子はまどかにはどこか悲しそうに見える…言葉に言い表せない何かがあるのだろうかと考えていた。

「そっか、じゃあ聞かない！ほむらちゃんって魔法少女なんだよね？どんな魔法が使え

るの?」

「どうして私がそんなっ………はあ、わかった。見せる…見せるから」

押し強いまどかに根負けしたほむらが時を止めて二人にマジックを披露する中、カービィとキュウベえはというと…?

“カービィ…いい加減本当の事を聞かせてくれないかい?”

『ぼくよ。ぼよよっ! (だくかくらく! ワープスターがきゅびびびくんとてすごい音を立てたかと思っただらいつの間にかこの星にいたんだって!)』

“いやいや…座標を決めてその場所に飛ぶのがワープスターだ。君が地球にくるつもりがなければ飛んでこない。それにいつの間にかって…確かワープスターにワープの機能はなかったはずだけど?”

『ぼよ? ぼよ! (うくん? 言葉が難しい! もっとわかりやすく言ってよ!)]』

“ワープスターはワープしない。行き先に向かって宇宙を超スピードで移動する乗り物だ”

『ぼよよよよっ (あははははっ…ワープスターって名前なのに変なの!)』

“はあ…話にならない。まったく、君は相変わらずのようだね。カービィ”

『ぼよ? (あれ? やっぱり会った事あったっけ? 思い出せないや)』

“ 僕が一方的に知っているだけだよ。 ギヤラクテイック・ノヴァ 大 彗 星を自分勝手に悪用して強大な力を

持った道化や僕たちも手を焼いていた暗黒の一族たち、 ハルカンドラ あの星の遺産を手にし宇宙を支

配しようとした虚言の魔術師、さらには全てを滅ぼすべく蘇った太古の破神 エンデニル すら打ち

破つて見せた: 君は自分で思っているよりも有名なんだ”

『ぼよよ? ぼよぼよ (そんな事したっけ? 覚えてないなあ: けどおやつのかき盗られて追いかけたのは記憶にあるよ)』

“ : はあ: 君に話すつもりがなければもう聞かないよ。 そのうえで単刀直入に言う。 君は一刻も早くこの星から離れた方がいい”

『ぼよ? (なんで?)』

“ この星はあと1ヶ月かそこいらで滅んでしまうからだ”

『ぼよよよよっ!? (滅ぶってなくなっちゃうって事!?)』

“ そうだね。 君には全てを話しても問題なさそうだし教えてあげるよ。 1ヶ月後、ここ見滝原に最強の魔女がやってくるんだ”

『ぼよよ (魔女ねえそれってどれくらい強い?)』

“ 最強を冠する魔女だ。 この地球上の文明をひっくり返すなんて事は他愛もない: だけど、この星を滅ぼすのはその魔女じゃないよ”

『ぼよよよよつ（あらら、倒そうと意気込んだのに…）』

“ …？君は戦うつつもりだったのかい？”

『ぼよ、ぼよよよ！ぼよ？（地球つてお菓子美味しいからねく無くなるのはやだよ！それでそいつじゃないならどいつがやるの？）』

“ この星を滅ぼすのは…その鹿目まどかになるだろうね”

『ぼよつ!?ぼよ…（ウソ!?まどかは絶対にそんな事しないように見えるけど…）』

“ 簡単に説明するとまどかはその魔法に対抗する為に魔法少女になるだろう。ああ見えて彼女はとてつもない力を秘めていてね…保有する力の量で言えばもしかしたら君が倒した神に匹敵…いや、それ以上かもしれない”

『ぼよ？（だから滅んじやうつて事？まどかはそんな事しないよー）』

“ いや、魔法少女に契約したならば結果はどうあれいずれは彼女は星を滅ぼす存在となるね。これは断言できる”

『ぼよ…ぼよ？（ふくんよくわからないけどそうなのかくでも契約したらの事でしょ？しなかつたら？）』

“ …そうだね。一時的には地球の崩壊は食い止められるだろう。だけど、僕はどんな手を使つても彼女を契約させてみせるよ”

『ぼよ？（あれ？君つてもしかして悪い奴？）』

“この星の住民にとってはそう映るかもしれない。だけど、これも宇宙の存続の為に必要な事なんだ”

『…?ぼよ! (どういふこと!?)』

“君にわかるように話せば2〜3時間はかかると思うけど構わないかい?”

『ぼよ! (えっ!?) 飯の時間に遅れちゃうよ! 簡単にわかりやすく三行くらいにして教えて!』

“……:僕は魔法少女に契約した際に彼女たちが希望を抱いたり絶望を抱いたりして得られる感情のエネルギーを回収するのが目的なんだ。そのエネルギーを回収し、有効的に使わなければこの宇宙はすぐにでも崩壊の道を辿る事になる。僕たちが住むこの宇宙がなくなるよりかは宇宙の外れにある星の一つや二つの犠牲はやむを得ないと思うけどね”

『ぼよよ…:ぼよっ! (うん、よくわかんない。けどきつとこの星も宇宙も救える方法が必ずあるはずだよ!』

“:やれやれ、まあ好きにしてみるといいよ。僕は僕のものだけにするだけさ。とはいえ君は宇宙の存続の為に必要な人材だ。この地球が崩壊する時は君だけとはなんとか助け出してあげるよ”

『ぼよ!ぼよ! (食べ物美味しいこの星を消させるわけにはいかないよ!絶対にこ

の星も宇宙も救つてみせる!」

“ほどほどに期待しているよ、カービー。さて、話は変わるけどその暁美ほむらとはどういった間柄だい?”

『ぼよ?ぼよ! (ほむら? ?なんか困つてたし、手伝つてくれたらいろいろと食べさせてくれるつて言つてたから一緒にいるんだけど:それがどうかしたの?)』

“手伝う: ?彼女が何を目的としているのか、君は知っているのかい?”

『ぼよ?ぼよ (ううん、知らないよ?悪い奴には見えないから大丈夫大丈夫)』

“彼女と行動を共にするつもりなら彼女の行動がわかり次第僕に教えてくれないか?おそらく暁美ほむらは僕の邪魔をするつもりだろうからね”

『ぼよ! (うん!後で聞いてみる!)』

“ :話は以上だ。何かわかつて僕を呼び出したければ頭の中で僕を呼べばいい。すぐに駆けつけるよ”

『(キューバー!)』

“僕は目の前にいるだろう?今呼んでも意味ないよ”

『ぼよよよよつ (ホントにわかるんだね?わかつたよ!)』

こうして宇宙人仲間であるキュウベえとのテレパシーが終わる。キュウベえはまだ

かとさやかに魔法少女についての説明を軽くした後、どこかに消えた。

その後はまどかが用意したお菓子を全て完食し、それなりに腹が膨れたカービィはベッドで横になりいびきをかいて眠ってしまふ。

まどか（密かにほむらも）はそんな姿に癒やされ、キュウベエの話聞いて警戒していたさやかも何だか馬鹿らしくなってカービィの事を疑うのをやめたそうだ。

7. 薔薇園の魔女 Battie!

辺りは赤い薔薇が咲き乱れ、不気味な模様の蝶が舞い踊る異質な空間。見上げれば視界に入るのは蝶のような羽根を持つ緑へドロを被った巨大な魔物が俊敏に上空で飛び回る姿。

ここは薔薇園の魔女の魔女結界で結界を感知したほむらとカービーがその魔女と交戦している!

「あのへドロは臭いがきついから触れちゃダメよ!もしあれに触ってしまったなら手洗いはする事。汚い手で家の物に触れちゃダメ。いいわね?」

(???) へぼよ!

上空から人の何倍もの大きさを誇る巨体を活かして押しつぶそうとしてくるへドロの魔女を時を止めて回避するほむらと後方にダッシュして紙一重でかわすカービー。

あちらこちらに生えてある赤い薔薇に集る蝶たちはカービー達に反応して綿の化物へと姿を変え、次々と襲いかかってくる!体当たりを仕掛けてくるその魔女の使い魔

たちにカービィは口を大きく開くと…

(っ、o、c) ミシミシ

10はいたたであろう使い魔を驚異的な吸引力で吸い込みそれを飲み込む。すると、カービィの身体は発光しシンプルだった彼の姿は大きく変化していく!

緑の星模様がついた白いバンダナ、手には自身の身長以上に大きな箒とその姿はまるで掃除でもするのかと思うものになった。

√ (???) つーD三へクリーン!

「カービィ! そいつらは倒しても倒してもキリがないわ。使い魔は私がかどうかするからあなたは魔女をお願い!」

武器を全ておじゃんにされてしまったほむらは唯一武器になりそうな物で家にあつたゴルフクラブを振り回して向かってくる使い魔たちをぶっ飛ばしつつ、上空で飛び回る魔女にぶつけるといふ地味な嫌がらせをしている。

彼女の言葉に頷いたカービィは箒に跨がると某世界的に有名なあの魔法使い映画よ

ろしく浮かび上がり、上空にいる魔女に急接近！しかし、近づいてくるカービイを迎え撃つべくか魔女はその場で静止し、下半身から伸びる黒い触手を伸ばす。

(っおっ?) っへぼよっ!?

茨のような触手によって道を阻まれるカービイ！彼が被弾覚悟の突撃でいこうとしたその時、ふいにカービイの相手をしていたはずのヘドロの魔女が血相を変えてカービイの横を通り過ぎていつてしまう。

魔女の進行方向にはゴルフクラブを振り回してこの空間に咲き乱れている薔薇を散らすほむらの姿！彼女は向かってくる魔女を一瞥すると…

「…カービイ！今よ！」

くくミミミ (っ?c) っーD三

時間を止めて魔女の怒りの突撃をかわしたであろうほむら。彼女はカービイが気づいた時には自身の背後にいて、この身体を掴み上げたかと思うと…魔女に向かってぶん投げた！

ほむらの力は魔法少女である為か、普通の中学生はもちろんの事、大の大人も上回る力を持っている。そんな彼女の力も加わり、薔薇をバラバラにされて大きな隙を見せている薔薇園の魔女に向かって箒を突き出し突撃していく!

どこからともなく現れた魔女の使い魔が邪魔をしようと立ちはだかるが、それをほむらが片付ける。そして、カービーがヘドロを被った魔女の頭に箒を振りかぶった!さらに…

??

(っ、お、) っ?ミ／

「箒で魔女の頭を連続攻撃! いや…あのヘドロを綺麗に清掃している!」

《クリーン》の能力…それはその名が現す通り、清掃に特化した能力である。魔女の頭のヘドロはカービーのとめどない連続掃き掃除でみるみる落とされていく!

そして、トドメと言わんばかりにどこからともなく取り出したバケツの中の水をぶっかけて全ての汚れを取り除いた。

すると、倒したという判定になったのか魔女の身体は光の粒子となって消滅し、この魔女結界もパキパキと音を立てて崩れていく…

「やったわね、カービィ！」

(っ???) っ(二)

変身を解いて元の制服姿となるほむらとコピー能力を吐き捨てるカービィ。ほむらがカービィに合わせて手をかざすとカービィがその手にハイタッチ！

今日の晩ごはんは何にしようかなんて話し合いながらこの場から立ち去ろうとしたその時！

「…暁美さんにカービィ君ね…あなた達の実力は見せてもらったわ」

二人の前に現れたのは金髪縦ロールの髪型で存在感の凄まじい胸に引き締まったウエストというナイスボディの少女。その手にはマスクेट銃、髪飾りにしているソウルジェムからほむらと同じ魔法少女である事が窺える。彼女の接近にほむらは身構えるのだが…

(?o?) へくる…くる…コロネ…?

「ぶっ…確かにコロネ…！くっ、ふふっ！」

カービィはまず目の前の少女のその奇抜な髪型に突っ込んでしまっていた。コロネというカービィの言葉に警戒していたほむらも思わず吹き出してしまふ。対する彼女はその言葉に目が点となっていたが…

「な…なによ!!あなたたち馬鹿にしてるの!」

c (???) つへくるくる!くるくる!

顔を真っ赤にして怒る突然現れた謎の魔法少女。おそらくカービィは彼女をくるくるコロネとして認識したのであろう。短い手を彼女に向けてくるくると連呼していた。

「これはコロネなんかじゃないの!れつきとしたオシャレなの!」

少女は声を荒げてコロネを否定するのだが、カービィは言葉を覚えたばかりの子供のように無邪気にくるくるコロネと言いつける。するとほむらも悪ノリしてしまつたのかカービィの高さに合わせてしゃがみこみ…

「…あれはドリルかもしれないわ」

「(???) つへドリル〜！」

「く〜く〜／＼／＼うう〜っ！もうっ!!」

コロネから一転、ツインドリルと認識されたグラマーな金髪魔法少女。彼女はいつた
い…？

8. 巴マミとの出会い

「ひつく…ぐすつ…なによお…」

カービィにドリルやらコロネやらいろいろと好き勝手言われて怒っていた謎の魔法少女。ついにはその場に座り込んで泣き出してしまった！これにはほむらとカービィもやりすぎたと反省をしている。

この何ともいえない空気を変える為にほむらがおいおいと泣き崩れる彼女の背中を撫でつつ質問をしていく。

「ゴ…ゴめんなさい、やりすぎてしまったわ。それでその…私たちに何か用があったんじゃないの？」

「つー…ー）へコロネ…」

ボソツと禁句を口にしてしまうカービィにぶつと吹き出してしまうほむら。彼女の後ろで背中を撫でるほむらの目の前にはそのコロネがあった。

なるほど…見れば見るほどコロネとかドリルとかそういうものに見えてくる…そう思いついながらももう片方の手で口元を抑えて必死に笑いを堪えるほむら！幸いその様子に彼女は気づく事はなかったようので涙を拭い、そつと立ち上がる。

「…まず自己紹介させてもらおうね。私は“バマミ”コロネでもドリルでもない。と！も！ええ！マ！ミ！だからね？」

「え、ええ…巴さん、ね」

c (???) つへマ…ミ…？コロネマミ〜！

カービィが口を開いた瞬間、この場の時の流れが止まった！それは比喩などではなく、笑いを堪えきれなかったほむらは時間を静止させた為である。コロネマミという語感の良さにやられてしまったほむらは一人色を失った世界で大爆笑していた。

一分間笑い続け、気持ちを落ち着ける為に深呼吸した後能力を解いて元の時間に戻る…

「…カービィは言葉に不慣れなの。だから許してもらえないかしら？」

「……………わかったわ。それで話の続きだけ…私はこの見滝原を守る魔法少女、キュウ

べえから聞いたんだけどあなた達がイレギュラーの二人ね？」

「…だとしたらどうするの？」

先ほどの空気が打って変わってビリビリと張り詰めたものになる。ほむらは彼女から距離を取り、笑い疲れたのかうとうとうとしているカービィの横に並び立つ、がバママミは

：

「誤解しないで！私はお礼を言いにきたの！」

「お礼？私やカービィがあなたに何かしたような覚えはないのだけれど…？」

あたふたと手を振るママミにほむらは毒気が抜かれほむつと首を傾げる。ほむらやカービィがした事といえば…

「この魔女を退治してくれたでしょ？本来は私が倒すつもりだったのだけど…ちよつと忙しくてここまでするのに時間がかかったの」

「ああ…そういう…別にあなたの為じゃないわ」

ほむらがどうして魔女を狩っていたのか…それはグリーンフィードという魔法を使う為に必要なアイテム、それを魔女から回収する目的もある。しかし、一番の理由はいずれくる戦いに備えてカービィとの連携に慣れておくというものであった！

「いいえ、それでもお礼を言っておかないとね。もしあなたがいなかったらこの町の人に被害が出ていたかもしれないもの…」

マミのような普通の魔法少女は魔女の出現位置とこの世界に結界を開くまですわらない。その為、魔法少女の行動は勝手に回ってしまう。

しかし、ほむらは不思議な事におおまかにだが魔女の出現位置がわかるのだ。なので、今回の薔薇園の魔女は運が悪い事に結界を開いた瞬間にほむらとカービィに殴り込まれその生涯を終えてしまった。

「だからね、お礼をさせてほしいの！イレギュラーだから関わりすぎないようにってキュウベえには言われてるんだけどこれくらいは構わないはずよっ」

「お礼って…さっきも言ったけど別にそんな見返りを求めてやった事では…」

c (???) つへおやつ〜！

食べる事に関しては並々ならぬ思い入れがあるカービィはその言葉に食いつき、マミの足元へ駆け寄ってぽよぽよしていた。

食に目がくらんだ彼を止めるのは不可能である事はまだ付き合いの浅いほむらでもわかる。言葉を切ったほむらはため息混じりに…

「はあ…だそうだから彼に何か食べさせてくれたらそれでいいわ」

「うふふつ、わかったわ！私の家にいらっしやい！」

………

………

… 【バマミのマンション】

どこか嬉しそうな様子のママに連れられやってきたのは有名人が住んでいそうな高級なマンション！彼女の部屋の中もとても広い上にほむらの部屋とは違い調度品だけでなく女の子らしい装飾品も置かれており、ガラス張りとなっている壁からは外の景色が一望できるようになっていた。

ソファアに座ってキッチンへ消えた彼女を待つほむらとカービィ。ママが用意するお菓子と紅茶の匂いにカービィはそわそわしておりほむらがそれをたしなめる。

「お菓子は逃げないわ。だから行儀よく待ちましょう？」

(っ??) っへ…そわそわ

ほむらが注意した事によりしばらくじっと待っていたカービィ。しかし、すぐに立ち上がりキッチンとリビングを行ったり来たりしている。どこから出したのかいつの間にかフォークもその手には握られていた。

もつともカービィは以前、おやつを食べる至福の時間にそのおやつが何者かに盗まれてしまうという過去を持っていたりするのでそれは仕方がないと言えるのかも知らない。やがて…

「お待ちせーさあ、召し上がれっ」

マミが持ってきたのはたつぷりの生クリームとイチゴがのったホールのショートケーキとスライスされたレモンが浮ぶレモンティー！

それが机に置かれた瞬間、ぱあああとカービイの顔が明るくなる。そして、切り分けられ渡されたそのケーキにフォークを使うのかと思いきや、やはり吸い込みで一氣にそれを食す！

Σ(？o?c)へぼよっ!?

カービイは驚いていた。なぜなら、このショートケーキは今まで食べたケーキの中で一番と自信を持って言えるからだ。甘い甘い濃厚な生クリーム…ふわふわのスポンジ…そしてそれらに見事にマッチするショートケーキの目玉であるイチゴ！

普段は表情をあまり崩さないほむらもそのあまりの美味しさにほんの少しだけ笑みをこぼしてしまう。彼女は口に運んだケーキに何かを思い出しているのかゆっくりと噛み締めるように食べていた。

「…美味しい」

「口にあつたようでよかつた…一応私が作ったものなんだけどね？誰かに振る舞うつていうのはあまりなくて…」

「(???)へおかわり！」

「うふふつ…本当に子供みたいね…はい、カービイ」

ホールのケーキはほとんどカービイが食べ尽くす結果となつてしまつたが、そのケーキのおかげかカービイはだいぶマミに懐いていた。今ではマミの腕の中で彼女に遊ばれている。

c (???) つへぼよ！ぼよよ！

「ふわふわでマシユマロみたいな触り心地…癒されるわ〜一緒にいる暁美さんが羨ましいなあ〜」

「…そろそろ日も暮れてきたし帰らせてもらつてもいいかしら？」

レモンティーを飲み干したほむらは立ち上がりそう言うと、マミはシユンとした様子でカービイを開放し頷く。そして…

「ねえ…暁美さん、カービィ…」

そこまで言った所で彼女は言葉を切り、首を横に振ると乾いた笑みを浮かべて口を開いた。

「いえ、なんでもないわ。忘れて…」

「……………じゃあ私から提案があるのでだけけど、もしあなたさえ良ければ私たちと協力関係を結ばないかしら？」

「えっ…………？」

9. 魔法少女体験コース第一弾

「……うっ……あ……もう朝……？」

目を覚ましたほむら。布団で眠っていた彼女の腕の中にはぐっすりといびきをかいて眠るピンクボールがある。無論それはカービィであり、彼女は眠っているカービィを優しく抱きしめていた。

なぜこのような事になっているのかというところ……カービィは基本大盛ご飯を平らげた後に部屋の中でぽよぽよし、眠りにつく。

しかし、彼はトイレとか机の上だとかとところかまわず寝てしまう。それは流石に問題があると考えたほむらは最近はしぶしぶ布団で一緒に眠っていた……のだが彼の触り心地の良さにほむらはいっしょに抱き枕にしてしまっていたのだ！

「んんっ……今日も学校ね。ママは答えを出してくれるかしら？」

昨日、ほむらは自分たちにお礼をする為に姿を現したという巴ママに仲間にならない

かと誘った。彼女は戸惑い半分嬉しき半分といった様子で口元に手を置き、真剣に考えていた。

そして、考えに考え抜いた末に彼女が出した答えは保留という選択であった。仲間として活動できるのは嬉しく思うが、まだ出会ったばかりで完全に信用はできない…なのでもう少しだけ答えを待つてほしいというものであろう。

「カービイもいる。そして、このまま何事もなくマミの協力を得る事ができればきつと“やつ”も…」

鼻ちようちんを作つて気持ちよさそうに眠るカービイを見ながら呟くほむら。しかし、すぐに首を振つて立ち上がる。

「いえ、油断は禁物よ。どこに落とし穴が仕掛けられているかわからない…インキュベーターもいるもの、安心なんてできないわ」

学校の身支度を素早くすませ、カービイを盾の中にそつと収納したほむらは学校へ向かう…のだが、その最中で見覚えのある人影を見つけた。

ドリルにもコロナにも見えるあの髪型はバママのもの。その姿はほむらと同じ見滝原中学校の制服。実はバママもほむらやまどかが通う見滝原中学校の生徒でほむら達の一年上の先輩であつたのだ。

ママもほむらに気がついたようでニコツとほむらに笑顔を向けて近づいてくる。

「おはよう、暁美さん！いい天気ね〜」

「おはよう、巴さん。今日も髪型決まってるわね」

「うふふつ…ありがとう！今度あなたの髪も整えましょうか？」

「えっ?!えつと、遠慮しておくわ…」

「ええ〜?今の暁美さんも素敵だけど…髪を整えたらもつと可愛くなれると思うの…三つ編みとか、ツインテールとか…」

掛け値なしの褒め言葉にちよつぱり顔が赤くなるほむらだが、こほんと咳払いした後に本題に入る。

「…そんな事より答えは決まったかしら？」

「…その事なだけで…やつぱり私たちはお互いを知らなさすぎると思うの。だから。

「一度私の魔女退治に付き合ってみない？」

「なるほど…それは一理あるわね」

「じゃあ今日の放課後、私はパトロールにいくつもりんだけど…一緒にいなくてもいい？もちろんカービィもね」

（今日出現する魔女…それは確か…！運がいいのか悪いのか…）

ママの言葉にほむらは今日姿を現す魔女がどんな魔女かを思い出し、なにやら複雑な表情をしていたのだがしばらくしてため息をつくど…

「ええ、構わない。どこに行くかは決まってるのかしら？決まってるのなら…」

その魔女が出没するのはほむらの統計上では見滝原の病院の近くだ。やはり、病院だけあってかなりの人が出入りするので魔女が姿を現すとすると大規模な被害が予想できる。なので、いつ出現してもいいようにほむらが魔女の情報を掴んでいる事は伏せつつ、その近くでスタンバイしておくように伝えた。

余談だがそこには上條恭介というほむらのクラスメートもいた。彼はさやかの子な感じで彼女が密かに思いを寄せる相手らしい。

(今回の魔女は強敵。それに困った事に私には武器がない：マミと今の私ではやられてしまう可能性もある。底が知れないカービィの力の真価を見る時がきたかもしれないわ)

………

放課後となり、ほむらは日直の仕事を済ませてマミと待ち合わせた校門へ行く。下校する他の生徒たちの中からマミの姿を探した所、彼女はすぐに見つかった。

なぜか、楽しそうに談笑をするまどかとさやか姿もある。二人がいる理由はすぐに察しがついた。

「あ、暁美さくん！こつちこつち！」

「…これからいくのは魔女探索でしょう？どうして一般人である彼女たちもいるのかしら？」

“それは僕から説明させてもらうよ。 暁美ほむら”

どこからか姿を現し、器用にまどかの肩に乗るキュウベえ。このような白い謎の生き物が下校中である今の時間帯に校門に現れるというのは目立つと思うかもしれないが彼の姿はカービイとは違い、何か細工をしているのか特別な力を持っている者にしか見ることができない。

なので当然周りの学生たちはまどかの肩に乗る地球外生命体に興味を示す事なく通り過ぎていっていた。

“魔法少女になるにしろならないにしろ、彼女たちには一度魔法少女とはどんなものか見せた方がいいと考えてね。聞けば君たちはこれから魔女探索に行くそうじゃないか？その姿を見ればきつと彼女たちもいい経験になるはずさ”

「危険すぎる……！万が一の事があつてからでは遅いのよ？巴さんもどうしてそれを許可したの！」

「まあまあ……暁美さん大丈夫よ。私に暁美さん、それにカービイもいるのよね？どんな魔女がきても平気よ！」

「ママは有り余る胸を張ってそんな事を言っているが魔女との戦いはその油断こそが命取りである。」

ベテランである彼女ならば考えればすぐにわかる事であろうが、未来の後輩になるかもしれない彼女たちがいる事と誰かと一緒に戦えるという喜びから彼女の判断力は低下しているようだ。

乗り気であるママの説得は不可能と考え、今度はまどかとさやかに向き直る。

「…あなた達はそれでいいの？命の保証はできないわよ。まどか、美樹さやか」

「…心配してくれてありがとう、ほむらちゃん。でも、私ほむらちゃんやカービィがどんな事をしているのか見てみたいのっ」

「なんであたしだけフルネーム…あたしも魔法少女に興味があるんだよね。ま、あんたの気遣いには感謝しておくよ！」

「…はあ…もう勝手にしなさい…でも、戦いが始まったら絶対に後ろで待機しておく事。いいわね、まどか？」

「だからなんでまどかだけっ!!」

10. お菓子の魔女Battle!
前編

黄色に光り輝くソウルジェムを手のひらに乗せて見滝原の町を歩くマミとそれについていくまどかとさやかとほむら+まどかの肩に乗るキュウベえ。

マミのソウルジェムに反応があれば魔女が現れたという事になる。魔女が現れるだいたいの場所と時間がわかるほむらが時計を見た所、出現するのはもう少しといったところだ…そう考えていたその時!

『くくくよ…ぼくよ!』

日課の昼寝から目を覚ましたのかカービイの声がほむらの指輪から溢れ出す! 急に響いたぼよぼよ声にほむらはハツとなつて周りを見渡すが、幸い他の人に聞かれる事はなかつたようでホツとする。

「今の声ってカービイ?」

「ええ…今起きたのかしらね。今回の事は伝えてあるから気合いが入っているんだと思

うわ」

「…そういえばカービーってほむらちゃんが学校にいる間ずっと一人でいるんだよね…？それは可哀想だよ！ほむらちゃん！」

口元をへの字にして怒った様子のまどかがほむらに顔を近づける。普段おっとりとしている彼女が見せるこの勢いに思わず後ずさりをしてしまうほむら。彼女はたじたじとなりながらも反論する。

「そ、それはそうなのだけど…カービーの姿は人に見えてしまうから家で留守番させて出歩かれたら騒ぎになるでしょう。だから、こうして盾の中に入れて一緒に行動するしかないのよ」

「でも、カービーが喋っちゃうと今みたいに声が外に漏れちゃうんだよね？どうにかなんないの？また授業中に突然カービーの声が響くのは勘弁なだけど」

“また”というのは今日の授業中、小テスト中で静まり返った教室に突然カービーの声が響く事件が起きてしまった事である。

その時は以前と同じように電話の着信音と誤魔化したかそう何度も誤魔化す事はで

きないだろう。それを思い出したのかほむらは苦虫を噛み潰したような顔をしてため息をついた。

「それが出来れば苦労はしないわ…はあ…」

一応、ほむらが学校に行っている間にカービイを預けられるようなあてはある事にはある。

ほむらも魔女退治がてらそのあてにしている人物を探しにゲームセンターやスーパーなどには行って探しているのだが、一向に見つからないのだ。

「カービイには申し訳ないけれど…まだ当分は盾の中ね」

「じゃあせめて喋っちゃダメっていうのはなんとかならないかな…?」

「…それは…」

「キュウベえと話をする要領でテレパシーで会話する…というのはどうかしら? キュウベえとはこうして話せているわけだし」

先導して歩くマミの言葉にハツとするほむら。テレパシーというのは試した事はな

かった為、さつそく盾の中にいるカービィにテレパシーを試みる。

『カービィ…聞こえる？ほむらよ。聞こえるなら何か言葉を頭に浮かべてちょうだい』
(???)へお…や…つ…

おやつを要求をしてくるカービィの言葉がほむらの頭に響いた！もう少しの辛抱よ…そうほむらは彼に伝えてまどか達に結果を伝える。

「テレパシーは可能みたい。多分、これだったらあなた達もカービィと会話できるはずよ」

「ええ!!私達、もう既にそんなマジカルな力がく?」

「そうよね…キュウベえ?」

“…僕や君たち魔法少女が間に入って中継すれば出来なくはないね”

という事なのでキュウベえを中継役とし、まどかやさやかでもテレパシーに参加できるようになった!

学校や外出先でもほむらが中継役となればテレパシーでカービィと会話できるよう

になる。その事に無邪気に喜ぶまどかを見てほむらもつい頬を緩めていたのだが…

「…っ！ 曉美さん！」

突如、先導して歩いていたママが声を上げる。その理由はほむらの指輪となっているソウルジェムが妖しく光を放っている事からすぐに理解した！

「魔女…ね。離れた場所じゃなくて運が良かったわ。行きましょう！」

「ええっ！ 鹿目さん、美樹さん！ 絶対に私が曉美さん、カービイでもいいわ。とにかくそばを離れない事、いいわね？」

「はいっ!!」

そうして、彼女たちは近くの見滝原総合病院の外れにて不気味に輝きを放っている魔女結界を発見。中から漂うその異様な雰囲気魔法少女ではないまどかとさやかは息をのみ肩を震わせていた。

そんな二人を元気づけるかのようにママが微笑みかけると…一瞬にして魔法少女の姿に変身をする！ まどかとさやかに向かってウインクしているママに続き、ほむらも素

早く変身を済ませた。そして…

「出番よ。カービィ！」

∩

c (???) へぼよっ！

「わっ！カービィ！なんだかすごいやる気だね…」

盾からカービィの手を掴み、取り出すとカービィはハイ！とポーズを決めて現れる。どうやら気合いは十分のようである。というよりもまだかまだか…ともう待ちきれないようであった。

(カービィにはどんな魔女が相手かは伝えてある。どういう場所かも…！そりやあやる気も出すわね)

「うふふっ…カービィも暁美さんも準備万端ね！さあ、いきましょ！」

とマミが言うやいなやよだれを垂らしたカービィが風のように速く魔女結界へ飛び込んでいった！なぜ、よだれ…？なんて考えていたほむらを除く他の者たちだったが結

界に入った事でその理由を理解する。

「あ、あははっ…」

「あのずんぐりピンク君が飛び出す訳だわ〜」

結界を越えた彼女たちを待ち受けていたのは…なんと人の大きさを上回るであろうプリン！ドーナツ！そういったスイーツの数々がそこら中に溢れかえるお菓子の世界だった。

ちなみにカービイは片っ端からそのお菓子を吸い込み、美味しそうに食べている。既にほむら達がいる入り口にあったお菓子は全て食べ尽くされており、一直線に見える道の先にあるお菓子を全て食べ尽くす勢いでカービイは進んでいた。

「み、見ているこっちが胸焼けしそうな食べっぷりね…でもよく見てみるとあの子、使い魔も一緒に吸い込んでる！」

丸っこいネズミのような使い魔が巨大ショートケーキの後ろに隠れていたのだが…カービイは壁としている巨大ショートケーキもろとも後ろの使い魔をも飲み込んでい

たのだ。これにはマミも苦笑いである。

「す…すっげ〜もうカービィ一人でいいんじゃないかな？」

「でも、あ…あんなの飲み込んで大丈夫なのかな…？カービィ…」

“彼は味はともかく吸い込める物ならなんでも飲み込み、その物の持っている能力を扱う事ができるんだ。だから、問題はないはずだよ”

“ちなみにあの使い魔は何の能力も持ってないからコピー能力は使えないみたいだ”なんて解説するキュウベエの話に耳を傾けていた一同だが、そろそろ先に進むべくほむらはカービィに声をかける。

「カービィ！もう結構食べたでしょう？そろそろ行きましょう！カービィ？」

片っ端から食べ尽くしているカービィに声をかけたほむら。しかし、カービィはその声が届いていないようで夢中になってお菓子と使い魔を頬張り続けている。

その想像以上の食い意地にはほむらも呆れて頭に手を置き、空を仰ぎ見ていた。

「カービィ! いこうよ! カービィ!!」

「あらら…転校生はともかくまどかの呼びかけでもダメか…」

「…もう彼はほつといてあげましょう。私と暁美さんだけでも魔女の相手は務まるわ」

そう口にしたママはお菓子を吸い込むカービィの横を通り過ぎる。さやかは慌ててママについていくが、やはりまどかはカービィが気になる様子。ほむらと共に残っていたのだが…

「…まどか、行きましょう。カービィならすぐに追いかけてきてくれるはずよ」

ため息をついたほむらに連れられ、名残惜しそうなまどかも先へと進んでいった。

そして、この場には吸い込みの恐怖に怯えるネズミの使い魔とそれをお菓子ごと吸い込むピンクの悪魔だけが残された…

11. お菓子の魔女 B a t t l e ! 中編

もりもりとそこら中にあるお菓子を食べるカービィ。そんな彼を置いて先に進むほむら一行は結界内を警備しているのか、辺りを警戒している使い魔を避けつつ魔女が潜む結界の最深部に向かっていった。

そんな中、ふとまどかがほむらとマミに向かってこんな質問をする。

「その！こんな時に聞くのはどうかと思うのはわかってるんだけど…二人に質問があるんですっ」

「…なに？まどか」

「そんなにかしこまって…どうしたの？」

「二人は…どうして魔法少女になろうと思ったんですか？」

その質問には両者とも衝撃を受けていた。ほむらはそっぽを向いて話すつもりはないとでも言いたげな表情をしていたが、マミの方はしばらく考えた後に重々しくその口を開く。

「私の場合は…願いなんで考える暇はなかったの。交通事故で私たちの家族が死にかけて…そこに現れたのがキュウベえだった」

「あつ…じゃあ」

「そう。助けてほしかった私は彼に助けを求めたわ。それが私が魔法少女になった理由」

しんみりさせちやつてごめんね…そう皆に告げるママの顔は悲しそうだった。しかし、彼女は後悔などはしていないだろう。それは同じ魔法少女であるほむらにはわかった。

「だから、二人がもし魔法少女になりたくて願いに困ってるんだったらキチンと考えた上で決めてほしい…私には出来なかった事だからね？」

真剣に自分たちの事を考えてくれるママに素直にまどかやさやかは頷く。ちなみにほむらは余計な口が挟まれないようにまどかの肩にいたキュウベえを手にしていた。

すると、キュウベえが呆れたという様子で首をフルフルと振りながら彼女にテレパ

シーを送る。まどか達が反応していないという事はどうやらほむらにしか伝わっていないようだ。

“ やれやれ…彼女たちの契約を阻止しようとしているのかい？ だったら無駄だよ。僕はどんな手を使つても彼女たち…いや、鹿目まどかを魔法少女にしてみせる”

『インキュベーター…お前の思い通りには絶対にさせない…！ 二人…いえ、まどかは絶対に私が守つてみせる』

くしゅん！ とさやかが大のくしやみを放った気がするが気にしない。今にもキュウベエを始末してしまふ程に憎悪を向けるほむらも彼は意に介す様子はない。

“ やつぱりどこかで僕の情報を掴んでいたみたいだね。君のその情報はカービイからかい？”

『答える必要はない。今すぐそのうつとうしい口を閉じなさい…あの子たちの前だから何もしないであげられるけど、それ以上口を開くなら私も容赦しないわ』

“ 僕を殺した所で無駄だという事は理解しているかい？ まあでも無駄に潰されるの

はもつたない…でも最後に忠告を君にしてあげよう”

「キュウベエの赤い瞳がほむらを見据える。その可愛らしい見た目とは裏腹に感じられる異様な雰囲気にはほむらは不快感を顔に滲ませていた。

“カービィ…彼は僕と同じ宇宙から来た存在だ。ならば、彼が優先するのはなんなんだろうね…この言葉の意味は君にならわかるかな？ 暁美ほむら”

『…?! 黙れ！ 次はないわっ！』

冷静沈着なほむらだがその言葉に揺れてしまった。キュウベエは嘘はつかない…カービィはキュウベエと同じ宇宙からやってきた者。

思えば自分は安易に信用をしまっていったが本当に信じてしまってよかったのか…実はキュウベエの仲間で自分の武器と食費を減らす事が目的なのではないか。

彼を一度仲間と認めたはずなのにキュウベエの言葉に惑わされ、そんな事が脳裏に一瞬でもよぎってしまったほむらは思わず感情を露わにしてキュウベエの言葉を否定した。

彼は“やれやれ…いずれわかる”と口にした後、息を切らし、取り乱すほむらに話し

かける事はなくなった。

(カービー…)

「…暁美さん、暁美さん…！」

カービーの事で頭の中がごちゃごちゃになっていたほむらだがマミの言葉で我に返る。どうやら、ほむらが思考している内に魔女が潜む最深部についたようで相変わらずお菓子で一杯な広々とした空間に出ていた。

広さでいうなら学校の敷地とどっこいどっこいといった所か、その中心部には10mはある異様の長さの椅子があり、魔女はその椅子に腰掛けているのだが…

「なんか…弱そう。拍子抜けしちゃったなあ」

「なんだかカービーみたいで可愛いねっ！でも、ちょっと不気味な感じ…」

二人が話す通り、魔女の姿はキャンディーを思わせる丸っこい頭にフリフリのマントをつけたものだった。

その大きさもカービー程しかなく、まるで人形のような姿の魔女を何も知らないで見

た者は可愛らしい印象を受けるだろう。しかし…

「見た目に騙されてはダメよ。奴は私が見てきた中でも一際強力な魔女…私と巴さんの二人がかりでも厳しい戦いになる事が予想されるわ」

「あら、私も舐められたものね？さすがにあんな魔女から遅れを取るほど私は弱くないわ。もちろん、暁美さんも昨日の戦いぶりを見た限りでは全然余裕だと思っただけ？」

「その油断が命取りになるの。魔女を相手に油断をして目の前で命を落とした魔法少女を何人も見てきた…だから！」

「わかってる。わかってるわ、暁美さん。さあ行きましようか！」

本当にわかってるのか不安ではあったほむらだが、もうこれ以上マミに言っても無駄だと切り上げて盾からゴルフクラブを取り出す。

まどかときやかはゴクリと息をのんで戦いの邪魔にならないように人の背ほどあるう巨大なドーナツに身を隠していた。

「さて、一気に決めさせてもらおうわよ！暁美さん、サポートをお願い！」

そう言ったママの手元に光が集まり、何かを形作っていく。それは細長い銀のマスクット銃、彼女は魔法でそれを生成すると数10m先にいる魔女に向かって撃ちだした！

お菓子の魔女は気づいていないのか、それとも避ける必要もないという事なのかその場から動かず、銃弾はすんなりと魔女の胸元を貫く。ママは撃ったマスクット銃を地面に突き刺して、魔女の様子を窺う。

「やった…？いえ、まだね！」

「私がいくわ…！トドメは任せる！」

衝撃で椅子から転げ落ちる魔女の落下地点にはいつの間にかゴルフクラブを構えたほむらがいた。ほむらはそのまま魔女の頭目掛けてフルスイング！

魔女は放物線を描いて空高く打ち上げられる。その見事なスイングっぷりに観戦していたまどかとさやかが拍手を送っていた。

「ナイスショット！暁美さん…！追撃するわっ！レガール・ヴァスタアリア！」

マミの手から黄色い何かがふわふわと浮かび上がり、体制を整える魔女に向かって伸びる。それはマミの能力「リボン」彼女はリボンを自由自在に操る事ができるのだ。

マミはリボンで魔女をぐるぐるに巻きつけ、その身体を拘束！お菓子の魔女は小さな身体を懸命に動かして抜け出そうとするがマミのリボンから抜け出す事できない。そして…

「仕留めるわっ！」

マミは右手に魔力を集中させ、リボンで身の丈ほどある巨大な大砲を瞬時に作り上げる！銃口に光が収束されていき…

「ティロ・ファイナーレッツ!!」

その光を撃ち出した！巨大なレーザーが空高くにいるリボンで絡まれ動けないお菓子の魔女に向かってぐんぐんと伸びていく。

それはそのままお菓子の魔女を呑み込み、大爆発を引き起こす。その衝撃は地上にいるほむら達にも伝わり、まるで地震のようにこの魔女結界内が大きく揺らいだ。

頭上は煙で覆われ、魔女がどうなっているのかはわからない。しかし、先ほどの攻撃をくらってタダで済んでいるはずもないだろう。ほむら以外の誰もがそう確信していた。

しばらくの間、沈黙がこの場を支配していたが…

「やつ…やつた…？」

「あ、あははっ…さすがママさん！頼りになる〜！」

沈黙に耐えきれなかったのかまどかが口を開く。それにさやかも続いてさやかと二人で喜びを分かち合っていた。

ママは魔法でティーセットを出して優雅にティータイムを楽しんでいたが、ほむらは空を見上げてお菓子の魔女の動きを警戒している。

この程度で終わるはずがない…そうほむらは言っているかのようだった。ママはそんな彼女に微笑みかけるとティーセットを指を鳴らして消し、ほむらの元へ歩き出したその時！

それは一瞬の事だった。警戒していたほむらでさえ時間を止める事ができないほどの一瞬の出来事。

「えっ…あつ…!」

黒煙の中から大蛇のような黒く長い化け物がとてつもないスピードでマミに迫っていく。色とりどりでカラフルな瞳を持つソイツは目にも留まらぬ速さで呆然としているマミの目の前まで接近し、人一人などまるごと飲み込めるであろうその口を開いた。

「マミっ!!」「マミさん!?!」

ほむら達が叫ぶも突然の事にマミは動く事が出来ず、目を瞑る事しかできなかった。目を瞑り死を待っていたマミ…しかし、1秒、2秒…いつまで経ってもマミに死が訪れる事はなかった。

おそるおそるマミが目を開くと…視界に飛び込んできたのはゼロ距離で大きな口をパクパクさせ、マミに噛みつきこうとする変異したお菓子の魔女とその後ろで周りのお菓子ごと魔女の身体を吸い込んでいるカービィの姿であった!

(つ、o、c) シシシ

「カー…ビィ…？私…生きて…」

12. お菓子の魔女Battle!
後編

曉美ほむらとバママミによる連携攻撃で誰もが倒したと思っていたお菓子の魔女。しかし、その攻撃で本気を出したお菓子の魔女は姿を変え、油断をしていたママミに襲いかかった!

お菓子の魔女の攻撃にママミは動く事はできず、ほむらも時を止める間もない。これから起こるであろう出来事に戦いを見ていたまどかとさやか顔は絶望へと染まっていた。そして、ママミの命は散った…そう思われたのだが…?

(っ、o、c) ミシミシ

「カービィ!?!」

彼は来てくれた!大蛇のような長い身体の先端にある尻尾をカービィは周りのお菓子を吸い込みながら吸い込み続けている。

それにより前に行こうとするお菓子の魔女の動きを止めていたのだ。魔女は目の前にあるご馳走(ママミ)を食べるべく必死に口をパクパクさせているが、カービィの懸命

の吸い込みがそれを阻止していた。

「あ……ああっ……」

カービーが助けてくれなければ死んでいた……もう目の前まで迫っていた死の实感が彼女を襲っていた。魔女が目の前にいるにも関わらずマミは恐怖でその場にへたり込んでしまう。

するとそんな彼女の隣に何者かが一瞬で現れる。それは離れた距離を時を止めて接近した暁美ほむらだ。

「暁美……さん」

「巴さん……！立てる？下がるわよ！」

カービーが魔女を抑えている内に腰を抜かしているマミに手を貸してまどか達がいる後方へ下がる。

二人はすぐに恐怖で震えているマミのそばに駆け寄って無事でよかったとわんわん泣いていた。

「…あいつを仕留めるのは私とカービィ。あなたはそこで頭を冷やしていなさい」
「…ええ…頼りない先輩でごめんね…」

その言葉に返事をする事なくほむらはお菓子の魔女の噛みつき攻撃をジャンプしてかわしているカービィの元へ駆け出した。

当たらない事に苛立ったお菓子の魔女は身体を地面に叩きつけ、床のクリームを辺り一帯に撒き散らす！近くにいたカービィは飛んできたクリームが顔のへばりつき、前が見えない様子だ。お菓子の魔女はその隙をついて突撃。

「危ない！…ふう…まだやれるわね？」

(っ？っc) へぼよ！

すんでの所でほむらに回収され、ゴシゴシとクリームで汚れた自分の顔を拭き、それを舐めとるカービィ。ほむらはいったんお菓子の魔女から距離を取り、離れた所でカービィを降ろす。

「私が昨日徹夜して久しぶりに頑張って作った爆弾：食べてないわよね？カービー」

c (??) つココクク

「なら私がアイツを仕留めた方が良さそうね。一撃で決めるわ：あなたは魔女の注意を引いて、出来るなら可能な限り弱らせて！」

身体をくねらせながら猛スピードで近づいてくるお菓子の魔女の噛みつき攻撃を左右に別れて回避するカービーとほむら。

カービーは勢い余って通り過ぎていった長い身体にスライディングキックで攻撃を仕掛け、注意を自身に逸らせる。すると…

c (???) (ぽよ…)

カービーが逃げられないようにだろうか：彼の周りを自身の長い身体でとぐろを巻いて壁を作るお菓子の魔女。魔女はカービーの頭上で舌なめずりしながら狙いを定めている！

「カービー！これを！」

お菓子の魔女に囲まれた身体の外からほむらの声が聞こえてきたかと思えば上空から何かが降ってくる。カービイは口を大きく開きそれを吸い込んだ!

すると、カービイが光輝き、そのシルエツトが変わっていく:彼が起こす光の中からバアンと発砲音がしたかと思えば魔女の顔が爆発を起こした。

「あの格好…!?変わった…」

「カービイ…なの?」

巨大なドーナツの影に隠れて様子を窺っていたまどか達はその目を疑った。なぜなら目を回した魔女の横から飛び出してきたカービイの姿がピンクボールであった姿から変化していたからだ。

「私…?」

頭にかぶった羽根飾りがついたベレー帽。その手にはカービイの背丈を超えるほどの銃身のマスケット銃。カービイの姿は魔法少女の巴マミのようであった。

「? ? ? ? ?」

「(???) つ? ? ? ?」

「? ? ? ? ?」

上空へジャンプしたカービィは今持っているマスケット銃を捨て、マミのように身体の周りにいくつもの新たなマスケット銃を展開させる。

そして、展開されたマスケット銃はカービィが指を指すと一斉に砲撃を始めた！ デタラメな弾道だが、数打ちや当たる。雨のように撃ち出されるカービィの弾はお菓子の魔女にヒットしていく。

「押してる！カービィ頑張れーっ！」

片目を閉じてどこか苦しそうな表情を浮かべるお菓子の魔女は痛みからか、周囲のお菓子を粉砕しながら身体をくねくねとしている。

しかし、これで終わるお菓子の魔女ではない。歯を食いしばり、怒りの表情を浮かべて銃弾の雨の中を遡ってくる！

「(???) つ? ? ? ?」

これにはカービイもビックリで慌ててマスキット銃をしまい、能力である「リボン」を積み重なったケーキの山に伸ばして回避行動をとる。

ベチャリと生クリームに突っ込んだカービイは口周りをペロリと舐めつつ、追いかけてくるお菓子の魔女に向けて何かを作り出していた。

それは先ほどマミがトドメを刺す際に作り出した大型の大砲！光の粒子が集まり、巨大な大砲を形作っていく！そして：

☒☒☒
?????
c(o?つ)へティロ・ファイナーレツ！

「ティロ・ファイナーレ」はゼロ距離まで近づいてきていたお菓子の魔女の顔に直撃！巨大なレーザーが魔女を焦がしていた…がそれでも消滅までは至らない！

揃っていた鋭利な歯がボロボロとなり、片目が開かない様子のお菓子の魔女はところどころコゲコゲな身体をしながらせて大技を放って無防備となったカービイを吹き飛ばす。

そして、ズシンと地面を揺らしたかと思うと魔女は目の前で目を回すカービイに見向きもせず、身体をくねらせながら上空へと浮かび上がっていつてしまう。

「あつ！あの魔女…もしかして…！」

「まずい！逃げるつもりよ！くっ…ここで逃がしちゃ…」

「起きてっ起きて！カービィ!!」

カービィに手痛いダメージをもらった為か、動きが遅くなったお菓子の魔女はふらつきながらも上空に出口のゲートを作り上げて逃げようとしているようだ。

この結界外に出られたら探知できなくなるかもしれない。目を回すカービィを見ながらそう思ったママはすかさず立ち上がり、マスケット銃を作り上げるが…

「その必要はないわ…巴さん」

「ほむらちゃん!?!」 「転校生!?!」

銃を構えるママの前に突然ほむらが現れる。魔女が逃げようとしているのに何事もなかったかのように落ち着き払った態度を見せるほむら。

「その必要はないって…暁美さん…！あなた…」

そんな彼女にマミが怒りの声を上げようとしたその時、上空にて逃げようとしていたお菓子の魔女がピタッと動きを止める。その様子にまどか達三人は不思議に思っていたのだが…

「出来もしない約束を私はしない。魔女は私とカービイが仕留めると言ったはずよ？」
「えっ…あっ!？」

突如として動きを止めたお菓子の魔女の身体が異様な形に膨れ上がっていく。そして、風船のように極限まで膨らみあがった魔女の身体から光が漏れ出したかと思えば次々と光が漏れ出し…この結界の中に閃光が走った。

13. 佐倉杏子との出会い

「曉美さ〜ん! まつて〜!」

いつもと同じ時間、いつもと同じ通学路。しかし、いつもと違うのは彼女、バママミがほむらの横に並ぶ事だ。スタスタと早足で歩く彼女に追いつく為に走ってきたママミは息を整えて、満面の笑みをほむらへと向ける。

「おはよう! カービィは起きてる? 起きてるのなら挨拶したいのだけど:」

「お、おはよう。バさん:あの子はまだ寝てると思うわ。またお昼に話しかけてあげて」

そう:と意気消沈するママミであつたが気を取り直して昨日は〜があつただとか、今度一緒にどこかに出かけようだとか、口数が少ないほむらに向かつて積極的に話しかけていく。

ほむらも話を聞いていないわけでもなく、満更でもない様子。どうしてこんなにママミとの仲が急接近したのかという:やはり、あのお菓子の魔女との戦いの出来事が大き

かった。

(マミ…まさか、ここまで仲良くなれるとは思ってなかったわ)

ほむらの忠告を軽視し、お菓子の魔女に対して大きな隙を晒してしまった事。そして、カービィに助けられなければ確実に死んでいたという事。

カービィとほむらはそんな彼女からしてみれば命の恩人だ。さらにずっと一人で孤独に戦ってきた事もあってか二人の心強い仲間が出来たマミは急速に心を開いていった。今では登下校や放課後のパトロールだけではなくお昼も一緒にいる。

「今日の料理は自信作なの！うふふ…お昼はカービィと一緒に楽しみにしててねっ」

「ええ、あの子にも伝えておく。ありがとう、巴さん」

「暁美さんは放っておくとコンビニで買った物だけでお昼を済ませてしまうんですもの。カービィはともかく暁美さんがそれじゃあダメよ？」

ちょうど学校の門の前についた彼女たち。学年の違う二人は別れ、ほむらは自分の教室へと向かう。

そして、教室に入った彼女に気づいたまどかが優しい笑みを浮かべて声をかけてきた。

「おはよう、ほむらちゃんっ」

「おはよう……まど 《ぼよっ！》」

まどかに返事を返すほむらの声を遮ったのは今日を覚ましたカービィであった。しかし、周りにいるクラスメートたちはそんなカービィの声には見向きもしない。

なぜなら、カービィはテレパシーで会話をしている為である。彼の声が聞こえるのはほむらやマミの魔法少女、もしくは魔法少女の才能を持つまどかやさやかといった特別な者だけ。

なので、目の前のまどかはもちろん机で突っ伏して眠っていたさやかも目を覚ましてこちらに近づいてくる。

「おはよう 転校生にカービィ」

「さやかちゃんったら〜カービィにはどうだよ？ 『おはよう！カービィ！』」

《まろか〜まろか〜！》

「カービイだったら昨日もまどかに会いたい会いたいってうるさかったのよ？ だいぶあの子に懐かれてるのね…」

そう、カービイはなぜか物凄くまどかに懐いている。それは共に生活しているはずのほむらやおいしい食べ物を作って持ってきてくれるママ以上にだ。

「ほほう…つまりは嫉妬しているわけですか？ 転校生」

「愚か者ね。寝言は寝て言いなさい。私とカービイは協力関係を築いているだけ…あの子が誰と関係を持つとうが私には関係ないわ」

「ホントに…？ まあいいけど…」

まどかとカービイが仲良さそうに話をしている中、ほむらと会話していたさやかのがふいに真剣なものとなる。

「ねえ、ちよつとあんに話があるんだ。次の休み時間いい？」

どこかせわしない様子のさやかがほむらに耳打ちする。ここで話せばいいというの

にわざわざ耳打ちするという事は一般人には聞かせられない話なのだろう。

ハア…と溜め息をついたほむらは領り返し、席に着く。

(このタイミングでくるといふ事はおそらく…)

………

………

…

一時間目の授業も終わり、休み時間になるとさやかに促されるまま屋上へとやってくるほむら。何かに迷っているのか、思いつめた表情をしているさやかに用件の大体的見当がついたが黙って彼女の言葉を待った。

やがて、決心がついたのか緊張した様子でさやかは重々しく口を開く。

「転校生…あたしは、魔法少女になろうと思うんだ」

「……………そう」

何度も何度も考えた上での結果なのであろう、さやかの瞳に揺るぎはない。内心溜め息を吐きつつ、ほむらは素っ気なく返事を返す。そして…

「なるかならないかはあなたの勝手。でも、これだけは言わせて…一度魔法少女になつてしまった者はもう救われる望みなんてない」

「どういう事よ?」

「言葉通りの意味よ。あの契約はたった一つの希望と引き換えにすべてを諦めるって事…その覚悟ができないなら軽々しく契約するなんて言わない方がいいわ」

「…っ! あんたが何を言ってるか全然わかんない。けど、一応あたしの事を考えて言ってくれてるのはなんとなくわかるよ」

「もう少しよく考えてみる」…そう言い残し、さやかはこの屋上を後にする。残ったほむらはそよ風になびく髪を軽く抑えながら再び大きな溜め息をついた。

「美樹さやかが魔法少女になるのも時間の問題かしら…刻一刻と時間が過ぎていく。大

丈夫…今度こそこの手で…」

……

あつという間に一日の授業も終わり、待ちに待った放課後となる。クラスメートたちは部活に出かける者、遊びに行く者と学生生活を謳歌するのだろうか…ほむらはそうはいかない。

彼女はホームルームが終わると同時に席を立ち、荷物をまとめていた。

「あれ…ほむらちゃん。そんなに急いでどうしたの？」

荷物をまとめ終わり、そそくさと教室を出て行くこうとするほむらに気づいたまどかが声をかける。

「探している人がいて…隣町の風見野までいかないといけないの。悪いけど巴さんにパトロールはいけないって伝えてもらえないかしら？」

「あつ…うん、わかった！さやかちゃんも今日は無理って言ってたし…今日は中止になりそうだなあ」

「そう…じゃあ巴さんと一緒に遊びに行つてはどうかしら？」

「そう言つてみるっ！ばいばい、ほむらちゃん！『またね、カービー！』」

《まろか！ばいちゃ！》

まどかに別れの挨拶を告げたほむらは見滝原中学校を後にして、この見滝原市に隣接する風見野市に向かう。風見野へはバスで10分〜20分といった所ですぐについた。

彼女がわざわざ風見野市へ来た理由、それは先ほども言った通り人捜しの為だ。その人物の名は佐倉杏子、ここ風見野で活動をするベテランの魔法少女である。

とりあえずスーパーの試食コーナーや彼女の行きつけのゲームセンターに行つても佐倉杏子の姿はない。

「いない…こうなつたら…！」

そう言ったほむらが向かったのは町から少し外れた所にある小さな教会だ。老朽化が進んでいるのか建物の外観は所々穴があいており、今にも崩れそうな印象を受ける。訳あつて佐倉杏子はこの教会を拠点としている。勝手に入るわけにもいかないのとおりあえずノックをしてみるほむら。

「返事は……ないわね。いないのかしら？」

《……じゅるり》

中からの反応がない事から留守であると考えたほむらが目を改めようとしたその時、なにやらカービーが中から何かを感じたようで声を上げている。

その為、諦めずに何度もノックを繰り返していると……

「あつ……ドアが……」

あんまり力をかけずに叩いていたはずなのだが、木製のドアはボタンと音を立てて崩れてしまった。勝手に崩れたなんて言い訳しようと思いつつ、中を覗き込む。

中は外から見えるような今にも崩れそうなイメージとは程遠く、床に食べ物のゴミこそ転がっているものの意外と掃除は行き届いている。

そして…奥の祭壇でひび割れたステンドグラスから光を浴び、祈りを捧げている少女の姿が目に入った。彼女こそ…

「佐倉杏子…」

《アンコ…!》

よれよれのパーカーとショートパンツを身につけた赤いポニーテール、祭壇の前で片膝をつき祈りを捧げる彼女が風見野の魔法少女である佐倉杏子だ。

14. 打倒！ワルプルギスの夜！

祭壇の前で何を思い、祈りを捧げているのか：佐倉杏子が入り口で自身を見つめるほむらに気づいているのかいないのか、その場からジツと動く事なく、片膝をついて両手を組んでいた、のだが：

《アンコ！アンコ！》

「：：だああつ！うっせえなつ！！」

カービィは一般人には聞こえないようにテレパシーの要領で声を発している。何の能力も持たない一般人であればその声は聞こえないのだが、逆を言えばそれ以外の聞こえる人にはカービィの声はダダ漏れだ。

なので魔法少女である佐倉杏子にはアンコと連呼するカービィの声は耳が痛い程に聞こえており、もう堪えきれないという様子で祈りを中断し、ズカズカとほむらがいる玄関に駆け寄ってきた。

「さつきからうるさいんだけど!しかもアンコってアタシの事お?アタシは杏子!
さくらきようこ
 佐倉杏子だ!」

「えっ…ええ、ごめんなさい…カービィ、ちよつと静かに…」

《アンコ!》

「杏子きようこだつつつてんだろ!つたく…迷子のガキか?ここはアンタが来るような場所じゃ
 ねえ!とつとと帰んな!」

またもカービィにアンコと呼ばれて怒る杏子を見てこのままでは話が進まない見た
 ほむらはいったん盾を具現化させて中から無邪気に名前を連呼するカービィを取り出
 す。

∩

c (???)へはあい!

「ごめんなさい…少し椅子を借りるわね。カービィ、こつちで大人しくしていてね。ほ
 ら、ガムもあげるから」

ポーズを決めて現れるカービィを教会の会堂用の長椅子に座らせ、このような時の為
 に持ち歩いてるガムを彼に渡す。ほむらも最近気づいた事なのだが、ガムならば噛めば

噛むほど味が出る為、カービィの早食いを僅かに抑える事ができるのだ!

突然、ピンクの生き物が現れたと思いきや、ガムを噛んで大人しくする姿を見て啞然としていた杏子、しかし、すぐに我に返り炎を纏った赤い槍を手元に具現化させる。

「そいつあ…魔女の使い魔か何かか!?!それにテメエ…どうやら同業者のようだな…!」

「ええ…話が早いようで助かるわ。佐倉杏子」

「アンタはアタシの事を知ってるようだが…アタシはアンタたちの事を知らねえな。何者だ?何しにここにきやがった?」

辺りの空気がビリビリと張り詰めたものとなる。鋭い眼差しをほむらと長椅子に座りガムを噛み締めるカービィに向ける杏子。

おそらく下手な事を言ってしまうばささま戦闘に入ってしまうだろう。なので、慎重に言葉を選んで話そうとするほむらだが…

(っ?、) っへガム!

「……………」

そんな中、どうやらガムの味がしなくなり、おかわりを要求するカービイがほむらの足元にやってくる。

ほむらはスカートポケットからガムを取り出し、丁寧に包み紙をのけてあげてからカービイの口に突っ込む。すると、カービイは元の長椅子に大人しく座り、ガムを咀嚼していた。

しばらく何ともいえない雰囲気がこの場を支配したが、こほんとわざとらしく咳をしたほむらが話を続ける。

「…失礼。私は曉美ほむら、彼はカービイ。私は見ての通り魔法少女よ。あの子は…まあその…私にもよくわからない。キュウベえが言うには宇宙人みたいよ」

「わけわかんねえ…まあてめえらの素性はわかった…敵じゃねえならいったいアタシに何の用だ?恨み言やグリーンフィードをわけてくれなんていうのは勘弁だぜ」

白旗と言わんばかりに両手を上げて淡々と話すほむらとくちやくちやと音を立ててガムを幸せそうに噛み締めるカービイに杏子も戦意も削がれたのか槍を地面に突き立て、腕を組んでいる。

その様子に内心ホッと一息つき、そして用件を切り出した。

「単刀直入に言わせてもらおうわ。佐倉杏子、私たちと手を組んでほしいの」

「何を言い出すかと思えば……ふざけてんのならさっさと壊した出口を直して帰んな。アタシも暇じゃないんだ」

会ったばかりで名前しかろくに知らない魔法少女から急に持ちかけられる共闘には杏子も溜め息をついていた。

しかし、ほむらの次の言葉によつて杏子もその共闘について真剣に考え始める事となる。

「…最強の魔女、あなたも名前は聞いた事があるはずよ」

「ああ？ そいつは確か…」

「【ワルプルギスの夜】ただ一度具現しただけでも何千…いや何万もの人間が犠牲になる…！…ここでの話をするとという意味はどういう事かわかるでしょう？」

いきなりの話にちんぷんかんぷんだった杏子も気づいたようで興味深そうにほむらを見ている。

「なぜわかる?そんな情報でアタシが信用すると思うのか?」

「信じてもらえなくてもいい。でも三週間…三週間だけ手を貸してほしい。グリーンシードも衣食住も全て私が保証するわ!」

「…ふうん…そいつは悪くない条件だね。アタシをからかってるってわけじゃなさそうか…」

杏子も真剣に考えてくれているようで両者の間に再び沈黙が流れる。その沈黙を遮ったのはやはり…

(???)へおかわり!

味のしなくなったガムを飲み込み、おかわりを要求するカービイがほむらの足元にやってきた。ほむらがガムを取り出そうとしたその時!

「おい!カービイとか言ったっけ?そいつ…」

「ええ、そうだけど…」

(っ?~?~?c) へぼよ?

突然名前を呼ばれた事に振り向くカービィ。杏子はパーカーのポケットをガサガサとまさぐると何かを取り出す。それはチョコレート菓子のRockyで彼女は封を切るとカービィの身長に合わせてかがみ：

「食うかい?」

カービィに向かってそのお菓子を差し出した!もちろんカービィは…

c (???) っへぼよっ!!

「へっ…いい食べっぷりじゃないか。嫌いじゃないぜ、そういうの」

「杏子…?」

「【ワルプルギスの夜】の話が本当ならここ風見野も相当な被害を受けるはず。ま、違っても雨風がしのげて飯も食えるならそれでいい!乗ってやろうじゃないか!その話にさー!」

……

そんなほむら達の事をどこからか見ている影が一つ。それは可愛らしい外見がどこか不気味に感じてしまうもう一つの宇宙生命体であるキュウベえであった。

「ワルブルギスの夜」を倒す為に巴マミに続き、佐倉杏子とも手を組んだようだね
…暁美ほむら」

「でも、君がどう動こうが鹿目まどかの契約は止められない。たとえ星のカービイが手を貸した所で何も変わらないよ」

「その為の駒はもう揃っているのだから…さあ、どんな未来がくるのか楽しみだね」

15. ハコの魔女 Battie! 前編

和室一間の部屋の中央にあるちゃぶ台を囲むように座る暁美ほむら、佐倉杏子、カービィ。相変わらず無表情でいるほむらとは対照的に杏子とカービィは何やらそわそわしていた。その理由は…

「3分、できたわよ」

Σ(???)c(ぽよ!!

「キタキタ〜!」

「いただきます! (ぽよ!)」

口で割り箸を割り、出来上がったカップ麺の汁をズズツと飲む杏子。カービィは立ち込める香ばしい匂いに興奮しながらもフォークでラーメンをすくい食べている。ちなみにカービィのものはパックのラーメン五人分をバケツに入れているバケツラーメンド。

「ふう…ふう…ずるずる…味が濃いわ」

「はふっ…それがいいんじゃないか。なあカービィ?」

* ; . (? o ? c) <ズビズビポヨオ!

「もうっ…カービィ! 食べながら話さないの!」

そう言いながらカービィの食べかすを布巾で綺麗に拭き取っていくほむらを見て、前はおかんか…なんて食べながら思う杏子であった。

「それでだ。あんたグリーンフシードどれくらい持つてんのさ? 二人ぶんも用意できんのかよ」

「今グリーンフシードは6つ。あっ…これもうマズいわね」

盾の中からグリーンフシードを取り出すとその中の1つが溢れてしまうほどの黒い瘴気が溢れ出ていた。これは魔法少女たちのソウルジェムに溜まる穢れを取り除きすぎた為、その機能の限界を知らせるものだ。

これ以上、このグリーンフシードを使用してしまうと魔女の卵でもあるこれが孵化し、魔女が再び蘇る事になる。しかもその孵化した魔女がグリーンフシードを落とす保証も

ないのでやはり、処分するのが一番だ。

「げっ…ばつちいな…早くあの白タヌキ呼んで処分してもらえよ」

「その必要はないわ。カービィ、お願いっ」

c (???) つへはあい！

バケツラーメンを食べ終えたカービィに瘴気が溢れ出ているグリーンフシードを与えると…なんと！カービィはそれを飲み込んでしまった！

なんとなく想像もついていたのか杏子はケラケラと笑っている。

「まあ…5つもありやあ三週間は余裕だな。問題はワルプルの時だけだね〜アタシらで戦うならもう何個かは持つておきたいかな」

「そうね。他に協力してくれる人はいるけれど…グリーンフシードがある事に越した事はないわ」

「ん？他に誰かいるのか？初耳なんだけど…」

c (???) つへマミィ！マミィ！

短い手をくるくると回して特徴的な髪型を伝えているカービー。その髪型と聞き覚えがある名前にビクツツと杏子の肩が揺れた。

「マミってまさかバママミの事かあ?」

「ええ、彼女にはまだワルプルギスの夜の事は伝えていないけど…きつと手を貸してくれるはず。私にカービー、あなたとマミの力があればワルプルギスの夜を越えるのも夢じゃないわ」

「ママの野郎と組むのは気が引けちまうが…ワルプルまでの辛抱かあ…はあ、まあ色々善処するよ」

「助かるわ…っ!この気配は…!」

「さっそく出たな…!ちようどいいや、アンタたちの力も見ておきたかった所さっ」

ほむらの指輪のソウルジェムが反応を示している。どうやら杏子のもものだ。それが現すのは魔女の誕生!

溜め息をつきながらグリーンフィードを盾へしまっほむらと拳を手のひらに打ちつけ、笑みを浮かべて立ち上がる杏子。

ほむらが残したラーメンも凶々しくも綺麗に食べるカービー。彼を盾の中に収納し、

ほむらと杏子は魔女が出現した廃工場へと向かった！

……

「酷い有り様ね……」

付近の廃工場までやってきたほむら達は音を立てないように屋根を壊して中の様子を覗くのだが：ほむらの言う通り酷い有り様であった。魔女に魅入られて正気を失った者たちがバケツを中心に囲い、虚ろな表情でそのバケツの中に薬品を混ぜていたのだ。

おそらくあの薬品で集団自殺を図ろうとしているのだろう。フンと鼻を鳴らした杏子が腕を組んでその様子を見下ろす。

「魔女の口づけが見えるな。 ったく…どいつもこいつも死に急ぎやがって。 バカじゃないの?」

魔女やその使い魔に魅入られた者は魔女の口づけと呼ばれるモノを受けた者は自殺や交通事故など、自らを滅ぼす行動に出るようになるのだ。 今集まっている者たちの首もとにはくつきりとその印が浮かんでいた。

代表格の男がこれは神聖な儀式だと高らかに言い放つと集まった人たちは拍手でそれを称えている。 よく見るとその人影の中に見慣れた見滝原中学校の制服を着た人物が目に入った。

ピンクのツインテール、自分よりも低い背丈…あれは紛れもなく…!

「まどか!」

「なんだ? 知り合いでもいるのか?…ん? ほむら?」

杏子が振り向いた時にはほむらの姿はなかった。 彼女が中を覗き込むと薬品の入ったバケツを蹴飛ばし、集団自殺を阻止するほむらと盾から飛び出したカービイの姿があった!

……

鹿目まどかは震えていた。友人である志筑仁美の様子がおかしい事に気づき、彼女に促されるがままついてきてしまった結果…魔女の影響を受けた集団自殺に巻き込まれてしまったのだ。

(怖い…怖いよお…でも、このままじゃ皆死んじやう…！)

まどかは臆病な人間である。現に足は恐怖ですくんでしまっていた。しかし、彼女は逃げ出す事はしなかった。

もし、彼女が今逃げ出せばここにいる人たちを見殺しにしてしまう事になる。見て見ぬ振りなんてできなかつたまどかは覚悟を決めてこの集団を阻止するべく走り出そうとするのだが…

「どこにいくおつもりですの？まどかさん？」

「あつ…」

薬品が入ったバケツの元へ飛び出そうとしたまどかの手をグイッと引つ張るクラスメートの志筑仁美。彼女の目は虚ろで気味の悪い笑みをまどかに向かって浮かべている。

「離して！仁美ちゃん！だって、あれ危ないんだよ？ここにいる人達、みんな死んじゃうよ！」

「そう。私達はこれからみんな、素晴らしい世界へ旅に出ますの…それがどんなに素敵なことかわかりませんか？」

「い、痛いっ！痛いよおっ！」

まどかの腕を掴む力が徐々に強くなっていく。その力はとても女子中学生のものとは思えないほど強く、まどかの腕がメリメリと音が立てていた。

懸命に腕を振ってなんとかそれを振り払うもまどかの周りに正気を失った者たちがゾロゾロと集まってくる。

「生きてる身体なんて邪魔なだけですわ。鹿目さん、あなたもすぐにわかりますから…」

「い、いや…助けて…！ほむらちゃん…カービー…！」

囲まれてしまったまどかはおもうどうする事もできなかつた。涙が溢れる目を閉じて、自分の大切な友人の名前を口にする…

すると、ドスン…と何かが倒れたような音がこの空間に響いた。続いて声にならない声を上げてドサドサと倒れ込む音が聞こえてくる。まどかが目を開けるとそこにいたのは…

「間に合って良かった…」

(っ???) っへまろか！

長い髪を翻す暁美ほむらとカービー。まどかの視界に彼女たちの後ろ姿が飛び込んできた！まどかを囲んでいた人たちは気絶しているのか皆倒れており、薬品が入っていたバケツは端っこに転がっている。

「ほむらちゃん……カービー……！」

涙を拭き取り、お礼を言おうとするまどかだがそれをほむらが手で制す。

「話は後よ。早くこの場から離れなさい。すぐに怒り狂った魔女がやってくるわ！」

「た、倒れてる人たち！皆も逃がさないと……！」

「っ……杏子……！」

外で様子を窺う仲間へ呼びかける。すると天井から槍を持ち、赤を基調とした服を身に纏う佐倉杏子が降りてきた。しかし、その顔はどこか不満げだ。

「魔女がノコノコと出てきた所を不意をついて倒すつもりだったのに台無しじゃないかあ。それで……何だよ？」

「私とカービーが魔女を引きつけるからアナタはここにいる人たちを安全な場所に連れて行ってあげて」

「はあっ!?なんでアタシがそんな事……！」

あからさまに嫌そうな顔をする杏子にどうやって説得しようかと思っていたほむら。そんな時、彼女の隣にいたまどかが深々と頭を下げた。

「あの…その…：お願いします！私の友達もいるんです…！みんな、みんな…：ホントはこんな事したくなかったはず…：助けてあげてくださいい！」

「…ちっ！おい、ピンク…：カービィ、テメエじゃねえ！アンタも手伝えよな！」
「あ、はいっ！」

まどかと杏子が動き出したと同時にこの廃工場が大きく揺れる！瞬く間に彼女たち
のいた空間は青い水中のような円柱状の空間に変わってしまった。

すぐに杏子は炎を纏わせた槍で空間の壁に穴を開けて、現実の世界への抜け道を作り出す。そして、まどかと共に倒れている人たちを抱えてこの空間から姿を消した。

「カービィ！まだ回収できていない人たちもいる…：みんなを守りながらの戦いとなるわ
！」

（???) コクコク

そして、ほむら達の頭上に魔女が姿を現す。その魔女はテレビのようなモニターに黒いツインテールが伸びるシンプルなデザインだ。

そのモニターには放送休止を表すカラーバーが映し出されており、画面から次々と天使のような羽根が片方だけ生えた人形の使い魔が出てくる。

数十体はいるだろうか。今なお増え続ける使い魔にあつという間にほむらとカービィは包围されてしまった！

「この数は…厳しい戦いになりそうね…」

使い魔たちから人々を守る事ができるのか…！頑張れ、カービィ！ほむら！

16. ハコの魔女 Battler! 後編

空から襲い来るハコの魔女の使い魔の大群をほむらは玩具の拳銃を取り出し、魔法で強化したB B弾で使い魔の羽根を狙って撃ち落とし落としていく。

しかし、ハコの魔女から無限に湧いて出てくる使い魔にほむらの射撃は追いつかない！

彼女の後ろにいる倒れている人たちがいなければ爆弾で一掃できるのだが…まどかにああ言ってしまったからにはほむらは必ず守りきる必要があった。

「数が多すぎる！こぼれたヤツはお願い、カービー！」

(つ、o、c) ミシミシ

そう言ってほむらがカービーの後ろに下がると、待つてましたと言わんばかりに口を大きく開けて吸い込み始める。

そして、近くにいた数匹の使い魔を吸い込み終えた所でカービーはそれを飲み込む。
すると…

? (???) ?へやつ!

白い羽根がひらりひらりとほむらの前に舞い落ちてくる。頭上を見上げるとそこにはふわふわと浮かびながら弓を射て戦うカービイがそこにいた。

穢れ一つない真つ白な翼と頭に出来た輪つかという彼のその姿は神様に使える天使を連想させる。これはカービイがハコの魔女の手下をコピーして得た能力「エンジェル」だ!

「カービイ! 出来るだけで構わないわ。あなたが倒し損ねた敵は私が始末する!」

まどかと杏子がここに倒れている人たちを避難させ終えるまで魔女と使い魔が抑えられればそれでいい。避難させ終えた後は使い魔をおびき寄せて爆弾で一掃し、魔女までの道が出来た所で一気に仕留める! それがほむらの作戦だ。

その為、カービイが使い魔の数を減らし、ほむらがそれをすり抜けてやってくる使い魔を始末する今のこの状況を維持する必要がある。

「ほむらちゃん！頑張ってる！」

「もうじき避難が終わる！気張れよ、二人とも！」

ほむらの背後からそんな声が聞こえてくる。この調子だともうしばらくの辛抱だ。そうほむらは思っていたのだが……

？（？…？）？へぼよ！

「っ…カービィ!？」

ぼびゅつと音を立てて降ってきたのはカービィだ。すぐさま立ち上がり、まだまだ余裕そうな表情を見せるカービィに安心するが……何故カービィが弾き飛ばされてきたのか……その理由はすぐに理解した。

「はっ……マズい！」

慌てて時を止めたほむら。彼女の頭の上にはハコの魔法の黒いツインテールが振り下ろされていた。

もう1秒でも遅れていたらほむらは地面に叩きつけられていたであろう。カービーがやられたのは使い魔を生み出していた魔女に突然参戦されたからであった。

ハコの魔女の背後に回ったほむらが時間停止を解くと、ほむらを狙っていた魔女の攻撃は空を切る。そして、無防備なハコの魔女をゴルフクラブで打ちつけるほむら。しかし……

「効いて……いない……!」

? (???) ? ^ほよ!

ハコの魔女はビクともせず、逆にほむらのゴルフクラブがひしゃげてしまう。危ないと声を上げたのかカービーの声が聞こえてくるが遅かった。ハコの魔女は画面をチカチカと点滅させながらほむらの方へ振り向くと……!

「……それは……あつ……ああつ……!」

ほむらの方に振り向いたハコの魔女のモニターが何かを映し出す。それは傷だらけ

で横たわるまどかと…眼鏡をかけた三つ編みの少女の姿。その三つ編みの少女はどことなくほむらに似ていた。

それを見てしまったほむらは激しく息を切らし、ペタリとその場に崩れ落ちてしまふ。その瞳には涙も浮かんでいた。

「まどか…私…私はっ…」

？（?o?）?へほむら!

動揺しているのか、いつもの彼女らしくないほむらの頭にツインテールを振り下ろそうとするハコの魔女だが、それは間一髪の所で飛び込んできたカービィの蹴りによつて横に逸らされる。

ハコの魔女は二人から距離を取ると…再び使い魔を自身のモニターから召喚し始めた!

？（?~?）?へぐぬぬ!

カービィはほむらの方をチラリと見る。彼女は虚ろな瞳で謔言のようにまどかの名前を呼んでいた。魔女の攻撃で正気を失ってしまったようでほむらのサポートは期待できないだろう。

まだ避難できていない人もいる。その為、今度はカービィ一人でその人たちを守る必要があった。

? (? o ?) ? へうりやあ!

地上で飛んでくるハコの魔女の使い魔を撃ち落とすとしていくカービィ。しかし、その数は多すぎた。矢をすり抜けて撃ち漏らしてしまった何匹かの使い魔がカービィの横を通り、守っていた人々を掴んでどこかへ連れ去ろうとする!

カービィが弓を射ようと構えるがそれでは守るべき人も傷つけてしまう恐れがある。絶体絶命と思われたその時!

「…でやあああつ!!」

青い閃光がその使い魔たちの羽根を切り裂き、この絶体絶命の状況を救った。白いマ

ントを身にまとい、颯爽と現れたのは……!

「危機一髪って所だったね!カービィ、転校生!」

? (???) ?へ………さやか!

そう!カービィの前に現れたのはまどかやほむらのクラスメートの美樹さやかであった。その手にはサーベルを持ち、騎士を思わせる衣装を身にまとっている。

そして、彼女のお腹には青く光るソウルジェムの輝きがあった。さやかは魔法少女となつて、この場に現れたのだ!

ちなみにカービィが名前を呼ぶのに間があったのはさよかの事を忘れていたからではない……はずだ。

「二人は倒れてる皆を守ってたんでしょ?ならアタシも手伝うよ!」

さやかは自分の周りに数本のサーベルを具現化させるとそれを向かってくる使い魔たちへと投げた。剣の何本かは使い魔の腹部を貫き、そのまま消滅させるが残りは明後

日の方向へ飛んでいく。

撃ち漏らした使い魔はカービィが放った矢によって消滅する。魔法少女になったばかりということもあつてか、さやかへの攻撃は当たらない事の方が多かったがそれでも心強い援軍だ！そして…

「おい！これで全員だ！…つてアンタいったい何者だ？」

「さ、さやかちゃん!? どうしてここに…！それにその姿…まさか！」

「あはは…まあ、話は後！二人は倒れてる人たちと倒れてる転校生を早く安全な所へ！ここはあたしとカービィがなんとかするから！」

釈然としない様子ではあつたが杏子とまどかの二人は倒れた人たちとまどかに対して泣きながら謝り続けるほむらを背負つてこの魔女結界を後にした。

これだと思う存分戦える…守るモノがなくなつたカービィとさやかは弾けたように動き出した！

「ここで決着をつける！いくよ！」

? (???) ? へぼよ!

クラウチングスタートの形となるさやか。そして、彼女の足元に魔法陣が描かれると……凄まじいスピードで青いオーラを纏って魔女に向かい飛んでいく!

そのスピードに魔女や使い魔は反応できず、彼女に行く道を遮る使い魔は無惨にバツサバツサと切り刻まれていた。カービィは絶好のタイミングで射止めるべく、片目を瞑って狙いを定めている。そして……

「でやあああつ!!」

目にも留まらぬ速さで魔女の背後へと回ったさやかがサーベルを振り上げ、ハコの魔女を切り裂こうとする……も魔女は背後に振り向き、ツインテールをクロスにしてそれを受け止めた! 両者一步も引かず、つばぜり合いの形となる。

「負ける……ものかつ!」

そう吼えたさやかだったが受け止められたまま動く事はない。そんな時、魔女のモニ

ターがチカチカと発光し始める。さやかは知らないだろうがこれはほむらを戦闘不能に陥らせた精神攻撃だ。

それでもなんらかの攻撃である事は理解できたさやかが歯をくいしばり、その攻撃を耐えようとしていた時！不意に魔女が爆発する。突然の出来事に不意を突かれたのか魔女の力が少し緩んだ。

？(？o?)？へさやか！

「わかつてる！うおりやあああつ!!」

カービィの援護により、緩んだその隙をついてさやかが力を爆発させる！それにより、見事ハコの魔女に攻撃を与える事に成功。魔女は剣で切断するまでは至らなかつたものの思いつきり地面へと叩きつけられた。

画面はひび割れ、さやかの斬撃を受けた箇所からは黒い液体がだらだらと流れ出ている。しかし、それでもなお浮かび上がったハコの魔女…だが、地上にはカービィがいる。

？(？~?)？へやつ！

魔女が最後に見たのは自分に向けて弓を精一杯引き絞る天使のような悪魔の姿であつた。

17. 忘却の魔法少女

雲一つなく澄み渡る青空。朝の日差しがこの見滝原を優しく照らしていた。ほむらは息を切らせながらいつもと同じ通学路を通って学校へ登校中である。

そんな中、後ろからほむらの名前を呼ぶ声が一つ…それはやはりこの見滝原を守るベテランの魔法少女、バママであった。

ママの声に可愛らしく編まれた三つ編みを揺らし、赤フレームの眼鏡をかけたほむらが振り向く。

「暁美さん！おはよう！あら、イメチェンかしら？可愛らしくてとっても似合ってるわよー！」

「えっ…あつ…はい、ありがとうございます…」

彼女の口から発せられたぎこちない敬語と小動物のような大人しさと言うべきだろうか…いつもの堂々とした暁美ほむらではない事に少し違和感を覚えたママだったが、すぐさま昨日にあった魔女との戦いの会話へと移る。

「昨日はごめんなさいね…夜更かししすぎちゃいけないと思って寝ちやつてたの。大丈夫だった？何か問題とかなかった？」

「えっと…その…その事なんですけど…実は問題があったようで…」

歯切れの悪いほむらにマミはグイツと顔を近づけて何があったか聞いた。それにはワツと驚いた様子で顔を赤くしていたほむらだったが…やがて衝撃の事実を口にした！

「私の記憶がちよつとだけ無くなっちゃつたみたいなんです…！」

………

………

…【昨日の出来事】

「ん……んんっ……あれ……ここは？……むぎゆっ!?」

「ほむらちゃん……良かったっ！良かったよお！」

魔法女の攻撃を受けて、ダウンしていたほむらがゆっくりと身体を起こす。キョロキョロと周りを見渡した彼女が見たのは天井の屋根に穴が開き、老朽化が進んでいる廃工場だ。

なにやら目が点となって首を傾げている彼女へすぐさま隣でずっと看病をしていたまどかが彼女を抱き締める。無事で良かったとワンワンと泣くまどかにほむらはポツと顔から湯気が出そうな程、赤くなつて戸惑っていた。

「……か、鹿目さん……苦しいよ……！私は大丈夫、大丈夫だからっ」

ほむらはなぜか少し照れながらまどかの抱擁から抜け出す。その様子に違和感を覚えたまどかとカービー。そんな中、魔法少女の姿から制服姿に戻ったさやかがばつが悪そうな顔で彼女に声をかける。

「転校生……その、あなたの忠告は無視して魔法少女になっちゃった。でも、あたしにはど

うしても叶えたい願いがあつた！だから、後悔はしてないよ」

「えっ……あ……いえ、美樹さんさえ良ければ私は構わないと思いますっ。これから一緒に頑張ろうね？」

「「!？」」

さやかは絶句していた。いや、さやかだけではなくその場にいるまどかやカービー、杏子ですら以前のほむらの口からは発せられないであろうその言葉に驚きを隠す事はできないでいた。

巴マミに次ぐベテランである佐倉杏子は今のこのほむらの状態について様々な思考を巡らせる。やがて、一つの答えにたどり着いた。

「…おい、ほむら。アタシやカービーの事はわかるか？」

「…？佐倉さんはわかりますけど…カービー？」

「「!？」」

Σ(?!?)c(へぼよ!?)

なんと！ほむらはカービィの事を綺麗さっぱり忘れてしまったのだ。杏子に呼ばれ、ほむらの前に出たカービィを暁美ほむらは「魔法の使い魔!」だなんて言っている。

「…おそらくこいつは魔法の攻撃で記憶が飛んじまったんだ。だから、言葉遣いも変だし…このピンクヤローの事も忘れちゃってる」

「まってよ！確かカービィはあたしやまどかより転校生との付き合いは長いはずだよ!?! なんであたしたちは転校生に覚えられてるわけ?」

さやかと言うとおりでまどかやさやか、杏子の本人たちはほむらに対してカービィよりも付き合いが薄い。

しかし、杏子はまどかに促されおそろおそろカービィへと手を伸ばすほむらを見ながらこう告げる。

「アタシもこないだほむらとあつたばかりだったが…ほむらの方はどういう訳かアタシの事を知っていた。それにこいつ、カービィの好きな食いもんは知らない癖にアタシの好きな食いもんは把握していたんだ」

「…っ!?まどかもなんか似たような事を言ってたっけ…転校生とは昔からの友達だったみたいとか、夢で見た事があるだとか…」

「…まあ、詳しい事は専門外だからわからねえ。明日、ママのヤローにでも話を聞いてみるんだな」

そう言うと杏子は変身を解いてほむらと彼女の腕に抱かれたカービィを引き連れてこの場を後にした。

帰った後に杏子が色々な質問をほむらにした所、基本的な事は覚えているらしく、忘れていたのは皆と出会った経緯と言葉遣い、そして…カービィの事だけのようで魔法少女に変身する事も問題なく出来るようだった。

その為、普通に生活は出来そうだった問題ではないと判断した杏子はふとしたきっかけで思いつくかもしれないと考え、これまで通りの生活を送るように彼女に言ったのだという。

……………今に戻り

「…という事があったんです。巴さん、何かわかる事はないですか?」

「えっ…ええと…そうね…」

可愛らしく首を傾げてそう聞く眼鏡をかけたほむらにママは少しドキツとしてしまう。彼女がいつも見ていたのはクールで冷静沈着なほむらで時折見せる年相応の自然な表情がママは好きであった。

目の前の暁美ほむらと以前の暁美ほむらのギャップにママは戸惑いつつも自身の知っている事を彼女に話し始める。

「本当に身体はなんともないのよね？」

「あつ…はい！カービイの事とか皆と出会った時の事とかの記憶がすっぼりなくなつて落ち着かない気持ちがありますけど、身体の方は平気へっちゃらですっ」

「なら、私も佐倉さんの言うとおりで今までと同じように生活して少しづつ思い出していくというのがいいと思うわ」

「そうですか…わかりました…」

「それにしても私がない所で凄い事になってたみたいね…」

ハコの魔女により集団自殺がなされようとしていた所にほむらとカービイが乱入。

一時的に仲間になった杏子とその場にいたまどかが周囲の人々を避難させ、ほむらとカービイがハコの魔女とその使い魔を抑える。

しかし、魔女の一撃でほむらが倒れ、絶体絶命となった所で契約を交わし、魔法少女となった美樹さやかが助太刀。カービイとさやかでハコの魔女の撃破に成功するがほむらの記憶がなくなってしまった…

昨日の間に起こったこの出来事に参戦できなかった自分を責めつつも杏子の協力とさよかの契約に彼女は喜びを覚えていた。

「美樹さんの契約で仲間が増えたのは嬉しいけど…まさか佐倉さんも力を貸してくれていただけなんて…」

「そういえば二人は知り合いだと佐倉さんから聞きました。二人はどんな関係だったんですか？」

「…彼女が新米の魔法少女だった時に手を組んでいた時期があつたの。あなたとカービイみたいな関係…あっ、ごめんなさい。覚えていないのね…」

「…カービイは私を友達って言ってくれました。彼の事だけでも早く思い出したいです…」

杏子に預けられ、今頃彼女と朝ご飯を食べているカービイの事を思い出すほむら。

記憶をなくしてしまう前のほむらとカービイは相棒のような間柄であったと杏子から聞かされたが、彼の事は一向に思い出す事はできなかった。

なので、ほむらはなくなつた記憶を取り戻す為、まずはカービイの事について調べる事にした！

18. なくしてしまった記憶

ガラガラガラ……とおそるおそるドアを開け、教室に入ってきた暁美ほむら。長く伸ばしていた黒い髪を三つ編みにして眼鏡をかけたほむらのその変貌ぶりに教室の視線が一斉に集まる!

クラスメートたちの注目にドアの前でカチコチに固まってしまふほむらだが、すかさずまどかとさやかが彼女に助け船を出す。

「…え、えつと…あつ! 昨日、まどかに見立ててもらったんだつて! よく似合つてるじゃない! 転校生!」

「あ、そうそう! 今日はずれでできてくれたんだね! ほむらちゃん可愛いよつ」

まどかとさやかのフォローにより、ほむらに対する視線は幾分かマシになる。ようやく立ち直る事ができたほむらは机に荷物を置くと早速、二人に自分の部屋に住まうピンの同居人についてどう思っているか聞いていた。

「カービイについて? あの子はちよつと…いや凄く食い意地が張ってるけど、とても優しくいい子だよ!」

「あたしも悪いやつじゃないと思うよ。それにもしもさ、カービイが危ない奴だったとしたら前のあんたは絶対つるまないっしょ!」

まどかはもちろんの事、さやかもカービイに対してかなり好印象を抱いている。彼に關して記憶のないほむらから見てもカービイは悪い子とは思えないので信用はしていた。

「じゃあ…カービイっていったい…? 魔女の使い魔ではないんだよね?」

「キユウベえは確か…ポップスターのププランドからきた宇宙人だとか言ってたような…?」

「う、宇宙人…!?」

ほむらが思い浮かぶ宇宙人というのはテレビとかでよく見る人型で丸い目と大きな頭をした奇形のエイリアン。しかし、カービイが宇宙人だと聞いて世間一般で広がっている宇宙人像は間違っている事を知る。

「そうだね、カービィについて聞きたいんだったらキュウベえに聞いてみなよ！あいつ、カービィとも会った事があるみたいだったからさ」

「キュウベえが？わかった…そうしてみるね」

「ほむらちゃん…あれだけキュウベえの事嫌ってたのに今は大丈夫なの？」

まどかは彼女がキュウベえを苦手…いや、冷たい視線を浴びせ、強く憎んでいた事を知っている。なので、彼女に大丈夫なのかと問いかけるがほむらはしばらくキョトンとした後に首を傾げた。

「私がキュウベえを…何でだろう…？」

「どうせあいつに何か食べられたとかしような理由じゃないの？キュウベえのやつ、意外と遠慮を知らないからさ」

「…だといんだけど…あつ、一限目が始まつちゃう！ほむらちゃん！さやかちゃん！また後でねっ」

「うん！（キュウベえかあ…どうして前の私はキュウベえが嫌いだったのかな…理由もなく嫌いにならないとは思うけど…？）」

.....

学校が終わったほむらはまだか達と別れて大人しく家に帰宅する。本人は魔女を倒すべく気合いを入れていたのだが、病み上がりが無茶しないようにとママやさやかから念を押されてしまったては素直に頷く事しかできなかった。

家には誰もおらず、机には『遊びに行ってくる。飯までに戻る』と紙に汚い字で書き置きされていた事から杏子とカービィはどこかに出かけているようだ。

「一人かあ……ちよつと寂しいな」

ハア……と小さくため息をつきながら制服を脱いでいくほむら。カービィと杏子が帰ってくるまで何していいようかと考えていたほむらの後ろから突然、聞き覚えのある声がかかけられる。

“ やあ、ほむら。大変な目に：「ひやあああつ！」 ”

突然聞こえてきた声にビクツと大きく肩を震わせ、普段のほむらからは考えられないような悲鳴を上げる。

運が悪い事に彼女は私服へと着替えている最中であつた。今の彼女の姿はスカートこそ穿いていたものの上半身は衣服を着る前で真っ白の獣の目にはしっかりと彼女の下着と肌色が見えていた。

我に返つたほむらはすぐさましやがみ込み、脱いだ制服を抱きしめて胸周りを隠す。

「キュウベえ！む、向こうに向いてて!!」

“ 訳がわからないよ。確かに君の事は興味あるさ。だけど君のその貧相な身体になんてこれっぽっちも興味は：「いいから〜!!」 ”

やれやれ：と訳の分からないといった様子で彼は後ろを向いた。私服へと素早く着替えたほむらは台所へ行き、猫用の器に牛乳を注いでキュウベえへと差し出す。

“ …なるほどね。確かに記憶を失っているようだ。僕をもてなすだなんて以前の君

からは考えられないよ”

「あつ…その事なんだけど…どうして私はキュウベえと喧嘩してたの?」

“ さあ…僕には覚えがないね。おそろくさつきみために君の怒りを買ってしまったからじゃないかな?”

差し出された牛乳を猫のようにペロペロと舐めるキュウベえの顔は見えない。ほむらはそれで納得したようで次にキュウベえがわざわざ会いに来た理由を聞く。

“ 君も記憶が早く戻る事を望んでいるんだろう?だから、君が忘れた事を僕が教えてあげようと思ってね。どうだい、ほむら”

「あつ…えつと…お願い、キュウベえ!」

—— 一方その頃、カービィと杏子は…

夕日が空を茜色に帰る頃、杏子はたい焼きを頬張りながら見滝原の町を歩いてた。彼女の肩には大きなトートバッグをかけられており、なにやらもぞもぞと蠢いている。

そのバッグの中から小さな声でたい焼きと呟く声が聞こえてきた。杏子はチツと舌打ちをしたものの食べていたたい焼きを半分だけ食べ、残りはトートバッグの中に突っ込む。

「…まったく…アタシから食べ物奪うなんていい度胸してんなあ」

杏子の手にはもうたい焼きはなかった。かわりに涎がべったりとついていて。それを着ているパーカーで拭き取り、魔女の探索および食べ歩きを続行。するとどこからか肉を焼く、香ばしい香りが漂ってきた。

「…おっ！焼き鳥だつてよ。どうだい？」

端から見ると道中で立ち止まり、独り言を言っているように見えてしまうがそうではない。その返事はトートバッグの中から聞こえてくる。

そう、そのバッグの中にはカービーがいた！彼は身動きが取れない為、窮屈そうにしていたが少し我慢するだけでおいしい物が食べられるので不満などなかった。

食べるという返事を聞いた杏子は屋台で売られている焼き鳥を頼んでいたのだが：指輪となっていたソウルジェムが突然、淡く光を放つ！

「…っ!?近くに結界があるな…当たりかもしれねえ！」

焼き鳥を受け取ってバッグへ入れた彼女はその反応がある方へ駆け出す。反応があつたのはここからそう離れていない所。

雑魚の魔女でなかつグリーフシードを落としてくれ…そう願いつつ彼女とカービーは町の裏路地にできた結界の前へやってきた。

夕暮れ時という時間帯ではあるが人通りのない裏路地である為、見られる心配もないと考えた杏子は焼き鳥を美味しそうに頬張るカービーを取り出し、地面に置く。

「カービー、今から…あつ！てめえ…！焼き鳥全部食いやがったなつ！」

c (???) つへうまつうまつ

10本買っていた焼き鳥は全てカービイの口の中でご丁寧に串まで食べるカービイの頬を両手で杏子はぼよぼよする。

だが、食べ物への借りは後…そう思い、彼女はげふつと可愛らしくゲップをしたカービイと共に結界の中へ侵入した。

中は巨大なクレヨンや積み木が散乱する子供の玩具箱のような空間だ。そこで二人は奇声を発しながら結界内を小さな飛行機で逃げ回る使い魔と…

「そっちにいったわ！美樹さん、お願い！」

「任せなさい！まどかっ！あたしがカツコ良く決めちゃう所、見ててよねっ」

Σ(？o?c)へまろか!?マミ!?!:さやか?

リボンを伸ばして逃げ場を塞ぐバマミと積み木を足場にして飛び上がり、使い魔を切り落とすが盛大にスカッてしまう美樹さやか、そして遠くからそれを見て苦笑いする鹿目まどかの姿がそこにあつた。

19. 魔法少女達の集結

「美樹さん、落ち着いて！佐倉さんも……こんな事……意味がないわ！」

「こいつは……こいつは！使い魔を逃がすんですよ!?そのせいで襲われる人たちがいるにも関わらず……許せないっ」

「へえ……じゃあアンタはグリーンフシードが勝手に生えてくるものだと思っっているわけだ……いったい誰に似たのか、おめでたい奴だねえ」

「マミさんの事をバカにするなっ!!」

今にも杏子に飛びかかりそうなきやかの腕をマミが掴む事により、二人の衝突はなんとか回避されていた。がこのままではどちらかが先に攻撃を仕掛け、戦いとなるのは時間の問題であろう。

人々を守るはずの魔法少女たちが今、争おうとしている。まさに一触即発のこの状況を変えるべくカービィを抱えたまどかが杏子とマミ&きよかの間に入った。

「なんで……なんで魔法少女どうしで喧嘩しなくちゃいけないの!?こんなのおかしいよっ

「！」

（っ？っ）へぼよっ！

「ママやさやか、杏子とも関わりがあるカービイもまどかと共に止めに入るが険悪なこの雰囲気は収まらなかった。いったいどうしてこのような事になっているのかという
と……

……………

「結界は魔女だけでなく人を襲う為に使い魔も作る。この結界内に魔女はいなかったのだ。ママとさやかの二人はこの結界を作り出した使い魔を倒そうとさやかの特訓を兼ねて戦闘していた。」

「チツ…バカだね、アイツら…使い魔なんか倒したって何の得もありやしないのに」
（っ？っ？っ）へぼよ？

それを見た杏子は舌打ちを一つと苛立ちを抑える為か、ROCKYを口に運ぶ。杏子の苛立ちの理由をカービーが聞いた所、魔法少女にとって使い魔は必ずしも倒さなくてはならない存在ではない。むしろグリーンフィードを落とさないぶん、戦うだけ無駄な存在だ。

しかし、使い魔は人を襲い、力をつけると魔女へと進化する。なので、邪魔にならない使い魔は見逃してその使い魔が成長した魔女と戦う…それが本来の魔法少女のあるべき姿なのだ。杏子は彼に説明する。

「…それにしてもちんたらしてやがるな…マミのヤロー後任の魔法少女でも育成してんのか?」

「(?!?)へさやか!」

「さやかか…そういやこの間の時にもいたあいつか。あの時はこっちの大将がハマこいたからたいした挨拶も出来なかったが…」

何か悪戯を考えついた子供のような笑顔を見せる杏子。すると、杏子のソウルジェムが赤く光を放ち、彼女の姿を変えていく!

瞬く間に赤を基調とした魔法少女姿になったかと思うと手に炎を浮かび上げ、その炎で自身の身を上回る程の槍を作り上げる。

「アタシ流の挨拶を叩き込んでやるかな…どいてろ、カービィ」

もう片方の腕でカービィを掴んだ杏子は彼をピヨコンとピンク髪が飛び出している積み木の方へと投げる。突然、降ってきたカービィに驚く声が聞こえるが知ったこつちやない。

杏子は近くの積み木を足場に三角跳びの要領で縦横無尽に飛び回る使い魔の元へジャンプすると…その脳天を槍で貫いて見せる。そして、そのまま勢いよく地面に落下し、使い魔を絶命させた。境界は消え、辺りは夕日が差し込む裏路地の風景に戻っている。

「あ、あなたは…この間の…?」

「佐倉杏子、アンタと同じ魔法少女さ。だけど、あまりにも不甲斐ない後輩を見ちまつたもんでつい手出ししちゃったよ」

使い魔から槍を引き抜いた彼女は駆け寄ってくるさやかとママに向き直ると蔑むようにさやかを挑発。それを聞いたさやかはしばらくの沈黙の後、真つ赤に顔を染め上げて杏子を睨みつけていた…のだが、そんな彼女の後ろから複雑な表情のママが前に出る。

「…佐倉さん。久しぶり、ね」

「…ああ、相変わらずこんな甘つちよろい事を続けているんだな。倒しても何のメリツトもない使い魔なんて放っておけばいいのにさ」

「…っ!? 曉美さんやカービーと仲間になったって聞いたからあなたも変わってくれたんだって思ってた。残念よ…」

「はっ！ アイツらとは利害の一致ってヤツだ。人はそう簡単に…「ちよつと待ってよ！」」

杏子とママとの会話に割って入ったのはさやかだ。その顔は先ほど同様…いや、先ほど以上に怒りに燃えていた。その理由は簡単だ。

「あんたがママさんと昔何があったのかは聞かない…だけど、あんた！ 使い魔を見逃

すっていうの!？」

「何か大元から勘違いしてるようだから説明してやるよ。食物連鎖って知ってる? 学校で習ったよねえ? 弱い人間を魔女が食う。その魔女をアタシたちが食う。これが当たり前のルールでしょ? そういう強さの順番なんだから」

「つーこのお!!」

——以上がこの無意味な争いの理由である。

まどかとカービィとマミがヒートアップする二人を止めようとする。しかし、自身の正義感から頭に血が上ったさやかと笑いながら挑発し続ける杏子を止める事はできない。やがて…

「まさかとは思うけど。やれ人助けだの正義だの…その手のおちやらけた冗談をかますためにアイツと契約したわけじゃないよね? アンタ」

「だったら…なんだって言うのよ!!」

「美樹さん!」「さやかちゃん!!」「ぼよ!!」

マミの制止を強引に振り切り、さやかが杏子へ駆け出す! 技術はないもののスピード

だけなら並大抵の魔法少女を上回る彼女に杏子は少し驚いたがそれだけだ。

大きく振りかぶった剣が杏子の身体を切り裂く前にさやかは腹部に重たい蹴りの一撃が入られる。その後、槍の柄の部分で怯んださよかの身体を吹き飛ばした。

「さやかちゃん!？」

「ま、トーションローじゃこんなもんだろうな…ん?」

荒々しく息を吐きながらもさやかはゆっくりと立ち上がる。その口元からは血も吐き捨てられたが、彼女の闘志は消えていないようだった。

「あんななんかに…あたしは負けない…っ!」

「…うぜえ。超うぜえ!」

杏子が槍を回しながらふらふらなさやかに向かって駆け出した。さやかも迎え撃つべく剣で構えをとるのだが…杏子は空中から降ってきたピンクの影の蹴りで武器を落とされ、さやかは地面から生えてきたりボンでその動きが止められる。二人を止めた人物はやはりカービィとマミである。

「いい加減にしなさい！それ以上あなた達が戦おうとするなら私とカービイが黙って見
ていないわ！」

「もがもが！」

「…アンタの言うことをアタシが聞くと思うか？ようやく楽しくなってきたトコなん
だ。カービイ！後でまたなんか奢ってやるからそこをどけ！」

（っ？っ、）へ…ダメ！

杏子の行く手を塞ぐカービイ。彼女の食べ物の誘惑にもカービイは負けない。なぜ
なら、マミとまどかに先に餌付けされたから…だけでなく仲間が無意味な争いをするの
はカービイも見えていられなかったからだ。

「チツ…なら、さっきの食べ物の借りも含めて少し痛い目を見てもらうよ！カービイ！」

再び槍を作り出した杏子はカービイへと穂先を向けた。ぽよ!?と少し驚きつつも
カービイもすぐに戦闘態勢に入る。緊迫したその間にまどかが割り込んできた。

「も、もう止めて！こんなやつてないよ！魔女じゃないんだよ？どうして味方同士で戦わなくっちゃいけないの！」

「…まどかの言うとおり。佐倉さん、槍を収めてください」

人通りのない裏路地に入ってくる影が一つ。カチツと機械音がしたかと思うとその影は一瞬にしてまどかの隣に現れる。

(???)
へほむら！

長いロングの髪を三つ編みに束ね、眼鏡をかけた魔法少女。暁美ほむらがこの場に現れたのだ。いつの間にかさやかかの動きを止めていたリボンもバラバラに引き裂かれている。

「暁美さん!?!どうしてここに…」

「キュウベえから皆が戦ってるって聞いて駆けつけちゃいました。間に合って良かった…」

ほむらは杏子の方へ向き直る。カービィに邪魔され、ほむらにまで乱入されてはさすがに分が悪いと見たのか杏子はそっぽを向いていた。

その様子にホツと一息ついた後、彼女はその場でスーハーと深呼吸をする。そして：

「2週間後……」見滝原に「ワルプルギスの夜」が現れます。カービィ……佐倉さん……巴さん……美樹さん……そして、まどか……！私に力を貸してください！」

隣にいるまどかを横目にワルプルギスの夜の話を切り出したほむら。カービィにはその視線はまるでまどかに契約を進めているように思えてしまうのだった。

20. 敵か味方か：

「ワルプルギスの夜」またの名を舞台装置の魔女。超大型の魔女でこの世の全てを戯曲に変えるまで世界を回り続けると言われている。

他の魔女とは違い強大すぎる力を持つ事から結界内に身をひそめる必要がなく、出現しただけで現実世界に自然災害として多大なる被害をもたらすという。

「これがワルプルギスの夜よ。わかったかしら？」

c (??) つココココ

「ワルプルギスの夜」について知らないまどかとさやかとカービィはママから簡単に説明を受ける。ようするにとてつもなく強くデカイ魔女という訳である。

「協力するのは構わない…だけど、どうしてこの見滝原にくるのがわかるの？」

「それは…その…」

“それは僕が彼女に教えたんだ”

どこからともなく現れたキュウベえが素早くほむらの足を上つて肩に座る。キュウベえ曰わく、今日観測できた情報でほむらに教えたのだという。

「ん？アタシはほむらから前もつて知らされたぜ？こいつらと共闘してるのもワルプルが出るつて聞いたからだからよ」

「えつと…それは記憶が曖昧で…なんでキュウベえより先に知っていたのかは私にも…」

“ ほむらが持っていた記憶は僕も興味がある所だけど、今は…”

ほむらはコクつと頷くとまどかの方へ向き直り…

「まどか…：お願いがあるの。私たちと一緒にワルプルギスの夜を倒してほしい」
「えつ…：それつて!!？」

Σ (? ? o ? c) へほむら!?

あのほむらがまどかに契約を迫っている。おそらく以前のほむらはまどかが契約し

てしまえばどうなるか…ほむらは知っていた。なので止めていたはず。

しかし、今のほむらは魔女の攻撃が原因で記憶を失っている…偶然か必然か、そこをキュウベえは突いたのだろう。心なしかキュウベえの赤い瞳は輝いているように見える。

「キュウベえ、この場にいる魔法少女とカービイが力を合わせたらワルプルギスの夜は倒せるかな？」

“…確実に勝てる…とはいえない。相手は最強の魔女だ。カービイがいるとはいえ、厳しい戦いになる事が予想されるね”

「そんなにその…なんちゃらギスって強いのか!？」

「ワルプルギスよ、美樹さん。そうね…噂では誰も倒せない魔女だと聞いてるわ。正直、私も一人じゃ倒せる自信がないわね」

「ふん、それで?…こいつの契約すりゃあ何かが変わるのかよ。その話が本当なら魔法少女が一人増えた所で何の解決にはならねえはずだ」

ふるふるとキュウベえが首を振る。そして、オドオドとして回答を待つまどかへと赤い瞳を向けた。

“ いやや、まどかが持つ力…それは普通の魔法少女が持つ力を遥かに越えている。いや、凄いななんていうレベルは控えめな表現だね。最強の魔法少女になるのは間違いないだろう”

「……………本当に私が契約すれば…その魔女を倒せるの？見滝原の町を守れるの？」

“ 君が本当にそれを望むならね。だから、まどか…僕と契約して魔法少女になってよ！”

キュウベえがまどかの前に行き、耳から生えた毛のような物を彼女に伸ばす。まどかは一瞬、躊躇いを見せたが目を閉じ、それを受け入れ…

(?…?) へぼよ！

「カービィ!？」

契約がなされようとしたその時、カービィが耳毛を伸ばすキュウベえとまどかの間に入る。カービィは懸命に首を振って、困惑するまどかに契約はダメだと伝えていた。

「邪魔しちやダメだよ。こっちで待とう?」

(?~?) (へけくやく!ダメ!)

「カービィ?どうしたの?」

とほむらがカービィの腕を掴むもそれを振り払い、まどかの契約を阻止しようとキュウベえを睨み続けている。

おそらくこれは記憶をなくしたほむらをそそのかし、契約させようとキュウベえが組んだ展開なのだ。カービィは考えた。

契約を邪魔し、睨みつけるカービィをキュウベえはただ黙って見つめていたがやがて

“ …なるほどね、君がわざわざ遠い星からやってきた理由がわかったよ。そういう事だったんだね”

(つ?~?) (???)

“ 君の目的はこの星を自分の物にする事。そうだろう?カービィ”

その言葉に皆が衝撃を受ける。カービィはすぐにはキュウベえの言葉が飲み込めず、

キョトンとしていたがしばらくしてぼよ!?と大きな声を上げた。

「ど、どういう事!?! キュウベえ!」

“ 僕の仮説だけど…ワルプルギスの夜を倒すには君が契約し、魔法少女となるのがベストだ。しかし、その契約を阻むという事…それはすなわち君が契約し、魔法少女となって強大な力を持つてしまうのを恐れているという事だ!”

“ このままワルプルギスの夜を迎えれば君たち魔法少女たちは全滅、そして、それを覆す力を持つ君も死んでしまう。やがて…ワルプルギスの夜も通り過ぎてしまえば邪魔をする者はもういない…カービィはこの星を好きにする事ができる”

「そんな…まさか、カービィがそんな事するわけないよ! 皆、信じてあげて!」

まどかはキュウベえの言葉が信じられないようでそばにいたカービィを抱きしめている。カービィがこの星を侵略する為にやってきた宇宙人だなんて信じる事はできなかった。しかし…

「カービィから離れて…! まどか!」

「さやかちゃん!」

さやかはカービィに剣を向けていた。カービィの事を信じたい。だけど、信じられない…そんな顔をさやかはしていた。

続けて沈黙を保っていた杏子も小さく息を吐きながらカービィに槍の穂先を向ける。まどかの腕に抱かれたカービィはこの状況に目をパチクリとさせていた。

「…ママさんとはむらちゃんもカービィが悪い子って思ってるの…?」

「私は…この子が悪い子だとは思えない。カービィが鹿目さんの契約を邪魔するのもきつと何か意味があるんだわ!」

ママはさやかと杏子に武器を向けられる二人の間に立ちふさがる。彼に命を助けてもらった…自分の作った食べ物美味しそうに食べてくれた…そんなカービィが悪者なわけがないとママは確信していた。

「…今の私はほとんど付き合えないからカービィの事はわかりません。だけど…キュウベえが間違っているなんて事は…」

(っ??)へけくやく! 魔女! けくやく! 魔女!

カービイは必死に魔女化の真相を伝えようと声を上げる。しかし、単語だけでは意味は伝わらない！

唯一その事実を知っていたほむらも記憶がない為、カービイの言葉の意味がわからず怪訝な顔をしていた。

「カービイ？ 私は魔女と戦うのは平気だよ。町のみんなを守るなら：私は怖くない。それにさやかちゃん、マミさん、杏子ちゃん、ほむらちゃんもいてくれる！ 私は大丈夫だよ？」

(っ？！) へ魔女！なる！魔法少女！魔女！

「えつと…それはいつたい…？」

“ まどか！カービイは信用できない。その言葉に耳を貸しては駄目だ！”

有無を言わさぬキュウベえにカービイもムツとしていたがこれ以上の説得は不可能であると考え、彼は空に向かってその短い手を掲げた。すると、オレンジ色の空からびゅるるつと音を立てて何かが飛来してくる！

「っ!? なにあれ!?!」

“ ワープスター…!?! ”

「あれは…あの時の! ひゃあっ?!」

文字通り星の形をしたワープスターなるものが空からカービイの目の前に現れる。カービイは素早くまどかを吸い込むとその星に乗り込み、そのまま空へ飛び立つていった!

「まどか! カービイ!?!」

“ これでわかったはずだ! カービイを信用してはいけない! まどかを早く取り返すんだ! ”

まどかを吸い込み、この場を立ち去ったカービイ。彼のその行動にある者はさらなる不信感を抱かせ、ある者はそれでもなお信じ続け、そして、またある者は彼の発した言葉の意味を考えさせられる事になった。

21. 魔法少女と魔女

日が落ちて夜の闇が落ちた空を駆ける星が一つ。おそらくこの星は地上からみれば流れ星か隕石かと思うだろうが、これは流れ星でも隕石でもない。

カービィがキュウベえと魔法少女たちから逃げる為に呼び出したワープスターでその背にはカービィも乗っている。

「か、カービィ……ど、どうなってるの〜」

カービィの口の中には鹿目まどかがいる。彼女を安心させる為に『ぽよっ!』と声を出した後、ここまできたら追ってこれないと考え、どこかの廃れた公園へと下降していく。錆び付いてボロボロの看板には神浜と書いてある事が窺えた。

もう夜の為か、元々そういう土地であるからか周囲に人の姿はない。カービィはワープスターに手を振って空へと返してやった後……

(っ?・0・)へびゅ!

「わあっ!？」

大きく口を開き、中のまどかを外に出す。カービイの涎で彼女の制服がべっとり濡れている為か、まどかかもじもじと動きづらそうにしている。

(つゝ?)へごめんなさい…まろか

「ううん、怒ってないよ。それより…」

まどかは聞きたかった。なぜ、カービイは自分の契約をみんなに誤解されてまで止め、あの場から逃げ去ってしまったのか。そして、彼が発した「魔法少女」「魔女」「なるー!」の言葉の意味が知りたかった。

まどかは今、恐ろしい想像をしている。カービイが言った言葉を繋げると…とんでもない事が浮かび上がってしまうのだ。

「カービイ、あなたは魔法少女が…魔女になるって言うの?」

(つ?ゝ) コクコク

「でも、キュウベえはそんな事!それにそれに…!」

それはいかにカービィを信頼しているまどかでも簡単に信じる事ができなかった。去り際のほむらが言ったようにキュウベえが嘘をついてるとは思えないでいた。

「カービィはそれが本当だと思ってるんだよね？」

(っ?っ)へほよ!

「…わかった。そこまで言うんだったら私…魔法少女の事を確かめてみてから答えを出す!」

どうやら、まどかは契約を全ての真実を知ってからする事にしたようだ。ひとまず星の危機は去った事にホツとするがまだ油断はできない。

誤解をさせてしまった魔法少女たちの事も気にかかるがなによりキュウベえがどうアクションするのか…まどかを契約させる為にあの手この手で誘惑するであろう。

(っ〜っ)へむ〜!

「ね、ねえ…カービィ…」

難しい事を考えていた為、注意力が散漫になっていたのかまどかの声でハッと我に返るカービィ。彼女の声は震えていた為、何かかと思いまどかの方へ向くカービィだが…その理由はすぐに理解できた。

この公園のド真ん中にグリーンフシードが刺さっていたのだ。もう溢れんばかりのどす黒い穢れが貯まっている事からそれは今にも孵化しかかっていた。

「もし、こんな所で魔女が孵化したら…！あつ！」

カービィが吸い込もうとした瞬間、タイミングの悪い事にグリーンフシードが孵化してしまう！それにより、この公園は魔女の結界へと変化した。

公園には変わりないものの夜であった空はオレンジに染まり、辺りには子供が使った遊ぶようなフォークやキューブが散乱している。

そして、カービィとまどかという侵入者に結界の主が気づいたのか…

「か、囲まれちゃった…！」

(?~?)へむう…！

瞬く間にアリののような使い魔が二人を囲んでしまう！ぞろぞろと集まる使い魔にまどかは身体を震わせてうずくまってしまいが、カービィは彼女を元気づけると飛びかかつてきた使い魔を一匹飲み込んだ！

「カービィの姿が変わった！あれは…ヨーヨー？」

星マークのついた帽子、頬には絆創膏と少年を思わせる風貌をしたカービィ。そして、彼のその手には一つのヨーヨーが握られていた。彼は群れをなして自分たちを囲む使い魔を見ると…

「(？。o?)へまろか！頭、上！

「乗せればいいの!?!わかった！」

まどかはすぐさまカービィを頭の上に乗せた瞬間、囲んでいた使い魔たちが一気に動き出す。自分の周りにカサカサと迫りくる巨大なアリのまどかはひつ…と悲鳴をあげるがその使い魔たちがまどかに触れる事はなかった。

「えっ……えっと、私は……魔法少女じゃないです。魔法少女の事は知ってますけど……」

長く伸ばした美しい青髪をかきあげる女性。そこから覗かせる整った顔立ちに、まどかは見惚れてしまう。しかし、彼女のその瞳は生気が感じられず、虚ろで……どこか悲しげであった。

「あなたは……魔法少女……なんですか？」

目の前の女性の胸に輝く青い宝石、それはどこか見覚えがあった。確か、キュウベエとの契約で出来るソウルジュエムというものだったか……となれば彼女は魔法少女という事になる。

彼女はその言葉を無視してまどかとカービィにきびすを返して歩き出す。その方向は結界の深層……すなわち魔女が巣くう所だ。

「まって……まってください！」

「……この魔女は私が刈る。ケガをしたくなければ……」

「け、結界の出口……わかる？カービィ」

(?~?) プンブン

頭の上にいるカービィは首を降っているようだ。魔法少女の女性はこちらを向く事はなかったものの歩みを止め、手でついてこいと二人に答える。なので、大人しく彼女についていく事にした。

「私にあまり近づかない方がいい。死にたくなければ、ね…」

進んでいく中でふいに彼女がそんな事を言い出した。言葉の意味がわからずまどかと彼女に抱かれているカービィは首を傾げている。

「どういう事ですか?」

「そのままの意味よ。さもなければあなたも死ぬか、絶望する事になる…」

そう答える彼女の声色は真剣そのもので冗談を言っているようには聞こえない。やがて、もう話す事はないと言わんばかりに彼女は足早にこの結界内を進んでいく。見失わないように懸命に追いかけるまどか達。そして…

〇〇(？〇?)〈魔女！

「でかい…あつ…！」

砂場を進んでいくとたどり着いたその先には家のような大きさの何かが蠢いていた。それは砂場で遊んでいる魔女で赤のバケツとシヤベルが刺さった茶色の髪を揺らしながら、砂場の砂で子供のように砂の城を作り上げている。

そんな魔女にトップスピードのさやかかスピードに匹敵する程の速さで魔女に駆け出し、杏子のような槍さばきとマミに負けるとも劣らない技で砂場の魔女を圧倒していく！

「でも…あの人…」

(っ?ゝ)〈…ダメ！

圧倒的な力を見せる彼女だが、彼女を振り払う魔女の反撃をかわそうともせず血を吐きながらも立ち上がり、再びその槍で何度も何度も攻撃している。

防御を考えない女性の身体を守っていた胸のプロテクターはひび割れ、頭からは血も

流れ出ていた。それでもなおソウルジュエムに対する攻撃だけかわし、それ以外の攻撃はかわそうとしない。

それを見ていられなかったまどかと彼女に抱かれたカービィは顔を見合わせると頷きあい…

「お願い！うえい!!」

まどかは助走をつけて魔女に向かってカービィを思いつきり投げる！ヒューンと放物線を描いて飛んでいく彼は魔女の顔を目掛けてヨーヨーを投げた。

砂でできた魔女の顔はバシヤアと音を立てて崩れるがすぐに再生し、元の形に戻っていく。間髪入れずに複雑な面持ちで青の魔法少女はそこへ持っていた槍を突き刺し、落ちてきたカービィを持って距離をとると…

「…アブソリユート・レイン！」

目が塞がり、動かない魔女に水を纏った槍を身体の周りに具現化させた彼女はそれらを連続で放ち続ける！魔女の腹部に一つ、二つ、三つと槍が突き刺さり…それが10を

越える頃にはもう魔女は動かなくなっていた。

「…せめて、安らかに眠って…私も直に…」

粒子となって空に向かって消えていく魔女に変身を解いた彼女は悲痛な面持ちでそんな事を口にいしている。カービィはその言葉の意味は理解できなかったが、彼女が何かを抱えているという事はわかった。

オレンジの空は元の星空に戻り、あたりの風景も元の廃れた公園に戻る。まどかがこちらに駆け寄ってきていた。

「…私と会った事は忘れなさい。それがあなた達の為よ」

そう言って立ち去ろうとする彼女だが、その身体はふらふらでもう立っている事すら辛そうであった。しかし、彼女はそんな事はお構いなしに次の魔女を探すのか…濁ったソウルジェムを手にして闇の中へ消えていこうとする。

「まって！まってください！…どうしてあなたはそこまでして…」

「……これが私の罪だから……願いのせいで死なせてしまった子達と魔女にさせてしまった子達への……ね」

Σ (?o?c) 〈魔女！〉

「そ、その話……もしかして魔法少女は魔女になるって話!？」

「っ……話しすぎたわ。もう私に関わらないで……」

と、立ち去ろうとする目の前の女性の前へまどかは立ちふさがる。どうしても、聞いておかなければいけない事があったからだ。

「お願いします……一つだけ、一つだけ教えてもらえませんか?お願いします!」

「……………」

腕を組んで目を閉じた彼女はどうかやら話を聞いてくれるようだ。まどかは頭を下げ、て聞きたかった事を聞く。残酷な魔法少女の仕組みを……

「魔法少女が……魔女になるって本当ですか……?」

「……………ええ、このソウルジェムに穢れが満ちる時……その時にこの身は魔女になり果て

る。そうやって魔女化した子を何人も見てきたわ。そう何人も…」

悲しみ…怒り…諦め…そう語る彼女の瞳の奥はそんな感情が入り乱れていた。魔法少女が魔女になる…それはすなわちこれまで見てきた魔女の元は自分達と同じ人間という事。

「あつ…ああ…そんな、じゃあ…みんな、みんなっ！」

「…気の毒だけど運命は変わらない。魔法少女は例外なく魔女になる…それが現実よ」

2.2. ほんの少しの僅かな闇

キュウベえとの契約によって出来上がるソウルジエム…それは自分の魂を抜き取って出来上がったモノ。すなわち、ソウルジエムこそが自分の命そのものという事。

さらにそれだけではなく魔法を使ったり、負の感情を抱く事で貯まる穢れ。それらが貯まりきってしまった時…その時には…!

「魔女に…なる？みんな…さやかちゃんも？マミさんも、杏子ちゃんも？ほ…ほむらちゃんも!」

全員が全員そうじゃないかもしれない。助かる方法もあるのかも？そう思ったまどかは一筋の望みをかけて目の前の女性に問いかける。

ふう…と軽く息をついたモデルのように美しい風貌の魔法少女の彼女から返ってきたのは…

「…例外はないわ」

最悪の言葉だった。ポタツ…ポタツ…と雫がカービイの頭に落ちてくる。何かと思
いカービイが見上げるとそれはまどかが零す涙であった。

自分の大切な人たちはみんなこの世を憎み、人々を襲う魔女になってしまおう…中学生
の少女であるまどかにはそれを受け止めるのは不可能であった。

(っ?~)へまろか…

「ひどい…ひどすぎるよ…ぐすつ…みんなみんなっ…願いの為に死ぬかもしれないのに
戦ってる！なのに…あんまりだよっ!!」

「……………希望を信じて戦っていた者はその真実を知り、絶望して魔女となる。ふっ…魔
法少女とはよく言ったものね。いずれ魔女になる私たちは魔法少女と呼ばれるのがふ
さわしい…」

雲が隠す半分かけた月を見上げる青の魔法少女。その瞳は何を映しているのか…か
つての仲間たちか?それとも魔女の姿か?二人にはわからない。

「…あなたはずっと…戦い続けるんですか?ここで一人でずっと?」

「……ここで散っていった仲間たちの為にも私は戦い続ける。この命が尽きるまで……」
「そんなの……悲しすぎるっ！それでいいんですか……？」

女性はほんの少し驚いたように目を見開くと……涙を流し続けるまどかに近づき、その瞳からこぼれる雫を優しくぬぐい取った。そして、戸惑うまどかの顔をジツと覗き込むと薄く微笑んだ。

「あなたは……優しいのね。最後にあなたのような子に出会えてよかった……ありがとう」
「あつ……」

そう彼女は言い残すとまどかとカービィに背を向けてボロボロに傷ついた身体を動かし、次の魔女を探しに出かけていった。

彼女はおそらく死ぬ気なのであろう……しかし、二人には覚悟を決め、去りゆく青の魔法少女を止める事はできなかった。

やがて、ゆつくりと顔を上げるまどか。その目にもう涙はなく、彼女はカービィの背に合わせてしやがみ込み……

「カービィ…私、契約するよ」

Σ (? o ? c) へまろか!?! 魔女!なる!

突然の宣言にカービィも面食らつてしまう。今の魔法少女の話聞いて、なぜ契約をしようという気になったのか…? カービィは魔女になつてしまうと何度もまどかに説明するが彼女の瞳は揺るがない。

「今までずっと誰かの為に戦つてきた魔法少女たちを絶望で終わらせたくなんかない…! みんなを…助けたい!」

(つゝ?) 〓??

彼女には何か考えがあるようであった。しかし…とカービィが思っていたその時、まどかがギユウと身体を優しく抱きしめ、震える声で彼に告げる。

「お願い…カービィ…力を貸して…!」

その言葉に彼はいつもと変わらない笑顔で『ぼよっ!』と返すのであった。

——一方その頃……

姿を消した鹿目まどかとカービイを探していた魔法少女達はカービイならまどかに危害を加える事がないだろうというマミの言葉でしぶしぶ搜索を中断し、各自自宅へ戻っていた。

腹を空かせた杏子と共に家に戻ったほむらは夕飯を用意しながら、ずっとカービイの言ったあの言葉が気にかかっていた。

（魔法少女が魔女？そんなわけない……はずなのに……）

カービイが苦し紛れに放った言葉だと杏子は一蹴している。キユウベえも「魔法少女でもない彼の言葉が信じられるのかい？」なんて言っていた。しかし……

（何かが気にかかる……大事な事を忘れてしまっているような？）

「……い……！おい！ほむら!!」

「へっ？にゅああっ!？」

自分を呼ぶ声でハッと我に返る。エプロンをつけて簡単な野菜炒めを作っていたほむらだが、ずっと考え事していた為か、フライパンの中には真っ黒い炭と何かの塊が出来上がってしまった。

家の中にはもくもくと煙があがり、口元を抑えながら杏子は慌てて呆けた顔で立つほむらを押しのけてフライパンに通る火を消しにきていた。

「火事でも起こす気か？ったく……」

「ご、ごめんなさい……！すぐ作り直すから!」

「チツ……アタシがやるよ。アンタは向こうで座つてな。野菜とか肉焼くぐらいならアタシにもできる」

食べ物を無駄にした為か、少しイラついたのか？杏子はシツシツとほむらをテーブルへ追いやり、手際よく調理にかかる。そんな杏子にほむらは謝ると同時にいなくなつた二人の事を聞いた。

「あん?…アタシはキュウベエの話はあんまり信用してねえからさ。あのピンクがあつちのピンクさえ返してくれりゃ別にどうこうしようだなんて思わないね」

「えっ?」

「アイツの話を全部鵜呑みにするなつて事さ。アイツと長くつき合つてりゃわかるが…まあ、そこはいいか。アタシはワルプルギスさえ越えられりゃ後はどうでもいいんだ。それに鹿目まどかの力があるんだつたら仕方ないだろ」

彼女はちよくちよく肉をつまみ食いしながらそんな事を話す。どういうわけか佐倉杏子はキュウベエをさほど信用していかないらしい。

その理由を問い詰めて聞いてみた所、彼女曰くたいした理由もなく気にしすぎかもしれないが彼が話す内容はどこか胡散臭いんだという。

「マミのヤローやトーシローのアイツはなんとも思っていないようだが、前のアンタはアタシ以上にキュウベエを物凄く警戒してたぜ」

「…そうですか…ところで佐倉さん、言いづらいんですけどお」

あん？と振り向いた彼女は口をもがもがさせながら振り向く。ほむらが席を立ってキッチンで野菜を炒める杏子の横にいき、先ほどから肉をつまみ食いしているフライパンの中を覗き込むと…見事に緑一色となっていた。

「バレた…?」

「むう…当然です！お肉が全部ないじゃないですか！絶対にお肉目当てでしたよね！」

「わりいわりい…あはははっ」

—— さやかの家

まだ20時で年頃の少女ならばまだまだまだ起きている時間帯だ。しかし、美樹さやかは真つ暗な部屋の中で一人、布団にうづくまつていた。その手に淡く輝くソウルジエムを握りしめ、彼女はずっと考え事にふけこんでいる。

「……………」

“ どうしたんだい？ さやか…志筑仁美と会ってからえらく塞ぎ込んでいるじゃないか…”

窓も扉も締めていたはずなのにどこから入ってきたのか…布団の外から頭に響く無機質な声が聞こえてくる。プライバシーもクソもないその生き物に不機嫌になりながらも彼女は身体を起こすと…やはり、勉強机の上にキュウベえの姿があった。

「…いろいろあるのよ…ほっというて」

“ ……………なるほどね。 どうやら君も…使えそうだな”

「…？ 出てっつてよ。 今、機嫌悪いからアンタに当たっちゃうかもしれない…」

……………

カービーがまどかを連れ去り、二人を探していた時…街を走り回っていたさやかに聞

き覚えのある声がかげられた。それは…

「さやかさん！」

まどかとさやかの友達である志筑仁美という少女。ちなみにハコの魔女の集団自殺の時にいたあの少女である。彼女は何かを戸惑っているようではあったがやがて、重々しくその口を開いた。

「…明日お話ししようと思っていたのですが…いえ、私も覚悟を決めました。この後、お時間があります？」

「えっ？あ～…うん」

彼女はさやかに話があったらしく、聞いてみると…なんとさやかの幼なじみの上条恭介に惚れているというのだ！そうとは知らなかったさやかは絶句してしまう。

なぜなら、実はさやかの契約はその彼を思つての願いで美樹さやかもその幼なじみの上条恭介の事が好きなのだ。そして、仁美はさらなる追い討ちをかけてくる。

「私、明日の放課後に上条君に告白します」

「えっ!? こ、告白って…!」

「…丸一日だけお待ちしますわ。さやかさんは後悔なさらないよう決めてください。上条君に気持ちを伝えるべきかどうか」

“では…”と会釈して立ち去る仁美を見つめて道端のド真ん中で固まってしまふ。心ここにあらずというのはまさにこの事でさやかの頭にはずつと上条恭介と志筑仁美がぐるぐると回っていた。そして、気がつけば家に戻り、ベッドで転がっていたというわけだ。

(あたし…あたしは…どうすれば!)

《こぼっ…》さやかの手にする青い宝石の光が微かに闇が差し込み始めた。それはほんのわずかの穢れではある…けれども確実にさやかのソウルジエムを蝕んでいる。

23. 悪夢の始まり

「出てつてよ。キュウベえ…今は誰とも…」

“…そうはいかないよ。この近くに魔女の結界が現れた。放っておくと被害が拡大してしまう…！僕はこの事を知らせにきたんだ”

それには布団にうずくまっていたさやかも無視する事はできず、人々を救う為に顔を歪めながらも立ち上がる。この時間帯に出掛けるとなれば十中八九家族に止められてしまうだろう。

なので、彼女は変身を済ませると部屋に鍵をかけて窓から外へ飛び出した。彼女は目を閉じ、魔女の気配を探ると…確かに近くに反応があった。

「ん…向こうかな？」

彼女は人目につかぬように家の屋根や電柱を駆け、その反応がする方へ向かう！そんな中、キュウベえの声がさやかの頭の中に響いた。

「僕はこの事をママやほむら達に伝えてこよう。さやか…君は魔法少女になったばかりでまだ弱い。だから、一人で無理は…」

「くっ?! あたしを馬鹿にしないで! そんな事わかってるわよ!!」

真実をありのままに話すキュウベえに恋煩いの事もあって不機嫌なさやかはつい顔を赤くして反発してしまう。彼女のへその辺りについたソウルジエムもその怒りに反応し、青く光を放っていた。

「どうやら怒らせてしまったようだね…だけど、くれぐれも…」
「早く行って!」

彼女はキュウベえを自身の肩から降ろし、彼に怒鳴ってしまう。やれやれ…と言わんばかりに顔をふるふると振ったキュウベえの態度にはカチンときてしまうさやか。

しかし、悪いのは不機嫌な自分であると彼女もわかっている為、何も言わず彼を置いて彼女の元へ向かう。

残されたキュウベえはさやかかの中をその赤い瞳で見つめていたが…彼女が見えな

くなるとその口から何かを吐き出した。それは：

“せつかく魔女美研さやかが孵化しかかっているんだ。使わない手はないよね”

キュウベえの吐きだしたモノ：それは限界ギリギリまで穢れを吸いきったグリーンシード。おそらくこのまま置いておけばものの数分で魔女が孵化してしまうであろう。彼はこれをマミのマンシヨンの近く、それとほむらと杏子が共同で生活しているポロアパートの近くに設置する。そして、それが孵化し、魔女が出現した後に何食わぬ顔でマミとほむら&杏子へ声をかけにいくのであった。

.....

「ああ！もう……ウザったい!!」

ザッと大地を蹴り、サーベルのような物を持った影が周囲を囲む黒い触手状の使い魔

を切り裂く！この影は美樹さやかでこの魔女の能力か、結界に入った時にさやかは影のように黒く塗りつぶされてしまっていた。

「くっ…あたしの邪魔をしないでよ！」

魔女を倒せば使い魔も消える…ならば、奥にいるであろう魔女の所に一直線で向かい、速攻で倒せば万事解決だ。

そう思ったさやかは身体に纏わりつこうとする影の触手を無視し、魔女の反応がする方へと一気に駆け抜ける。

並みの魔法少女を優に越えるスピードを持つ彼女は立ちふさがる使い魔の間をすり抜け、いよいよこの結界の主【影の魔女】と邂逅を果たす！

「あれが…魔女！」

影の魔女というだけあり、全身真っ黒で祈りを捧げるロングヘアの少女の姿をしていた。自分に構う事なく背中をむけ、一心不乱に祈りを捧げる魔女にさやかは思わず息をのむ。

隙だらけではある。しかし、何か嫌な予感がする。果たしてこのまま攻撃を仕掛けてもよいものかときやかは足を止めてしまうが…

(いや…大丈夫!あたしには癒やしの魔法もある…!少しのダメージなら!)

契約時の願いにより自分の固有の魔法が決まる。彼女は他者の怪我を治す為に契約をした為、「癒やし」の魔法が備わっていた。

多少無茶をしても回復できる為、いける!と考えたさやかはサーベルの剣先を背をさらす魔女へと向け…今自分が出せる最大のスピードで飛びかかった!

祈りに集中し、背を向けている為か気づいていないはず…だと思っていた。しかし、それは大きな間違いであった。魔女はこちらを見る必要がなかったのだ。

「なっ?!髪が伸びっ?!ぐうっ!!」

祈りを捧げる魔女までもう目と鼻の先という所まできたさやかが剣を突き立てようとしたその時、魔女のロングヘアがさやかへと襲いかかった。

突き出した剣はうねうねと蠢く髪によって掴まれ、その予想外の反撃にさやかはその

手から離してしまおう。さらに、そのまま魔女のロングヘアーはさやかか身体まで伸びてくる！

「うぐぐつ!?!はな…れ…!」

身体を這いずり回る髪の毛から逃れようと振り払ってもがくさやかだが、腰まで伸びる程長い魔女の髪から逃れる事はできない!それは瞬く間にシユルシユルと首にまで伸ばされ、一気に締め付けられてしまおう。

「がつ…ああつ…!?!」

首を圧迫されて息を吸う事ができないさやかは徐々に強まっていく力に意識も遠のいていく…このままでは死んでしまおう!

さやかは震える手を懸命に伸ばし、こんな時でもこちらを見向きもせず祈りを捧げている魔女の上へと剣を具現化。そして、その手を振り下ろす!

【ギヤアアアアツ!?!】

魔法の悲鳴がこの空間をこだまする。彼女の頭にはさやかなのサーベルがずっばりと突き刺さっていた。その傷口から黒い液体が噴き出し、影の魔法は両手で頭を抑えて苦しんでいる。

「今しか…かはっ…げほっ！」

それにより髪の手束も緩んだ為、強引に振りほどいて咳き込みながら距離をとるさやか。首には髪の毛で絞められた痕があり、剣を杖代わりにしてなんとか立っている状態である。

「っ…うっええ…！か、回復を…」

魔法が怯んでいる間に自身に癒やしの魔法をかける。身体から青い光が溢れ出したかと思うと首の痕が薄くなっていく。

治療が完了すると魔法も戦闘態勢に入ったのか、こちらを見ていた。真つ黒く塗りつぶされており、表情は窺えないがその様子から怒りが読みとれる。

「ハア…ハア…お怒りつてわけ？奇遇だね…あたしも虫の居所が悪いんだ。後悔しないですよ!!」

怒りを向けてくる魔女に負けじとさやかは自分の周囲に剣を何本か具現化させて魔女と対峙する。万全の状態へと回復したさやかとそれなりのダメージを負った魔女。

有利なのは新人とはいえ回復能力を持つさやかだとと言える。しかし、怒り焦る彼女が魔法を行使する度に真っ黒な光は魔女結界内の中で青く輝く彼女のソウルジエムを蝕んでいつていた。

………

暗く人通りもなくなった歩道をマミは急いで走っていた。その肩にはキュウベえがいる。

“さすがマミ…魔女を一瞬で倒すなんてね。僕の予想以上だ!”
「キュウベえ!美樹さんはこの先にある魔女結界にいるのよね?」

マミのマンションの近くに出没した魔女はキュウベえが知らせを知らせる前に反応を見つけたマミが撃退していた。

そして、他の反応もいくつかあったのでそこに向かおうとしていた所でキュウベえと出くわしたのだ。そこで彼からはさやかか危ないから救援を頼むと言われ、今に至っている。

“今のさやかは少し精神が不安定だ。僕も無茶はしないように引き止めはしたけど…聞いてもらえてるかはわからない。急いだ方がいいよ!”

「そう。無事でいてよ…美樹さん!」

……

「勝利…頂いたよ！」

「な…なんとかなりました〜」

自宅の近くにでた魔女を今し方倒し終えたほむらと杏子はハイタッチをかわしていた。そして、三つあった反応は一つはすでに潰れ、一つは今潰した為、残るもう一つの反応がある場所へ彼女たちは向かう。

「おい…まだ記憶は治んねえのか？」

その最中に杏子からそんな言葉が投げかけられた。彼女はどうかやら心配してくれてるようでそれが少し嬉しくなるほむら。

最初は自分勝手にいつも食べ物的事しか考えていない子という認識だった。しかし、共に暮らしていてわかったのだが、口では杏子は厳しい事を言うものの実際は彼女も非情に徹し切れていない部分があるのだ。

簡単にいえば素直になりきれないツンデレ少女といった所か？

「ええ、でも少し心に引つかかるような…？そんな違和感はあるんです…」

「へえ…まあ、その…少し調べてはみたが、そういうのはやっぱり何かきつかけがあればすぐに戻るつてもものも多いんだつてよ。もしかしたらふとした事で一気に思い出すかもしれないねえぞ」

「佐倉さん…私の事、調べてくれたんですね！」

…
そう言うことやはり素直じゃない彼女はほむらから目をそらし、そつぽを向く。そして

「あつ…か、勘違いすんな。アタシはアンタが早く本調子になつてもらわねえと困るか
ら言つてんだぞ!?!ワルプルギスだつてくるんだ! 万全の状態じゃないとマズいだろ!?!」
「ふふつ、そうですね…ふとしたきつかけ、か…」

後にほむらは記憶を取り戻す事となる。それは最悪の形となつて…

24. 絶望に沈む人魚姫

何で出来ているかわからない黒い床を蹴る美樹さやか。その瞬間、先ほどまで自分が立っていた場所は槍のように鋭利となった物が突き刺さっていた。

それは魔女の頭部から生えた髪の毛で魔女は髪を変幻自在に伸ばしたり、広げたりしながらさやかを攻撃していた。

「ハアハア……これじゃ近づけない……」

さやかのスピードであれば真正面からくる髪など避けるのは容易い。しかし、問題は彼女に攻撃の手立てがない事であった。

近づこうにも髪に阻まれ近づけず、剣を投げようにも髪によって掴まれる。魔女はそれをわかっているのか、先ほどからこうして牽制の一撃しか入れてこない。おそらく自分の間合いに入ってくるのを待っているのだろう。

「くっ……魔法の使いすぎかな……？身体が少し重い……」

このままではいずれスタミナが尽きて負けてしまう事は明らかだ。一応キュウベエが救援を呼びにはいったものの、このままいつくるのかわからない救援を信じて待つより戦って倒した方がいい。そう判断し、彼女は勝負に出る！

「これで決める……！」

多少のダメージは覚悟してさやかは真つ正面から突撃する！当然、魔女は髪を伸ばして応戦。さやかの身体にズブズブつと槍のように鋭い髪の毛が突き刺さった……かのように思われたがそれは彼女が身につけていた白いマント。

さやかはヒットする直前に自身のマントを広げ、それを身代わりにして回避していた。そして、彼女が今いる場所……それは。

「……だつ……！」

髪を伸ばす魔女の遙か頭上！髪で覆われていた為、魔女が見る事のできない死角にさやかはいた。足元に素早さと勢いを上昇させる為の魔法陣を描き、彼女は空を蹴る。そ

して、標的を見失ってキョロキョロと周りを見渡す影の魔法の脳天目掛け、その剣を突き出した！

【ギシャアアアアツ!】

黒い液体が勢い良く噴き出す。頭を二度に渡って貫かれた魔法の絶叫が響いた。しかし、絶命するまでには至らず、魔法の頭に剣を刺すさやか腹部に鋭い髪の毛が突き刺さる！

「うぐっ！ああああつ!」

魔法の最後っ屁と言うべきか、力を振り絞った魔法の攻撃が超至近距離にいるさやかの足を、肩を、腕を貫いていく。かわりにさやかも魔法の身体の周りに剣を作り出し、影の魔法の身体を串刺しにする。

どちらかが倒れてもおかしくないこの競り合い…先に倒れたのは…!

「ハア…ハア…」

【……………】

ドサツと全身の至る所に剣が刺さった黒い塊が地面に倒れ伏せる。それを見下すさやかは荒く息を吐き、今にも倒れてしまいそうなくらい傷ついていたもののか生きていた。

「あたしの…勝ちだ…！」

血混じりの咳をしつつ、彼女は自らに回復の魔法をかける。勝因はやはりこの回復魔法の存在が大きかった。

何度も自分に重ねがけしながら戦っていた為、腹をえぐられるような攻撃を受けても彼女は剣を振るう事ができたのである。

“ ……魔女を倒せたようだね。さやか”

傷を塞ぐため尻餅について癒やしの魔法をかけていたさやかの後ろから入った者の色を失わせるこの魔女結界の中でも変わらない姿を保つキュウベえが現れる。

「キュウベえ!？」

“ 皆に連絡したからすぐに来るはずだ。僕はママから君のサポートをするように言われてここにきたけど一人で倒すなんて…お手柄だね、さやか”

「へへん、どんなもんよ！これがこの魔法少女さやかちゃんの…」

“ でも、残念だ”

“ 君はここで終わりだよ”

え…?と呆気にとられた顔でキュウベえを見るさやか。キュウベえは前足を伸ばして何かを指差しているようだ。それは、さやかのへそのあたり…そう、魔法少女である証【ソウルジェム】

しかし、その色は元のサファイアのような美しい青の輝きではなく…この魔女結界の影よりもドス黒く禍々しい光を放っていた。

「真つ黒…?ど、どうなってるのー!これ…」

「君が持つ負の感情、魔女との戦いで生じた大幅な魔力消費…それらの穢れは少しずつだけど君の魂を蝕んでいったんだ」

「魂?…どういう…!?!」

「言葉通りの意味さ。君たち魔法少女の身体は単なる外付けのハードウェアでしかない。君の命とも言えるのはそのソウルジェムなんだ」

「えっ…?あ…?」

魔法少女の身体は外付けのハードウェア、命はソウルジェム…という事はすなわち…!その事実が背筋が凍りつく。そんな事は知らされていなかった。おそらくママも杏

子もほむらも知らないのだろう。

思わずさやかは立ち上がり、いつもと変わらず無表情に見つめてくるキュウベえに怒りの形相で詰め寄った。

「それ…じゃあ、あたしは…！あたしはゾンビにされたようなものじゃない!? 何てことしてくれたの!?! 元…元に戻してよ!!」

“それは不可能だ。君はもう魔法少女、二度と人間に戻る事なんてできないね”
「そんな…嘘でしょ…!? 嘘だって言つてよ…ねえ!」

その場に膝をつき、地面を何度も殴りつけるさやか。彼女の手は血で染まり、彼女の目から涙がこぼれる。へそのソウルジェムは徐々に微かに残っていた青の輝きが消えていく…

しかし、それだけならまだ良かったと言えるかもしれない…この話には続きがあった。ソウルジェムの事を知らされ、絶望しているさやかにさらに追い討ちがかけられる。

“さやか、よく聞くんた。君は手遅れだと僕は言った…その意味を教えてあげる”

「いや……もう何も聞きたくない！やめてよ……！」

ポポポポッと背後から騒がしい足音が聞こえてくる。この足音はカービィのもの……こちらに近づいてきているのである。そこにまどかがいれば幸運だと思い、目の前の少女にキュウベえはあまりにも残酷な真実を告げる。

“ そのソウルジエムが完全に濁りきった時、君たち魔法少女は魔女になる。魔女の正体……それはこうしてソウルジエムが濁りきった魔法少女なんだよ”

「あつ……」

変わっていく。さやかあのソウルジエムが魔女が持つグリーンフシードへ……それはすなわち穢れが溜まり、魔法少女が魔女へ変異する事を現す。

自分が戦っていたモノは自分と同じ人間だった者……そして、自分もいずれそうなってしまう事を悟ったさやかは身体の底が急速に冷えていくのを感じていた。

「……………」

やがて、彼女は…いや、さやかであった肉体はドサリと崩れ落ちてしまう。その目に輝きはなく、もう二度と動く事はない。美樹さやかは死んでしまったのだ…

彼女の亡骸からグリーンフィードが禍々しい光を放ちながら宙へ浮き、そこで何かを形作っていく。出来上がったそれは甲冑を被った巨大な人魚と言うべきだろうか…魔女はさやかの剣を持ち、この結界内を揺るがす大きな雄叫びを上げた。

“ 魔女の完成だ。Ok^オta^クvi^タa^ウ Von^フ Se^ゼck^ケen^ンdo^ドrf^ルf^フ…それが今の君の名。まどかの契約の為、せいぜいその力を貸してもらおうね!”

この結界が上書きされていく…影の世界は塗り替えられ、その魔女を中心にこの場が書き換えられていた。

そこはオーケストラやコンクールなどで使われる劇場のよう…瞬く間に巨大なホールが出来上がる。それと同時に何者かがこの場に足を踏み入れた!

“ …遅かったね。今し方終わったよ”

(っ?、)へさやか…!

現れたのは悲しそうな目で倒れているさやかを見るカービィだ。彼は魔女やキユウベえに目もくれず、倒れ伏したさやかへと駆け寄ろうとする。しかし、それはさやかが持つていたサーベルを手にする巨大な半魚人により遮られる。

その半魚人こそ…美樹さやかが魔女へとなり果てた姿「人魚の魔女」だ。

25. 悲しき結末

“さて、僕は失礼させてもらうよ。まだやるべき事が残って…”

びよんびよんと俊敏な動きを見せ、人魚の魔女から距離をとったキュウベえはそう言つてこの場から立ち去ろうとする。

しかし、この結界の主はそれを許さなかった…彼が動いたその瞬間、カービィと睨み合つていた人魚の魔女が手にしたサーベルを彼へと振り下ろしたのだ！

当然、キュウベえがそれを避けられるはずもなく、地面を揺らす程の一撃を叩き込まれた彼は出来上がったクレーターの途中でバラバラとなつていた。

グチャグチャになった真つ白な肉片を見るにおそらくキュウベえは生きていないだろう…

(つ？〜c) へ…！

最後を迎えたキュウベえに複雑な気持ちを抱きつつも魔女の注意がそちらに向いて

いるその隙に動かないさやかを救おうと駆けるカービィ。

近くまでいき、さやかを吸い込むと魔女さやかから急いで距離をとる。カービィが接近した事に気づいた魔女は逃がすものかと身体の周りから馬車の車輪のような物を出して走るカービィへ発射！

『カービィ！そのままジャンプして！』

どこからともなく聞こえてきた声に従い、カービィがジャンプすると数発の光の銃弾がその大車輪をかき消した。光弾が放たれた方を見るとそこには…

c (???) つへマミ！

マスケット銃を構えたバマミがそこにいた。彼女はカービィにウィンクするとリポんで彼を優しく巻き上げ、自分が立つ場所まで引き寄せる。

「カービィ！美樹さんは無事!?!」

(つ ? 0 ,) へびゆ！

吸い込んださやかを吐き出し、マミへと見せる。カービィはさやかを彼女に任せ、向かってくる魔女を迎え撃つべく駆け出した！

「……美樹さん……」

やはり、美樹さやかは死んでいた。魔法といえど怪我は治す事はできても死んでしまった人を生き返らせる事はできない……

彼女の亡骸を戦闘の被害を受けない場所へ置き、マミはふつつつと湧き上がる怒りを魔女へと向ける。

(……くっ！許さない！あの魔女は美樹さんの仇！)

「絶対に許さないわよ！」

……

(?~?)へさやか!さやか!

大剣で横になぎ払われるもののそれをジャンプでかわし、そのまま鉄仮面を被った魔女の顔を蹴りつける。しかし、仮面に守られている為か蹴りではびくともせずそのまま頭突きで地面に落とされてしまった。

しかし、カービィは諦めず必死に呼びかけを続けていた。もしかしたら…とそんな希望を抱き続け、懸命にさやかの名前を呼び続ける。

そんな中、自分の背後からとてつもないエネルギーの高まりを感じたカービィは振り返る。すると、そこには以前に見た「テイロ・ファイナーレ」を大きく上回る巨大な大砲を構え、涙を流しながら魔女を睨むマミがそこにいた。

(っ?o?)へま、マミ!?

「ボンバル…ダメントオツ!!」

止めようとしたが間に合わなかった。マミの大砲から光のレーザーが放たれ、人魚の魔女を吹き飛ばす。消滅までは至らなかったようだが、顔を覆っていた仮面はひび割れており片腕を抑えて瀕死に近い状態であった。

「美樹さんの仇！消え……！」

c (???) (ダメ！)

マスケット銃を手にし、怒りの形相で魔女へと詰め寄るマミの前にでるカービィ。あの魔女はさやかなのだ！まだ……まだ助ける手だてがあるかもしれない。それがわかるまでカービィは見捨てるつもりはなかった。

「……どいて、あれは魔女。美樹さんの仇なの！」

(???) (さやか！)

マミは魔女化の事を知らない。なのでカービィは伝えようとするがマミは何を言っているのかわからない様子だ。

「どいて、カービィ…どきなさい！」

c (???) フルフル

と、カービィとマミが言い合っていると…不意に背後で大きな爆発が起きる。何事かと思い、振り返るとそこには盾を構えた暁美ほむらと彼女に掴まっている佐倉杏子がい

た。
そして、人魚の魔女は…燃え盛る炎の中で身体を焼かれて苦しんでいる。必死に手を伸ばし炎から逃れようとする人魚の魔女。しかし、トドメと言わんばかりに杏子に投げつけられた槍により、魔女は動かなくなり…やがて、消滅した。

「おい、楽勝だったな…??どうした、ほむら?」

「美樹…さん?美樹さん…なの?」

………時は数分前に少し遡る。

ほむらと杏子は時が止まった世界で動かない使い魔の横をすり抜け、影の魔女結界を上書きし出来上がった人魚の魔女結界の中を進んでいた。

なお二人は現在仲良く手を繋いでいるのだが、それは別に特別な関係というわけではなく、時を止めている間はほむらに触れていないと杏子も止まってしまう為である。

「……奥に魔女だけじゃねえ……なんか別の反応があるな」

「これは……巴さん？それと……この反応は誰だろ？」

「さあな、さやかかって奴じゃねえのか？」

魔女の反応、それと近くに二つの反応がある。これはマミとカービイのものなのだが二人に知る由もない。豪華なホールの廊下を走り、彼女たちはカービイたちのいる大ホールにやってきた。

すると、入り口近くに何かがある事に気がつく。それはマミが避難させていたさやか

の亡骸である。

「ん？こいつ…なんでこんな所にいるんだ」

「ケガをして下がってるんでしょうか？まあそれよりも…！」

「あの魔女だな。なんでかカービイもあそこにいるが後回しでいいだろ」

なにやら言い争いをしている様子のカービイとマミの横を通り、すでに満身創痍でロボロの人魚の魔女の前へといく二人。傷口を見るにマミの砲撃にやられたのである事がわかる。

「こいつは半分魚に半分人間みたいだなナリしてんなあ…まるでガキの頃に聞かされた人魚だ」

「人魚…の魔女…オクタヴィア…」

「ん？なんだ、顔見知りの魔女か？」

「いいえ？…あれ、なんで私…名前を知ってるの？それに…」

ほむらはこの魔女をどこかで見た事があった。もちろん見た事も聞いた事もない。

となれば答えは一つ…

(私のなくなった記憶が関係してる…前の私はこの魔女を知っていたの?)

「おい…ほむら?」

「はっ…ごめんなさい!爆弾で倒します。うち漏らした時はお願いしますねっ」

何か引つかかる事はあるもののほむらは盾から爆弾を取り出し、魔女の足元にセツト。時間が止まっている為、爆発を告げるカウントも止まっている。

爆発の範囲外まで逃れ、時間停止を解いたほむら。世界は色を取り戻し、爆弾のカウントダウンが始まる。

言い合いをしているマミとカービイはほむら達には気づいていないようで魔女も足元に置かれた爆弾には気づかず、突然現れた二人を威嚇していた。

「3, 2, 1…終わりです」

0…魔女が大爆発を起こす。それと同時に断片的にだが、ほむらの頭に自分が知らない記憶が流れ込んできた。

それは今と同じようにこの魔女を倒すほむらの姿：あの魔女をさやかと呼び、顔を歪めて悔しがる杏子。どういうわけか魔法少女となったまどかも涙を流してうなだれていた。そして：

『ソウルジエムが魔女を産むなら：みんな死ぬしかないじゃない！』

自暴自棄となったマミが近くにいた杏子のソウルジエムを砕いて命を奪い、ほむらに銃を向けていた。思い出せた記憶はそこまでだ。

焼かれる魔女を見ながらほむらは考える。すでにまどかが契約していたり、カービイがいなかったりする理由はわからないもののこの際それはどっちでもいい。

ソウルジエム：魔女を産む：それはつまり、マミの言葉を信じるならば魔法少女は魔女になるといふ事になるのではないだろうか。

〔魔法少女〕〔魔女〕〔なる〕あの時、カービイの言っている事は本当：だった？という事は：

記憶の中の杏子は人魚の魔女をさやかと呼んでいた。となると：今、ほむらが爆弾で

消し去った魔女は…魔女の正体は…!

「美樹…さん？美樹さん…なの？」

26. 寂しがり屋の少女は月下に眠る

(そうだ…思い出してきた…まどかを守る為に、弱い自分を捨てる為にキュウベえと契約した)

床に落ちた美樹^{メグ}さやか^{リイ}やか^フであつたもの^ドを拾う。これはさやかの形見と呼ぶべきものだ。友を失った事にその身体を震わせ、涙を流しそうになるほむら。しかし…

(伝えなきや…皆、キュウベえに騙されてる！)

伝えなくてはならない。魔法少女について、ソウルジェムについて…そして、魔女について。ほむら達がキュウベえに何をされたかを！

ほむらの横にいた杏子は突然、情緒不安定になったほむらを訝しむように見ていたがそんな彼女の手を引いてさやかを抱いて泣き崩れているマミとカービイの所へいく。

「お、おい！なんだよっ…ほむら!?今はそっとしておいてやろうぜ…」

「ごめんなさい！美樹さん！間に合わなくて…私はまた…！あああああ…」

ママは自分をもっと速く駆けつけていれば…さやかにちゃんと戦い方をレクチャーしていれば…と後悔していた。カービィはそんなママの背中をさすって慰めている。

「巴さん…」

「……………」

「聞いてください！巴さん…美樹さん…についてです！」

さやかなの遺体を抱き締めて泣き崩れるママの身体がピクリと反応した。そして、おそるおそるほむらの方に顔を向ける。

彼女の整った顔は涙やら鼻水でぐちゃぐちゃになっていた。そんなバママは見た事はないはず、見た事はないはずなのに頭の中にはそんな彼女の記憶がある。

その事に疑問を抱きながらもほむらは皆に魔法少女の残酷な運命を告げていく。

「カービィ、ごめんなさい。私はあなたを疑ってた…あなたの言う事は本当だったんだね…」

(つく?) へぼよ?

「私は少しでも記憶が戻りました。 どうしてかはわからないけどあの魔女を見て思い出したんです」

こうしてほむらは話した。ソウルジェムは魔法少女に変身する為の道具だが、それは自分の魂を形にしたモノだという事。

ソウルジェムが完全に濁りきった時、それは死ではなく魔女へと姿を変え自我がなくなってしまう事。

キユウベえに騙されていた事をみんなに告げると、元から知っていたカービィは特に変わらないでいたが…

「なっ!?! なんだとお…! 嘘だろ? なあ…!」

「いいえ、おそらく本当の事です。そして、美樹さんもその犠牲になった…」

「…どういう…事…? 美樹さんはあの魔女に殺された! 間違いないわ!」

「いいえ、美樹さんの身体には外傷がないはずです。そして、彼女のソウルジェムもない。そのソウルジェムはこのグリーンフィードに変貌してしまったから…」

みんなに人魚の魔女のグリーンフシードを見せるほむら。それには微かにさやかのも
ノと思われる魔力の反応を感じ取れる。それは確かな証拠であった。

「まじかよ…あの白狸…やってくれたねえ！」

「…あ、ああ…ああああつ!!」

怒りに震える杏子と違ってマミは頭を抑えてうずくまってしまう。変わり果ててしま
ったとはいえ、さやかに銃を向けて本気で攻撃をしてしまった…戦い傷つき、絶望し
て魔女へと変わってしまった彼女を知らなかったとはいえ…

「わ、わた…私はなんて事を…美樹さん、美樹さんがあつ!!」

「巴さん!! (しまった!)」

「おい!どこにいくんだ!? マミ!」

c (???) つ ミミ

涙を流しながらどこかへ走り去ってしまったマミ。頭に被ったベレー帽についた彼
女のソウルジェムは明るい黄色だったのが、その光の中に闇が差し込み始めていたのを

見たカービィは急いで彼女を追いかける。

「おい！アタシたちも追うぞ！」

「…はい！二手に別れましょう！私は巴さんの家を探します。佐倉さんは彼女が行きそうな場所を！」

「ああ、心当たりはある！」

（巴さんに真実を教えてしまったのは失敗だった…！憎んでいた魔女が美樹さんだったという事に巴さんは耐えきれなかったんだ…私のせいだ）

………

夜の闇に覆われ、誰も寄りつかないような山の中。月明かりはその中でうずくまり、一人涙する巴マミの姿を映し出していた。

「……………」

知りたくなかった。自分が戦っていたモノの正体。そして、友達だと思っていたキユウベえが自分や他の魔法少女に何をしていったのか。

“ やあ…今日は月が綺麗だね。マミ ”

感情のこもっていない声でそんな口説き文句が聞こえてくる。顔を上げたマミの前には兎のように真っ白な毛並みをした赤い瞳を持つ獣がそこにいた。

当然、彼は幽霊でもゾンビでもない。人魚の魔女に殺されたキユウベえとは別個体のキユウベえだ。彼はたとえ死んだとしてもこうして別の個体が送られてくるのだ。

「全部、全部騙してたの？」

“ 騙した？なんの事だい？ ”

ギリツと歯を軋ませ、マミはキユウベえに掴みかかる。しかし、キユウベえは動揺す

る事もなくやれやれと言わんばかりに首を横に振っていた。

「とぼけないですよ！なんで…なんでみんなが魔女になる必要があるの？どうしてこんな事をするのよ！」

「君には最初に説明したじゃないか。いくつか説明を省いた事もあったかもしれないけどね」

「…なんて事を…！あなたのせいで…美樹さんが！美樹さんがっ!!」

キユウベエの目的を知らない彼女からしてみれば願いを餌に何の罪もない少女たちを戦わせ、最後には化け物へ変える。これは紛れもなく悪魔の所業と言える。彼がそんな事をする理由がわからなかった。

「彼女の犠牲に意味はあった。まどかに契約させる為に…それにしてもさすがベテラン魔法少女、バママミだ。なりたてとはいえ魔女さやかを一撃で瀕死にするなんてね」

「や、やめっ！…違う。違うの…そんなつもりじゃ…！」

「違わないよ？君はその手で美樹さやかに攻撃してたじゃないか。今みたいに怒りに身を任せてね」

ハツとなってキュウベえを掴むその手を離す。憎しみを向けて人魚の魔女を攻撃した事を思い出したマミは地面に膝をついて謝罪の言葉を口にしていた。

「あああああつ…ごめんなさい…ごめんな、さい！」

“ どうしたんだい？怒ったり、悲しんだり…君たちの感情というものは不思議だね。わけがわからないよ”

「…どうして…？どうしてこんなひどい事するの？私たち友達だったんじゃないの？」
“ 友達？僕と君がかい？それは面白い冗談だ。感情のない僕にも感情が生まれそうな程にね…”

やめて…やめて！聞きたくない。マミは耳を塞いでキュウベえの声を遮ろうとするが無駄だった。キュウベえの声が頭に直接響いてくる…

“ 僕は君を友達だと思った事はないよ。一度たりともね”

.....

お菓子作りとティータイムを趣味としているマミの匂いは特徴的だった為、それを頼りに彼女の行方を追っていたカービィ。

匂いをたどり、山の中へやってきたカービィはそこで巴マミの姿を見つけた。少し遅れて杏子もこの場所へやってくる。

(っ?っ、)へマミ…

「……………クソが！」

「アラアラ、新しいお客様? ウフフ…嬉しい、嬉しいわ! 新たな私の誕生日にようこそ!」

「さあさあ…ももいろさんとあかいろさんをお茶会へとご招待♪楽しんでいてね?」

27. マミさん救出大作戦!

(つ ? ~ c) < キョーコ … アンコ ! アンズ !

「 … う つ … く つ … 」

頭を抑えてよろよろと立ち上がった杏子。彼女は何が起こったかわかっていない様子だったが、周囲を見渡してすぐに理解したようだった。

「 ここは … 魔女の結界か … ! 」

(つ ? ~ ?) < マミ …

今、カービィと杏子がいる場所は薄暗い山の中ではなく所々に煌びやかな装飾が施されたどこかの屋敷の部屋の中だ。

どうやら、バマミが魔女に変貌した瞬間に立ち会ってしまったようで魔女となったマミが二人をここに呼び寄せたのだと杏子が説明する。

「…魔女になっちゃったんだなあ。あいつも…」
(つ〇?)へキョーコ?

深く息を吐き、杏子は悲しそうに目を伏せていた。それはただの魔法少女どうしの関係だけではなく、なにか特別な関係であった事がわかる。

しばらく沈黙が両者の間に流れたが、やがて杏子がカービィに目を向け…

「…なあ、こんな事を聞くのもなんだが…あなたは魔女になったママの事をどう思う?」
(つ?~?)へ…ママはママ!

カービィのその言葉に面食らっていた杏子だが、満足した様子で笑みを浮かべる。そして、彼女はポケットに手を突っ込んだ。カービィはお菓子をくれるのかな?なんて思っていたが…

「…いいや、やっぱやめだ。菓子で釣るなんてアタシらしくねえ…頼む、アタシに手を貸してくれ」

c
 (???)
 へぼよ!

ここにカービィと杏子のマミ救出同盟が立ち上がった！彼らは部屋から飛び出し、廊下に出る。赤い絨毯が敷かれ、壁には見るからに高そうな絵が立てかけられていた。

「さて……どこにいる。マミ！」

(?o?) つへぼよ！

カービィが指差す先、そこにはまるで杏子のような赤いポニーテールをしたメイド服の少女が立っていた。彼女は無表情でカービィと杏子を見据えるとついでこいと言わんばかりに手招きしている。

「…罠の可能性が高いな」

(?~?) へ…マミ！

「わかってる……！たとえば罠だろうが何だろうが突き進むまでだ！」

こうして二人はメイドの少女についていく。彼女に連れて行かれたのはこの館のホールへと繋がる扉。どうやらここに入れという事らしい。

ゴクリと息をのむ杏子。カービィはどうかなのかと思いい下を見ると彼は扉に手をかけようと必死にジャンプしていた。警戒など全くしていない彼に思わず杏子は吹き出してしまう。

「…ははっ、緊張感のないヤツだな。どけ、カービィ!」

いつでも動けるように警戒しながら杏子は扉を蹴飛ばし、中へ入る。彼女たちを待ち受けていたのは…

「この気配…! 探す手間が省けた…省け…あれ?」

「(???) へマミ?」

「あかいろさんにももいろさん! あなた達がくるのをずっと待つてたの!」

豪華な飾り付けがされたホール、その中央に置かれたテーブルの方からマミの声が聞こえる。二人はマミの姿を探すもののその姿はない。

【()よー()()()()!】

いた。よくテーブルの上を見てみると確かにマミはいた。いたのだが…小さい。彼女の姿は物凄く小さかった。

その大きさはカービィはおろか、お茶会でも開くつもりでいたのかテーブルの上に用意されていたティーセットのティーカップ程。

【ごきげんよう…私はC^{キャ}a^ンd^デe^ロo^ロ。あなた達の名前を教えてくださいな!】

テーブルの上にちよこんと立っていた彼女は身につけた緑のワンピースの裾をつまんで上品に挨拶をする。C^{キャ}a^ンd^デe^ロo^ロ、それが魔女となってしまったマミの名前らしい。

「忘れちゃったのか…アタシは佐倉杏子。あんたの…巴マミの弟子だ!」

【?o?c)へカービィ…マミ!マミ!】

【…マミって誰かしら?そんな事より…さあ、佐倉さん!】

“君たちもここに連れてこられたのかい？やれやれ…マミには困ったものだね”

(?…?)へキュウベえ！

「てめえには聞きたい事がいくらでもある…：が、今はそれどころじゃねえ…！くそ、動かねえ…」

カービイの隣の席には猫のように毛繕いをするキュウベえの姿がそこにあつた。彼がなせここに居るのかは気になつたが今はそれどころではない！

「ウフフ♪今日は私の為に集まってくれてありがとう！」

全員が席に着いた事を確認し、彼女は上機嫌で両手をいっぱい広げる。いったい彼女は何をするつもりなのか…動きを封じられ、見る聞く話す事しかできない杏子は同じ状態となつているカービイを見た。

流石にカービイも警戒しているのか真剣な顔つきとなつてマミを見ていたが…チラリと今、別の所を見た。カービイの視線の先にあつた物、それは…

(お菓子かよ!?)

色とりどりのマカロンにイチゴ、チョコレート、チーズといった各種ケーキ。さらにはマフィンにクッキーなど紅茶によく合うであろうお菓子がテーブルの上に置かれている。カービイの目はそつちに向いてしまっていたのだ。

(…確かにうまそうだ…(ぎくり))

“君たちの為に言っておくけど、ここで出された物は絶対に口にしては駄目だ。ここのお菓子を食べた者はこの結界の住人になってしまう”

「なっ?! 『そうなる…? どうなっちゃうんだ?』」

“魔女結界の一部となってしまおうから…おそらくは永遠にこの結界から出る事は叶わなくなるだろうね”

魔女となったマミが皆がきてくれて嬉しいだの最高の誕生日パーティーになりそうなの言っている中で彼女に聞こえないようにテレパシーをする杏子とキュウベえ。

(くっ…こいつの言う事は信用ならねえが…こんな時にしようもない嘘をつくほどじゃねえな。とかいっつ、嘘は今までついていなかった。ぼかしたり、隠したりはする

がな)

『おい！聞いたか？カービィ…絶対に…食べた…ら…』

さつきからやけに静かなカービィに目を向けると、彼はよだれをダラダラと垂らし、目の前のお菓子を凝視していた。

動きが束縛されている為、カービィがお菓子を食べる事はできないが…束縛が解除された時、おそらくカービィは誘惑に負けて食べてしまうだろう。そうなってしまえば無事でいられる保証はない。

(くそ…どうすりやいい…！マミは攻撃してくる素振りはないが…)

【…挨拶はこれくらいにして、そろそろお茶会を始めましょうか！皆辛かったでしょう？今、拘束を解く…】

「っ!?ちよつ…ちよつと待ってくれ！マミ！」

【…佐倉さん?どうかしたのかしら?】

(ええい！もうどうにでもなっちまえ！)

「もう一人…あんたの誕生日パーティーにきてくれそうな奴がいるんだ。こっちに向かつてるみたいだからよ…そいつがくるまで待たねえか?」

28. マミさん救出大作戦2!

「もう一人…あんたの誕生日パーティーにきてくれそうなのがあるんだ。こっちに向かってるみたいだからよ…そいつがくるまで待たねえか？」

これは杏子の賭けであった。このままお茶会が開かれてしまえばカービーが危ない…というより、お茶会とマミは言っているものの何が起るかもわからない。

なので、出来る限りこの現状を維持するのが最善策であると杏子は判断していた。マミの顔は杏子の位置からは見えないが果たして…？

「…あらあら、そうなの!?!そんな大事な事早く言ってくれないと椅子を用意しておかないといけないわね！」

ティーカップ程の大きさの彼女が魔法で椅子を作り出す姿を見て、ホッと一息つく杏子。これでまだしばらくはこの状況が続くはずだ。

「す、すまねえ…アンタに喜んで欲しくてな。サプライズのつもりだったんだ」
(???) (へじゆるり) :

マミによる拘束が解かれてしまえば動けるようになったカービィはおそらく目の前のお菓子を食べ尽くしてしまう。

キュウベエの言葉を信用するならそうなった場合、カービィは二度とこの結界から出られなくなってしまう。そうでなくても魔女の結界の中のものだ。何かしらの毒が盛られている可能性も否定できない。

マミを元に戻し、皆でこの結界を出る。その為にカービィがお菓子を食べてこの結界の中から出られない状態になってしまったら元も子もない。

“ なかなか口が回るじゃないか。感心するよ、杏子 ”

『はっ、てめえにそんな事を言われるなんて思ってたぜ』

(???) 『マミのお菓子…』

『バカ、それはアイツを連れ戻してからだ！これで時間は稼げる…が、長くは持たねえ！このままほむらを待つか…それとも…！』

言いよんだ彼女には何か思う所があったようだ。何かいい方法があるのだろうか？ そう思ったのはキユウベえも同じだったようだ。

“ ……？ 何かこの状況を脱する方法があるのかい？”

『ああ、マミのヤローは他の魔女と違う所が二つある。一つは魔女は人間を見ると攻撃を仕掛けてくるようなヤツばかりだ。だが、マミは攻撃を仕掛けてくるどころか友好的に接してくる』

“ なるほど、魔女は基本、人間だった頃の望みのまま動く。マミは繋がりを欲していたようだったから、この結界は入った者を攻撃するのではなく繋ぎ止めようとしているんだ”

（ ……？ ） 『マミは寂しがり？ 』

そんな情報を持っていたのなら最初に話せと言いたくなる杏子だったが、今はこらえて続きを話し始める。円形のテーブルの中央にいたマミが上機嫌でカービィの前にやってきてお喋りを始めたのを見る杏子。

『そして、もう一つ…こうして会話ができる事だ。会話ができるという事はアタシたち

の言葉がアイツに届く可能性はある。もしかしたら、アイツを元の姿に戻してやれるかもしれないねえ』

“…まあ可能性は否定しないよ。僕の見たり限りでは元の姿に戻るなんて事はないけど。ママの弟子だった君なら起こりうるかもしれない”

『なら…やってみる価値はありそうだ！カービィ、ここはアタシに任せろ！』

(???) 『ぼよ！』

ママはカービィとのお喋りも終わり、ルンルン♪とどびつきりの笑顔で楽しそうにテーブルの上をスキップしていた。そんな彼女に杏子は真剣な面持ちで声をかける。

「なあママ…待ってる間、少し話しねえか？大事な話だ」

【いいけれど…もう、また佐倉さん！私の事をママって…私はCandeloro!】

小さくなくても変わらない豊かな胸を張ってプンスカと怒るCandeloro。しかし、その姿はまさしくバママそのものだ。杏子は首を横に振って彼女を見つめた。

「…いいや、アンタはバママ。アタシの師匠で仲間のバママなんだ」

「っ!? 師匠? 仲間? 何の事かしら…」

「忘れちゃったのなら思い出させてやる。見滝原の魔法少女、バママミの事を! 鹿目まどか、暁美ほむら、美樹さやかに先輩なんて言われて慕われてるアンタの事を!」

【鹿目さん…暁美さん…美樹さん…?】

彼女たちの名前を聞かされて戸惑うママミに手応えありと見た杏子は記憶が戻る事を願って一気にたたみかけていく。

カービイもお菓子半分こちらの様子をうかがっていた。椅子から動けはしなが会話ができるという事は吸い込む事ができる…いざという時はママミを吸い込んで行動を封じる事も可能なのだ。

「カービイの事だつてそうだ。アンタ、得意のお菓子作りでアイツにたらふく食わせてやってたじゃないか! うまそうにそれを食つてたこいつの顔も思い出せないのかよ!」

【カービイ…? カービイは今日会ったばかり…あなたもよ! 知らない! 知らないわ!】

「アタシは…! アンタの事を忘れた事なんて一度もねえぞ。アンタだつて本当は覚えてるはずだ! …アンタが魔女に変わる前にいた場所…それはアタシたちの出会いの場所!」

そう。ママが皆の前から姿を消して向かった場所。それは初めてママと杏子が出会う事となった思い出の場所だった。

1年ほど前、風見野の新人魔法少女だった佐倉杏子は逃げた魔女を追って見滝原にきていた。そして、その魔女と戦い、苦戦していた所を彼女に助けられた…というのが彼女との始まりだ。

それ以降、初めて出会ったあの山はママにとっても…また杏子にとっても忘れられない大切な場所であった。

「ママは寂しい時や悲しい時、いつもあそこに行っていたよな？ほむらに魔法少女の運命を聞かされて…優しいママの事だ。さやかや他の魔女になっちゃった魔法少女たちの事、それといずれ自分も魔女になって町や人間をめちゃくちゃにしてしまう事に耐えられなくなつて絶望しちまったんだろ？」

【やめ…やめて！知らないわ…そんなの！】

“ 杏子…！それ以上は…”

続けて杏子が話そうとしたその時、キュウベえが何かテレパシーで話しかけてきていたがここまできたら止まらない。彼女は必死に魔女となつてしまった巴ママを呼びか

ける！

「思い出してくれ！バママミ！…そして、また帰ろう。寂しいんならまどかだつてほむらだつてカービィだつて…そして、あたしだつている」

【……………】

「アンタはもう一人じゃないんだ。だから…！」

【…嘘つき…嘘つき！嘘つき…嘘つき！嘘つき！！】

突然のママの叫びと共に彼女の纏うオーラが禍々しくなり始める。この空間の空気もビリッと張り詰めたものとなってしまふ。

今のママから感じられる力…それは今までの魔女とは比べものにならないほど強大なものでそれは以前、カービィとほむらが倒したお菓子の魔女をも越えていた。

「な…何を言ってるんだ!?嘘つきって…?」

「知ってるんだからあ…ホントは私の事なんてなんとも思っていないくらい。カービィは私を作るお菓子が目当て…キュウベえは自分の迷惑の為…佐倉さんはそうね、私が受け持つ縄張りとかグリーンフィールドとかかしら?」

「っ!キュウベえはともかくアタシとカービィはお前を…!」

「口では何とでも言えるわね。みんな私から離れてく…1年前の佐倉さんがそうだったように!」

「…っ!それは…」

「うるさいっ!!」

ママが吼えるとともに小さな身体から出たとは思えない程の衝撃波がカービィと杏

子とキュウベえを襲い、彼らは壁へと叩きつけられてしまっ!

彼女が用意したテールは全て吹き飛んでしまい、お菓子やティーセットも床に落ちてしまっていた。ぐちゃぐちゃとなってしまったその残骸の上に浮かぶCandle oroは黒いオーラを纏い、怒りにも悲しみにも取れる表情で虚空を見つめている。

“ ……どうやら作戦は失敗みたいだね。君の言葉は彼女には届かないようだ。これじゃ状況が悪化したにすぎないよ”

「……………」

「(???) 『キョーコ! ……キョーコ?』」

なにやらショックを受けている杏子に声をかけるが返事は返ってこない。そうしてカービィが彼女の元に駆け寄ろうとした時に気づく。動かなかった身体が動く事に。

何か条件があるのだろうか…だが、考えた所で答えは出てこない。カービィは考える事をやめて反対側の壁へ吹き飛ばされた杏子を見る。どうやら彼女の身体も動くように立ち上がって中央で浮かぶマミを悲しそうに見ていた。

「もういや! 信じてたのにもう裏切られるのはもういやなの!!」

「…っ?!アタシのせいなのか…? マミ、アンタがそこまでなっちゃったのは、アタシがアンタから離れてしまったから…」

「みんなが私から離れていくなら…離れていかないようにしてあげる。結界から出られなくなつてしまえばみんなここにいてくれる! フフツ…アハハハハッ!!」

マミの悲しい笑い声だけがこの煌びやかなホールの響く。杏子は様子がおかしい。キュウベえは何を考えているのかわからない。今動けるのは自分しかない! そう考えたカービィは彼女を…巴マミを救う為に動き出した!

29. 佐倉杏子とバマミ

「アハハハハッ!!あなた達は私の大事なお友達…だから、私と遊んでよ。いつまでも、永遠に!」

ポツと20cm程しかないカービィよりももつともつと小さな身体を持つ彼女の手が光ったような気がした。すると、ゴゴゴゴツと音を立てながら床が大きく揺れ、この部屋の窓や扉が全て閉まる。どうやらカービィ達が逃げる事ができないようにバマミが魔法で鍵をかけたようだった。

“これは…僕たちを逃がさないつもりのようなだね”

「くっ…マミ…!」

体重を槍にかけ、もたれ掛かるようにして立っている杏子。彼女はバラバラになったテーブルの上に浮かび、悲しい笑い声を上げているバミの元へ向かおうとするが足がもつれて倒れ込んでしまう。

「はあ……はあ……あいつを止めるんだろ……動け！動くんだ……！」

立ち上がろうと足に力を込めるが……どうにも身体がいうことを聞かない。单身マミへと近づき、呼びかけを続けているカービー、彼に続いて自分も続かなければならないに思うように身体が動かなかつた。

その理由はマミに拘束されているから……というものではなく、彼女の心にあつた。

これは、今から2年前ほど前の出来事だ。

新しい時代を救うには、新しい信仰が必要だ……そういつた信念を有する聖職者の父が彼女にはいた。彼女はその父親が誇らしかった。大好きであつた。しかし、彼が説くその理念は教会の本部の人間や信者には理解されなかつた。

家は貧しくなり、教会からも異端であると思放され、日に日にやつれていつた父。そんな中でも食料を自分と妹に食べさせてくれた母。杏子は我慢ができなかつた。

『少しだけでもいい…耳を傾けてくれさえすれば父さんの言う事は正しい事であるとかかってもらえるのに…』

とうとう食べる物もなくなり、信者から恵んでもらえたと嘘を吐いてスーパーやコンビニから物を盗むというそんな生活を続けていた時…彼女に転機が訪れる。奇跡を売って歩く白い獣が彼女に目をつけたのだ。

“君の願いを何でも一つだけ叶えてあげる！”

『えっ…？』

“だから僕と契約して…魔法少女になってよ！”

胡散臭い話だと思った。しかし、藁にもすがりたいた状況だった杏子は二つ返事でそれを了承した。彼女がキュウベエとの契約でもたらされた願い…それは、“父の話に人々が耳を傾けてくれるように”するというもの。そう願ったその翌朝からこれまでの地獄から一変。騒がしい声に目が覚め、半信半疑ながらも教会を覗くと…

『いっばいだ…人がいっばいだ!』

願いは叶っていたのだ。父が所有する教会の中はこれまで見た事もない程に人々は溢れかえり、熱心に父が説く話を聞いていた。それは毎日続く事となる。

“さて、君の願いは叶えた。次は…”

『ああ、わかつてる。いっちょ派手に行こうじゃない!』

願いを叶える代償に魔法少女となった杏子は意気込んでいた。いくら父の説法が正しくともそれでこの世にはびこる魔法がいなくなるわけじゃない。ならば、それは魔法少女になった自分の出番だ。自分と父で、表と裏からこの世界を救っていくんだと…杏子は思っていた。彼女と出会ったのもそんな時だ。

『危ない所だったわね…私はバママミ!あなたは?』

『…えっ?あ、ああ…アタシは杏子。佐倉杏子だ』

逃げた魔女を追い、隣町である見滝原までやってきた杏子。魔女を追いつめたまでは

良かったが思いも寄らぬ反撃を受け、絶体絶命のピンチとなっていた。もうすぐそばまで迫っていた死に全てを諦めかけていたその時、彼女が駆けつけ魔女を蜂の巣にしていったのだ。

そんなバミの強さと優しさ……それと彼女が趣味にしていたお菓子作りに惹かれ、杏子は彼女の弟子として行動する事に決める。そんな生活が半年程続いたある日、色々ありながらも幸せだったと胸を誇って言える彼女の人生を大きく狂わせる出来事が起こってしまった。

『ハア……ハア……くそっ！間に合ってくれよ！』

バミとの修行も終わり、家である教会へと帰っていた杏子。そんな中、突如魔女の気配を感知する。それは杏子が向かう先、すなわち教会にいますという事を示していた。彼女はがむしやらになって駆け出し、魔女の結界に飲み込まれてしまった教会の前へと辿り着く。

『父さん！母さん！モモ!!』

杏子の祈りも通じてか、魔女が震える家族に襲いかかろうとする瞬間に彼女もやってくる。固有の魔法【幻覚】を駆使して、なんとか家族を救い出して魔女を討伐する事に成功。

怯える妹のモモをなだめて、両親に自分は魔法少女で願いを叶える代償としてさつきのような魔女と戦っていると隠していた事実を公表した。杏子は最初、褒めてもらえると思っただ。

自分がやっているのは人々を襲う魔女を倒すという世界を守る仕事だ。だから、父さんもさすがは我が娘だと、よくやったと、言ってくれる。そう思っていた。しかし、現実には残酷だった。

『願い…お前は私の願いを聞くようにと人々を仕向けたのか…？私の話は信仰によるものではなく…魔法の力で集まってきたというのか!』

『えっ…と、父さん？痛い…痛いよ!』

この時はなぜ自分が腕を締め付けられ、怒鳴られているのかがわからなかった。しかし、今思い返せば父の気持ちはよくわかる。

父は異端と称されていた自分の話が人々に聞き入れられたと思っていた。しかし、そ

それは違っていて実際は魔法の力で強制的に自分の元へ向かわされ、強制的に話を聞かされたものだった。裏切られた父の心は計り知れるものではない。

『お前は娘などではない！人の心を惑わす魔女だ…消えろ！二度とその面を見せるんじゃない！』

『あつ…えつ？…いい、嫌だつ！嫌だよ!!父さん!?!』

それからほどなくして父は人々に教えを説く事をやめた。魔法の力で何を言おうが受け入れる人々に教えを説くのは無駄だと悟ったからだ。それでも信者たちは父の話の間ごとと教会に押し掛けてきた。

そのストレスもあつてか父は酒に入り浸るようになった。夢と現実の区別がつかなくなる程に酒に溺れ、聖職者であつた父は狂い、そして…

『…………アタシの祈りが、家族を壊しちまった。はっ…ははははっ!あはははははっ!!』

自分のみを残して家族は皆錯乱した父によって殺されてしまった。父も最後には自害したようで教会にはこの世からいなくなった家族が安らかに眠っていた。冷たく

なった妹の手を握り、彼女は心に誓う。

他人の都合を知りもせず、勝手な願い事をしたせいで結局誰もが不幸になった。だから、もう決して他人の為に魔法を使ったりしない。この力は：全て自分のためだけに使い切ると。

そんな考えを持ったからか杏子の固有の魔法「幻覚」はいつの間にか使う事はできなくなっていた。いや、自分が無意識で封印してしまったのだ。使う度にあのトラウマを思い起こしてしまうから：それが原因で師匠のマミとの関係にも軋轢が生じてしまう。

『佐倉さん：いい加減にして！あなたの家族の事は残念だったけれど：そんな意地をはっているといずれあなは死んでしまうわ！』

『マミさん：あなたに：！事故で偶然家族が死んでしまったお前に、何がわかるってんだ!!』

つい勢いで発してしまったその言葉。涙を流してしまった彼女を見て罪悪感が生まれる。しかし、もう後には引けない。自分を心配してくれたマミを傷つけてしまった。それにこれまでのように魔法が満足に使えない自分がいればマミに迷惑がかかってし

まう。そう思った杏子は…

『…アンタとはもうここまでだ。世話になったな…ママ』

『あつ…ま、待つて！佐倉さん…！待つて！』

『あなたは独りで平気なの？孤独に耐えられるの？』

それに『あんたと敵対するよりずっとマシさ』と答えた杏子は見滝原を後にした。上が杏子の過去だ。ママは…独りで平気ではなかった。孤独に耐えられなかった。杏子が離れてしまつてから彼女にはキュウベえしか心のより所がなかったのだ。

杏子は知らないがそんなキュウベえにまで裏切られてしまつたママが絶望してしまふのは仕方がない事だろう。

「…ママ」

過去を振り返つた事により、もう杏子の心に迷いはなくなつた。ママは裏切つてしまつた自分の言葉などもう聞いてくれないかもしれない…しかし、原因を作つたのが自

分なのだとしたら。

「アタシが止めるしかねえじゃねえか……！」

再び立ち上がる杏子を見てキュウベえは首を振っていた。おそらくこのまま絶望し、魔女になってくれる事を期待していたのだろう。だが、立ち直ってしまったものは仕方がないと意識を切り替え、被害に合わないようシヤンデリアから彼女たちを見下ろしていた。

「っ!?!おっとー！」

(っく?) っへぼよ!

ママを救う為にずっと呼びかけを続けていたカービイがゴムボールのように跳ねながら杏子の元へ飛んできた。それを受け止めてやり、降ろしてやる杏子。

「どうだ?へばったりなんかしてないよな?」

c (???) っココココ

笑顔で頷いてみせるカービィに釣られて杏子も笑みをこぼす。遠くで離れてそれを見ていたMMIは身体の周りに魔法陣を展開させて、魔法少女の時に使っていたマスケツト銃を展開させていく。その数10を越え、50を越え…100を越える！

「よし！いくか、カービィ！」

ん

(???) つへぼよっ！

その無限の魔弾とも言えるマスケツト銃を意に介す事なく突っ込んでいく二人。この悲しき戦いの終わりはもう近い…

30. 絶望を抱いた少女に希望を！

小さな身体の周囲に浮かぶ無限の魔弾とも言えるであろうマスケット銃がマミの号令で一斉に放たれる！それはまるでマシンガンのように凄まじい音を上げながらダツシユで駆け寄っていくカービィと杏子を襲った。

【生きていればお話ができるんですもの…聞き分けのない二人にはちようどいいわ！】
「チツ！目え覚ませよ、マミ！」

目前まで迫る光を槍で弾きながら叫ぶ杏子。それらを全てを防ぎきる事はできず、露わとなつている肩や太ももに被弾してしまつていた。しかし、苦痛で顔を歪めながらも彼女が歩みを止める事はない！

（ つ？ゝc ） へマミ！

カービィは自身の伸び縮みする身体を器用に使い、ペしやりとしやがんだり、タイミ

ングを合わせてジャンプしたりして光弾をうまくかわしていた。今度こそ…今度こそ自分の友達を助けられるように必死に手を伸ばし、マミの名前を呼び続ける。

【うるさい…うるさい…うるさいうるさい!!これならどう!】

攻撃をされながらも自分を呼び続けるカービイ達の声にマミは思わず耳を塞ぐ。さらに二人を拒絶するかのようにな彼女の前で巨大な大砲が作り上げられる。そう、マミの十八番【ティロ・ファイナー】だ。

(?・o?)　へキョーコー!後ろ

「っ!?わかった!」

彼の言葉を受け、歩みを止めた杏子は一向に休まる所を知らない光弾を弾きながらもカービイの後ろに下がる。魔女をも一撃で仕留める程の火力を持つ【ティロ・ファイナー】を彼は受ける気でいるのだろう。

本来ならば避けるのが正解だが、杏子はカービイを信じている。彼がいけるといふらばいけるといふ信頼があった。

そして、マミは声にならない声を上げて二人へ渾身の一撃を放つ！ズズズツと石造りの床を割りながら死の光が近づいてくる！カービイは少し後ろのめりになったかと思うと…お得意の吸い込みに出た！

(つ、o、) シシシ

光は渦となってカービイの口の中へ吸い込まれていく！しかし、魔女となり強化された「ティロ・ファイナー」にカービイも少しずつ…少しずつだが後ろに押されてしまっていた。

さらに、これを勝機と見たマミはマスケット銃の砲撃をやめてこの「ティロ・ファイナー」に全神経を集中させる！それにより光の勢いは増し、珍しくカービイの顔にも焦りの色が浮かぶ。だが…！

(つ、o、) シシシ

ここで負けてしまうわけにはいかない…さやかは救う事ができなかつた。マミまで失ってしまうわけにはいかない！カービイに諦めはない。あるのはマミを救うという

ただ一心…それだけを考え、彼は無我夢中で吸い込み続ける!

【なんで!?なんでよ…!あなた達も裏切るんでしよう!?また私を捨てるんでしょ!!大人しく倒されてよ…!】

【私の、私のそばにいて!カービー、佐倉さん…】

ママの瞳には涙が浮かんでいた。それを見たカービーの吸い込む力はより一層強くなる!時間にしてほんの数秒…技を放つママとそれを吸い込むカービーにはそれが長く感じられていた。

だが、そんな時間もやがて終わりを告げる。

【ウソ…でしょ…】

魔女をも一撃で滅する閃光は全てカービーのブラックホールの中へ消えていった。勝ったのは…星のカービーだ!

防がれると思っていなかったマミは目を見開いて唾然としている。その瞬間、弾けるように動き出した者がいた。その者は光を飲み込み、可愛らしくゲツプするカービィを抱えて駆け出す！

「今だあああつ!!」

身体から魔力を放出させ杏子が赤いオーラを身に纏い床を蹴る。慌てて瞬時にマスケット銃を召還したマミは杏子の足目掛けて引き金を引く…もオーラに守られた彼女の歩みは止まらない。

【こ、こないで…!】

「マミ！お前はアタシの師匠だ！そして、こいつの友達だろうがあ!!」

（っ？o?）へマミ！信じて！

杏子は全力で走る。マミに思いを伝える為に…あの日、拒絶してしまった彼女の手をとる為に！もうマミとの距離は目と鼻の先だ。だが…

「ぐっ!? こいつは…動きが封じられた原因はこれかっ!？」

そんな杏子の足を何かが止める。目を凝らして足を見ると微かに黄色に光る布が見えた。それはママミの能力であつたりボンだ。目視するのが難しい限りなく極薄のリボンが杏子の足を止めていた。

【終わり！私の勝ち…】

「カービィ！ いけっ!!」

足を封じられ身動きが取れなくなつた杏子。やがてリボンは身体全体を縛るべく徐々に足から上がってくる。だから、杏子は両手が縛られてしまう前にママミに向かってカービィを思いっきり投げ出した！

（っ?!）へぼくよ〜！

【投げっ…キャアツ!?!】

ママミは飛んでくるカービィに対応できず彼に抱きかかえられてしまった。そのまま

二人は床をゴロゴロと転がっていくがカービィは決して彼女を離さない。

【離して！離しなさい！カービィ！】

（???）フルフル

自分を包み込む柔らかで暖かいカービィにマミは不思議と心が安らいでいくのを感じた。魔女になって湧き上がっていた負の感情が少しずつだがキラキラと彼女の身体から抜け出ていたのだ。

【ああ…マシユマロみたいに柔らかい…それに暖かい】

（???）へマミ…

そのままどれほどの時が流れただろうか…ふいにママが口を開いた。

【私…私ね。佐倉さんがいなくなつてずっと寂しかった。ようやくできた可愛い後輩達も良いところ見せなきやつて本当の意味では心を開けてなかつたの】

ママの心からの言葉にカービィは静かに耳を傾ける。リボンに縛られている杏子は顔を歪めていた。自分のせいだと彼女は自分自身を責めていた…

【でも魔法少女の真実を知つて…取り乱して、友達だと思つていたキュウベえにも裏切られて…こうして魔女になつちやつた】

【バカみたいだよね…一人で勝手に傷ついて…魔女になつちやうなんて】

そんな事はないと言わんばかりにカービィは強く彼女を抱き締める。冷たかつたママの身体もカービィの熱を帯びて暖かくなつていくのを感じた。

【こんな私でもずっと一緒にいてくれる?友達だつて…あなたは言つてくれる?】

（???）
へぼよ！

もちろん！ マミにはそう聞こえた。それを聞いた彼女は不敵な笑みを浮かべて…パチンと指を鳴らす。すると、自分を抱き締めるカービイの足元が歪み、黒い渦が彼を包んだ。カービイは闇へと吸い込まれていた！

「カービイ!? マミ!!」

「一緒に…ずっと一緒に!」

マミはカービイを自分の結界の奥底へ引きずり込もうとしていた。そこは入れば二度と抜け出せないマミだけの部屋。そして、そのまま入り口を消し去ればマミすらも出る事は叶わない。彼女は永遠にカービイと共にあろうと彼を闇へ引きずり込む。しかし…

「…こんな事をしてあなたを私を拒絶しようとしなのね…」
（???）

狂気に満ちた自分を見てもカービィはいつもと変わらない笑顔を向けている。自分がどうなるかもわからないというのにマミの事だけを一心に案じ続けるカービィ。彼には魔女となったマミも心が洗われたような…そんな気がした。

彼女はカービィの足元の闇を消し去ると共に彼女本来の優しい笑みを浮かべて…

「ありがとう、カービィ。あなたに会えて良かった。私は幸せ者ね…」

c (???) つへマミ!

「正気に戻ってくれたのか?…おわっ!？」

縛られていたリボンも消滅し、倒れ込んでしまう杏子。彼女は二人の元へ向かうと…目を見張る出来事が起こっていた。

カービィに抱かれたマミの身体が徐々に薄れていっていたのだ。感じられる魔力もそれに応じて少なくなっている。最初は人間に戻るのかと思っていたがどうやら違うようだ。

カービィは驚いたような顔で彼女を見る。マミにはこの結果がわかっていたのか瞳から流れる涙を拭い、二人に笑いかけた。

「ごめんね……私に残されてる時間も少ないみたい……」

……

“……君たちが僕らの観測を越えた結果を引き起こす事。僕たちはそれを奇跡と呼んでいる。まさか、こんな現象が見られるなんて思わなかったよ。カービィ、佐倉杏子”

キラキラと空に向かって光放たれているマミを見ながらキュウベえは推理していた。それはキュウベえも見た事もない初めての現象であったからだ。しばらくして彼はあの仮説にたどり着く。

“これには僕も見事と言う他ない。だけど、心は戻せた所で彼女の肉体はもうすでに魔女そのもの。絶望をエネルギーとし、人々を襲う負の存在だ”

“そんな彼女は絶望を捨てて、それとは正反対の希望を抱いてしまった。だから、絶望を糧にしていた魔女の身体が朽ちている……と、そういう所かな？これはとても興味深い現象だよ”

ついにはカービイの身体からすり抜けてしまうマミ。彼はそれでも彼女を必死に短
い手で引き寄せようとしていた。そんな中、杏子は顔を見せないようにして俯き、肩を
震わせている。

カービイも杏子も悟ってしまった。マミの心は救う事ができたが、たどり着く運命は
変える事ができない事に。もう薄れゆく意識の中、彼女はそんな二人を見て：

「…私、一人が怖いって…イヤだって言ったでしょ？でも、もう大丈夫みたい」

パアアアと花が咲いたかのようにとびつきりの笑顔をマミは浮かべていた。もうそ
こに魔女 Candelloro の姿はない。まどかやほむら、さやか の頼れる先輩で杏子
の師匠。そして、カービイの友達であるバママミであった。

「たとえみんなと離れてしまっても、私には素晴らしいお友達がいるんですもの！うふ
ふっ…」

「もう…何も怖くない！」

……

……

…

「はあはあ……！巴さん！」

ドアが勢いよく爆発したかと思えば息を切らしたほむらがホールの中へ入ってくる。ほむらはその中央に集まるカービィと杏子を見て駆け寄るが二人の様子がおかしい事に気づく。

「カービィに佐倉さん……巴さんは……？巴马ミはどうなったの？」

「……………満足そうな顔してあいつは……ママは逝ったよ」

（っ？っ、）へママミ……笑ってた

その言葉とカービィが大事に握り締めるグリーンシードでほむらは何が起こったか理解した。そして、危険は去った為か、シャンデリアから降りてきて近くで猫のように足で顔をかいていたキュウベえを睨みつける。その瞳には記憶をなくす前の彼女と同

じ
憎
し
み
が
宿
っ
て
い
た。

3 1. 明かされる真実

“遅かったじゃないか…暁美ほむっ!!”

結界の主が消滅した事により屋敷の一室のような部屋から殺風景な山へ戻ってくる一同。そして、遅れてやってきたほむらに声をかけたキュウベえがいきなり爆ぜた。

ぐちゃぐちゃになった白い肉片が辺りにまき散らされほむらはそれを踏んづける。その顔に溢れんばかりの怒りを滲ませて何度も何度も…

「その感じ…ほむら、お前！記憶が…!?”

（???) へ戻った?

今のほむらは三つ編みで眼鏡こそかけているものの、この間までのふんわりとした雰囲気はガラリと変わって…いや、記憶をなくす前の彼女に戻っていた。

キュウベえを殺した事で落ち着いたのか、ほむらはその場に崩れ落ちてしまう。そし

て、パープル色の瞳からポロポロと涙を流し始めた。

「記憶は取り戻す事は出来た。だけど…何もかもが遅すぎた！美樹さやかもバママももう死んだ…！今回は…今回こそは全てがうまくいくと…そう思ってたのにつ！」

(つゝ？) へほむら？

「これじゃあ今までと何も変わらない！まどかを…救えない…!!」

「お前…何を隠してる？何を知ってやがる？」

“それは僕が説明してあげるよ。佐倉杏子”

それは先ほどほむらに殺されたであろうキュウベエの声。声が聞こえてきた方へ振り向くとそこには爆発し、弾け飛んだはずのキュウベエの姿があった。

夜の闇の中でも色を失う事のない彼は不気味に輝く瞳を泣き崩れるほむらに向けている。そして、衝撃の事実を口にした。

“何となく察しはついてたけれど…君はこの時間軸の人間じゃないね？おそらく…そう遠くない未来からきたんだろう。暁美ほむら”

それを認めるかのようにビクツとほむらの肩が揺れる。ピンときていないカービィはよくわからないのか、別にそんなに驚く事でもないのか、(???)この顔から変わらない。

しかし、隣にいた杏子は暁美ほむらが未来人であるというカミングアウトに驚くばかりで口をあんどりと開けていた。

「は？み、未来から来たって…わけがわかんねえ！冗談だろ!？」

“…攻撃を受けた事、それとさっきの言葉を聞いてようやく君の正体が掴めた。何か間違っている事があるかい？”

「……………いいえ、あなたの言うとおり。私はまどかの契約を阻止する為に未来からきた。みんなとは違う時間を生きる人間」

邪魔な眼鏡を外し、涙を拭き取った彼女はそのまま眼鏡を盾へとしまい込んで三つ編みにされている髪をほどく。そして、すらりと伸びた髪の毛をフェアアアとかきあげた。そんな彼女にいまいち状況が把握できていない杏子が声をあげる。

「まどかの契約を…？どういう事だ、ほむら。わかるように説明してくれよ」

「…明日で構わないかしら？あの子を、まどかも交えて全部を打ち明けるわ…ここまできたら隠す理由もないしね…」

ほむらがそう言うのでこの日は解散となった。カービイは記憶が戻ったほむらと一緒に帰ろうかと迷っていたがまどかを一人にしておくのは危険であると彼女が言うのでまどかの家にカービイは帰る。

帰り道に誰かに見られてはいけないのでほむらの盾の中に入れてもらい、彼女に送ってもらおうカービイ。そんな中、ほむらが誰にも聞こえないような声で呟いた。

「…美樹さやかは死に、マミもこの世から去った。ふふっ…やつぱりこうなってしまうのね」

夜の闇に飲み込まれるほむらの声。それをカービイの耳は捉えていた。やつぱりとはどういう事なのだろうか？彼は悲しそうに目を伏せて歩く彼女に問いかける。

(？…？) へぼよ？

「未来から来たって言ったでしょう？私は…これまで何度も似たような体験をしてきた

の。美樹さやかが契約する所も数え切れない程見てきたし、バママが作るケーキを何回も食べてきた」

「でも、私が彼女たちと親密になつた時間軸では必ずこうやつて皆死んでしまう…今回は、今回こそは彼女たちが死ぬ事はない。そう思つてたのに…それを私が崩してしまつた。どうして…どうしてこうなつちやうの？」

幾度となく出会いと別れを繰り返し、同じ時の中をループしてきたのだと言うが、少女の身である彼女はいつたいどれほどの過酷な道のりを歩んできたのか…いつたい何がそこまでほむらを掻き立てるのか…

みんなの前で抑えつけていたほむらの感情が一気に爆発する。彼女のこのような声を聞くのは初めてだったカービィは黙つてほむらの言葉に耳を傾けていた。

「あの二人が死ねばまどかは必ず契約を踏み切る。二人を生き返らす為に…あの子は自分を犠牲にしてしまう！それじゃあダメなのに…！あの日に交わした約束…それを私は守らないといけないのに！」

(?~?) (へほむら…)

「……………ついたわ。明日全てを話す…まどかをお願いします」

もう日付も変わり始める遅い時間だというのにまどかの部屋の電気はついていた。ほむらはカービィを取り出すと涙を拭い、どこかへ消えてしまった。

……

……

…

「まどか…」

「ほむらちゃん…」

翌日、皆はほむらの家に集まっていた。この場にいるのはほむらとその正面に座るまどか、壁を背にもたれかかる杏子に机でお菓子を頬張るカービィ…それとどこからとも

なく現れたキュウベえである。

まどかに美樹さやかと巴マミの死は伝えており、可愛らしい彼女の顔には泣き腫らした跡が残っている。

「さあ全てを話してもらうぞ、ほむら。それともこいつがいちやあ話しづらいか？」

”きゅつぷい”

射抜くような視線を受けるキュウベえだが、何食わぬ顔で毛繕いをしている。ほむらは静かに首を横に振った。

「聞かれた所で問題はないわ。インキュベーターのやる事は変わらない」

” そうだね。まどかの契約が僕らの最優先事項。その為にどんな犠牲を払おうとも成し遂げてみせるさ”

(?..?)へむっ！

名前を呼ばれた事でビクツとまどかの肩が揺れる。キュウベえの生氣を感じさせない赤の瞳がこれほどまで恐ろしく見えた事はないだろう。カービィが庇うようにまど

かとキュウベえの間に立つ。

「長くなるわ。今から話すのは私の全てよ」

そうして、ほむらは語り出す。魔法少女となった彼女の願い、それはこことは異なる世界で出会い、友達となった鹿目まどかが死んでしまうのを防ぐ事。その為にワルプルギスの夜がくるまでの時間を繰り返しているのだ。

そのループの中で巴マミ、佐倉杏子、美樹さやかと幾度となく交流し、魔法少女の真実を知った事や些細なすれ違いで仲違いをした事で殺し合いをしてきたのだという。

カービィと出会ったこの時間軸はこれまでとは違い、全てが上手く回っていた。だが、自分が記憶を失った事でキュウベえに利用され、積み上げてきたものが一気に崩れ落ちてしまった。

そこまで言った所で自身に対する深い怒りと失ったものの大きさをほむらの慟哭がこの部屋に響く。一人の少女が背負うには重すぎる誓いに皆は絶句してしまう。

「ほむら……ちゃん……？それじゃあ……ほむらちゃんは私の為に!」

「ちっ、なんでそれを最初に言わなかった……っていつでもアタシも信じなかったか……」

そつ!!」

(———)へほむら? まろか?

話が複雑すぎて理解出来なかつたカービイだが、ほむらはまどかの事を大切に思つて
いるという事…それだけは理解出来た。

ならば自分出来る事は何か。どうすればいいのだろう。しばらく考えた後にまど
かが以前に言つていた事を思い出す。チラリとまどかの方を見ると胸に手を当てて考
え込んでいた彼女も同様にカービイを見た。

c (???) つへぼよ!

「カービイ…?まどか?」

「……………そうだね、カービイ…!私、やつぱり皆を…! マミさんも、さやかちゃんも! 杏
子ちゃんだつて! 皆を救いたい!」

「あん? いったい何をするつもりさ?」

「すう…はあ…すう…はあ…」

杏子からの問いかけに答えずに深呼吸するまどか。ハッと俯いて涙を流していたほ

むらが顔を上げた。彼女の行動、それはこれまで時間軸と同じで覚悟を決める前の鹿目まどかそのものだった。

「私、魔法少女になる！」

32. ハッピーエンドに終わらせる為に

「ああ……そんな……まどかあ……」

まどかの名前を呼んで泣き崩れたのは完全に記憶が戻った暁美ほむらで彼女の嗚咽がこの場に響く。それを顔こそ向ける事はないが、悲痛な面持ちで目を瞑り彼女の代わりに言葉を発する者がいた。

「アンタ、それが何を意味するのか……わかって言ってるのか？」

「……うん。私は魔法少女になるって事は私の為に頑張ってくれたほむらちゃんの想いを踏みにじる事になる……でも、私は叶えてみたい願いを見つけたの」

佐倉杏子の鋭い視線と言葉にも一步も引く事なく、毅然とした態度で言葉を返す鹿目まどか。それだけで言葉での説得はもはや不可能であると考えた杏子はそうか……と一言。そして……

「…部外者のアタシが兎や角言う筋合いはねえ事はわかつてる。けどな、一つだけ言わせろ」

「うん」

「マミやアンタの親友の死を絶対に無駄にするな。アタシが言いたいのはそれだけさ」

そう言うとき杏子は机に中身のつまつたビニール袋を置いて出て行ってしまった。半透明な袋から見えるその中身はグリーンフシードでほむらから貰ったもの以上の数が入っている。

「杏子…まさか…」

「シヨッキングな出来事が続いたからかな？ 彼女はもう絶望して死ぬ気なのかもね。まあいようがいまいが変わらない…そうだろう？ 暁美ほむら」

「黙れ…誰のせいでもこんな事になつたと思ってるの!? お前が…!!」

「そうだね…僕にも落ち度はあつたのは認めてあげよう。でも、元はと言えば君が無駄に時を巻き戻したりしなければ結果は変わっていた。君の話では一番最初に犠牲になつたのは鹿目まどかと巴マミだけだつたと言うじゃないか」

「あ…ああっ…ち、ちが…そんな！そんな、つもりは…！」

「違う。君がしているのはただの自己満足だ。第一約束とか言ってたけど、この時間軸の鹿目まどかと君の時間軸の鹿目まどかとは別人だろう？何の意味も…」

「キュウベえ！」

非情な言葉でたたみかけようとするキュウベえと顔を抑えてわなわなと震えるほむらの間に庇うようにまどかが立った。その胸にはむつとした表情でキュウベえを睨むカービイもいる。

「これ以上ほむらちゃんを絶望させるようなら私は絶対に契約しないよ。だからもうやめて！」

ほむらがパツと涙に濡れた顔を上げる。キュウベえのルビー色の瞳も一際大きく輝いたような気がした。やれやれと言わんばかりにキュウベえは首を振ってまどかを見る。

「待ちわびたよ、まどか…さあ、叶えたい願い事を言っごらん？僕がなんでも叶え

てあげるよ”

「まどか…ダメ…ダメっ！」

まどかの背後からさがるような声が聞こえる。記憶が戻り、クールだった彼女からは想像も出来ない程に動揺していた。

「…その前に少しだけほむらちゃんとカービィとで話させて。最後に伝えたい事があるの」

“それくらい、いくらでも待つてあげるよ。じゃあ宇宙の為に死んでくれる気になったらまた声をかけてね！”

そうしてキュウベえも窓から立ち去っていた。ふう…と一息ついたまどか。

その時、しどろもどろになりながらもほむらが立ち上がったかと思えば…突然変身する。そして、左手の盾に手をかけて時間停止をしようとしていた。

「私は…何度でも…繰り返す！」

「あっ!?!ダメっ!!」

(つ > o < c) ミシミシ

だが、それはするりとまどかの胸をすり抜けたカービイの吸い込みによって阻止され、怯んだその隙にまどかがほむらを押し倒す。

魔法少女の力ならば一般人に過ぎないまどかを振りほどく事など容易い事だろうが、まどかを傷つける事はしないほむらにはそんな事が出来るはずもなく。力無くもがく事しかしない。

「は、離して！まどか！」

「離さない!!絶対に離さないからっ！」

ほむらは手首も掴まれてまどかに馬乗りになられていた。それでももがき続けるほむらの頭にポンポンと手が置かれた。カービイだ。

(つ???) つへだいじょーぶ!

「…?大丈夫なんかじゃ、ないわっ! マミも美樹さやかも死んで杏子もない…武器もロクにない私一人ではワルプルギスの夜を越えられない…まどかも契約してしまう…」

!!もう…これ以上は無理よ!!」

「ほむらちゃん…ありがとう」

「えっ?」

驚いた様子でほむらが顔を上げた。そこにあつたのは自分を犠牲にする事も厭わな
い優しくて強い少女の笑顔。馬乗りをやめたまどかはお尻をはたいて立ち上がると驚
愕するほむらの手を握って立ち上がらせる。

「ほむらちゃんが今日まで頑張ってきた事…私は無駄になんてしない。ね、カー
ビー」

（???）へぼよっ!

任せろと言わんばかりに胸を張るカービー。まどかは彼を撫でた後に再びほむらへ
と向き直る。

「ずっとカービーと一緒に考えてきたの。どうすれば皆を救えるか…ハッピーエンドで
終わらせるか」

「そんな事…出来ないわ。何を願おうと最強の魔法少女であるあなたが奇跡や魔法で誰かを救う事は同時に世界の崩壊を意味するわ。いつかあなたが魔女となって世界を滅ぼす事になるのよ?」

「見てきたんだね。私がそうなってしまおう所…」

「ええ…魔法少女に希望も幸せもないわ!だから、まどか…お願いだから考え直し…」
「ほむらちゃん」

ギョツとほむらの身体を優しく包み込むまどか。そして、彼女の耳元で自分の願いを告げた。それを聞いたほむらは目が点となり、離れたまどかと足元にいるカービィを交互に見ていた。

「……………えっ?ほ、本当にそんな事が出来るの?」

「えへへ、本当の事言うとかわかんない。でも!」

(つ???) つへみんなすくう!!

「うん、だからほむらちゃん!力を貸して!!」

「希望を掴む為に!このまま絶望で終わらせない為に!」

…
…
…

台風などとは言えない程の強い風に轟々と建物が軋むような音を立てていた。やがて、地響きがしたかと思えば外から何かが崩れるような大きな音が響いてくる。

少女、鹿目まどかの隣には彼女の両親と弟、ただではなく気まずそうに座る暁美ほむらの姿もあった。さらに周囲には不安に揺れる百人余りの人々がここ見滝原中学校の体育館に避難していた。

“確かにいくらでも待つとは言ったさ…でも”

どこからともなくキュウベエの声がまどかとはむら、盾の中で気合十分といった様子のカービィへ届く。

午前7時を過ぎた所で突発的異常気象に伴う緊急避難指示が見滝原全土に発令されていた。そう今日は…

「ワルプルギスの夜がもう来てしまったよ。君は一体どうする気なんだい？まあ…気が向いたら外に来るといい」

「…ママ、ちよつとトイレ行ってくるね」

「あ、まどか…私もいくわ」

パツと停電が起きてどよめく人々。チラリと時計を見たほむらがまどかに対して頷いたかと思えば、二人はあらかじめ示しておいたトイレ作戦でこの体育館から出る。そして、雷鳴の灯りを頼りに渡り廊下を駆け出していく。人もいない為、カービィも飛び出して併走していた。

「…」
「…」
「…」
ε || ε || (っ???) っへぼよっ！

「……………カービィ…まどか…」

窓からはまだ朝だと言うのに空に立ちこめる暗雲と町中に起こっている停電のせいで真つ暗だ。そんな中、不意に立ち止まったほむらが口を開く。うん?とまどかとカービィが揃って振り返った。その顔はとても穏やかで迷いなどもはや存在しないだろう。

「ふっ…やっぱりあなた達は似てるわね…」

「えっ? そ、そうかなあ…えへへ」

(っ?~?c) (^??)

「まどかとカービィの言う通りになってもならなくても、多分これが私達の最後になるわ。だから、今のうちに全部伝えておきたいわ…」

33. なんて事ない日常

渡り廊下の外は雷鳴が轟き、突風で打ち上げられた瓦礫や人工物の残骸の嵐となっていた。空には暗雲に包まれた巨大な何かの街に向かってゆっくりと進行している。

歩を止めた鹿目まどかと星のカービィは現在、彼女：暁美ほむらの言葉を待っていた。

目を閉じているほむらは微かに微笑んでいるようである。しかし、笑っているはずなのに楽しいとか嬉しいとかの感情は感じられず、むしろ逆のものを一人と一匹は感じていた。やがて、ほむらがゆっくりと目を開け：

「今までの私ならこの絶望的とも言える状態……こんな壊れた世界なんて捨てていたでしょうね。そう、そこに住む人達を見捨てて、切り捨てて……全てはまどかを救う為だけに」

「ふっ……つまるところインキュベーターの言う通りだったのかもしれない。私のやってきた事は全て無駄……いや、それどころか繰り返せば繰り返す度にどんどん悪化していっ

た気さえする」

「ほむらちゃん…それは…!」

C (???) つへまって!

自嘲気味に語るほむらの言葉を遮ろうとするまどか。しかし、カービィがそれを止めた。ある意味まどかよりも付き合いの長いと言える彼はなんとなくほむらの言いたい事が伝わっていた。それは彼の思っていた通りだ。

「でも、今回は違う…カービィ、貴方がいてくれる。こうやって振り返ってみれば出会ってからまだ一ヶ月も経ってないけど、貴方に巻き込まれて馬鹿やっていたこの時間はかけがえないものだった…本当に楽しかった」

「知らず知らずのうちに擦れていつてた心が少しずつ癒されて…切り捨てる事を躊躇わなくなっていた美樹さやかやバママミだつて守りたいと願うようになっていたわ。全ては貴方のおかげよ、カービィ」

c (???) つへぼよ!

優しい微笑みがカービイに向けられていた。それは久しく見ていなかった心からの笑顔だ。

その笑顔は記憶をなくし、眼鏡をかけていた時のあどけない笑顔に良く似ている。ありがとう、そう感謝の言葉を述べた後にまどかへ向き直った。

「そして、まどか…貴方が願おうとしているその願い…それが叶えられたとして、どうなるのかは全く見当もつかないわ。だけど、貴方も彼に賭けてみたくなったのよね？」

(つゝ?) へぼよ?

僕?と言わんばかりに首を可愛らしく傾げて見せるカービイ。まどかはコクリと頷く。

「彼に全てを賭けたくなる気持ちはわかるわ。とつても食いしん坊で子供みたいなこの子だけど…まどかと同じで優しくて強い彼なら本当になんでも出来そうな気がするもの」

「うん!だから、私もカービイに頼んだの。もう一度さやかちゃんとも遊べるように、マ

ミさんの美味しいケーキが食べられるように、杏子ちゃんとも改めて友達になれるように…ほむらちゃんが幸せになれるように…だから、一緒に奇跡を起こそうよ！」

「ふふ、そうね…私もまた皆と一緒にいたい。今度はこんな無理して作った私なんかじゃなくて…本当の意味で一緒に」

「ほむらちゃん…うん！」

c (???) つ

「本当にこれが正解なのかは私にはわからない。もしかしたら、他にもっと良い方法があるのかもしれないわ。でも！」

「カービィとまどかを信じて…私は全てを貴方たちに託すわ。皆を救って、お願い…！まどか！」

「お願い…！カービィ！」

……
……
……

ほむらより意思を託されたまどかとカービィ。二人は降りしきる雨と吹き荒れる突風の中、積み重なった残骸の上で静かに佇んでいた真つ白な小動物の元へ歩く。彼はまどかとカービィに気づくとぴよんぴよんと器用に跳ねながら下へ降りてくる。

“やあ、随分と遅かったじゃないか……鹿目まどか、それと星のカービィ”
(?~?)へキユウベえ!

“暁美ほむらの姿が見えないようだけど……うん?あれは……”

暗雲に覆われていたワルプルギスの夜の高層ビルと同等かそれ以上かの巨体がいきなり大爆発を起こした。それは花火のように連続で打ち上がっていく何かがそうさせているようだった。

あれはロケツトランチャーだ。それが確認出来ると同時に戦っている者の正体に気がつくキュウベえ。彼はやれやれと首を横に振った。

“無駄な事だね…早く君たちが行ってあげないと暁美ほむらは死ぬよ？まあ僕の知った事ではないけれど…”

その言葉の通り、ワルプルギスの夜はそんな暁美ほむらの攻撃にビクともせず嘲笑ったかと思うと手から黒い衝撃波を放つ。それは真っ直ぐに暁美ほむらの場所まで伸び、爆発を起こす。

あれは当たれば間違いなく致命傷だ。だが、カービイには見えていた。爆発する直前に見慣れた赤い光が飛び込んでいくのが。おそらく彼女が来てくれた。ならばしばらくは問題ない。そう判断し、性悪な白い生物へと向き直る。

「暁美ほむらも知る由もないけど、幾多の世界の因果を束ね、因果の特異点となった君ならどんな途方もない望みであつても叶えられるだろう」

「…本当、だね？」

まどかが聞き返すとコクリと彼の頭が揺れる。さあ、ここまですれば後は流れに身を任せるのみ。まどかはカービイを見る。彼もまどかを見ていた。その表情はいつもと変わらない笑顔でそれは全て任せろと言っているようにも見えた。そんな彼に勇気をもたらそう。

「さあ、鹿目まどか！その魂を対価にして、君は何を希う？」

「私…」

一度、深呼吸をして…彼女は願いを口にする。

彼にそこまで言われ、自分はそう思われていたのかとほんの少しショックを受けるカービー。だが、そんな事はすぐに気にならなくなった。なぜなら…

「これは…トマト？」

まどかの手には一つのトマトが現れた。まるまるとポリウム満点なそのトマトの中心にはMと一文字書かれている。まどかには見覚えのない不思議なトマトでしかなかったが、カービーにとつては違う。

それは彼がもつとも大好物にしているマキシムトマトそのものであった。だが、それはただのマキシムトマトではない。鹿目まどかの魔法少女としての全ての力と祈りが込められた特別なものだ。

C (? v?) つへぼよ！ぼよ！

「まどかの力を得て何をするつもりだ。カービー！これはもはや地球という小さな星の問題ではなくなった…星を書き換える事すら出来るようになるその力を君が持つのは危険すぎる！この宇宙の全てを巻き込み、破壊しかねない！」

「ううん、そんな事ない。カービィの願い…それは多分私たちと同じで彼らしいただ一つの願いだよ」

“やめるんだ！まどか…やめっ”

まどかはヨダレをダラダラと流すカービィに合わせてしゃがみ、彼にそのトマトを差し出す。カービィは手でそれを掴むと大きく口を開いて…食べた！

(っ?o?c)へんあっ…

その瞬間、カービィから溢れんばかりの光がそのピンクの身体に宿る。それはまどかの持つていた力とカービィの持つ無限の可能性が結びつくものであった。まどかもキュウベえもあまりの輝きに目を開けていられない。

(っ?c)へう…

C(???)っへうまああああい!!!!

カービイのそんな無邪気な声が響く。それはワルプルギスの夜と戦っていた魔法少女達の耳にまで届く程大きいものだっただろう。

光も収まり、まどかが目を開ける。そこには…

??

c

(?????)

??

f

へはあい！

頭の白いリボンを揺らして反対を向いていたカービイが驚くまどかとキュウベえに振り返る。

この星のものではない宇宙を彷彿とさせるような金色の瞳と花の蕾をイメージさせる弓。その背には美しく透き通る羽根という風にカービィの姿が変化していた。

34. 見滝原の魔法少女

「カービィ……すごい……なんだか神様みたい……」

「君が本来持つべきだった力だ。それがカービィの無限の力と合わさって……僕達の想像を遥かに越える力を生み出した……!」

?? c (???) ?? ♪ へはあい!

すつとぼけた顔でただそこに立っているだけだと言うのにほとぼしる圧倒的な威圧感と神々しいオーラが周囲を覆っていた。

それと同時に空がパツと明るくなる。澄み切った空はどこまでも青が広がっていて、吹き荒れていた暴風も気持ちのいいそよ風へと変わる。

「これって……カービィの力?」

「いや……違う……まだ彼は何もしていない。なのに、何故……ワルプルギスの夜が消えた……? いや、消えたんじゃない……まさか、曉美ほむら!」

?? c (???)
?? ♪ へほむら?

“…まさかここまでやるなんて思わなかった…彼女は、暁美ほむらは…見滝原を守りきってみせたよ。ワルプルギスの夜を越えたんだ”

「いったいどうやって!?!杏子ちゃんと一緒に倒したの!?!」

“…違うよ。彼女は倒したんじゃない。彼女は自らを犠牲にしてワルプルギスの夜を移動させた。そう…”

……

……

…時間が遡る事、数分前。

「はあ…はあ…くっ!」

瓦礫を押しつけて出てきたのは黒髪の少女、曉美ほむら。頭からとめどなく流れる血を拭い、彼女は暗雲立ち込める空を見上げる。その視線の先には最悪の魔女「ワルプルギスの夜」が顕現していた。何もかもが規格外なワルプルギスの夜は結界を持たず、姿を現せば最後そこにいる人も文明も…何もかもが破壊される。

古来より伝えられてきた伝説の魔女を相手にこれまでで幾多の魔法少女が戦いを挑んできたが、そのいずれも討伐はおろか進行を防ぐ事すら出来ていない。そんな魔女に対して曉美ほむらは絶望的にも思える戦いを挑んでいた。

「まだ、私は生きているわ…ワルプルギスの夜！」

天より響く愉快げな笑い声は何をしても無駄だと言っているように聞こえていた。そんなワルプルギスの夜に対し、ほむらはそう啖呵をきって銃口を空へと向ける。伝説を相手にするには頼りない武器だが、ほむらにはもうこれしか残されていなかった。だが、その攻撃でさえも放つ事がままならない。なぜなら…

アハハハハッ!!

「…っ！…しまっ…」

地上で叫ぶ少女を意に介する事なく進行を続けるワルプルギスの夜。そんな超特大の魔女に注意が向いていた為、ほむらは左右から音もなく迫り来る影に気がつかなかつた。鋭利な槍と剣を持つ影はそれらを突き出して彼女を貫かんとする。

まずいと思い、咄嗟に左腕に手をかけるほむらだが、そこに本来あるべきものはなく、ただ空を切ってしまう。

「ちっ…バカヤロー！」

目と鼻の先までできていた影がそのまま武器を振り上げたその時、突然影の足元より赤い槍が伸びた。それは武器を振り上げていた影を正確に貫き、ほむらは事なきを得る。

「助かったわ…杏子…！うっ…」

「おい、テメエ…ふざけんじゃねーぞ！」

立っているのもやつとな状態のほむらの隣に佐倉杏子が降り立つ。杏子の顔は誰が見ても不機嫌である事がわかる程に怒りを滲ませていた。

「戦えないならもう下がれ！時間停止も出来ない！武器もないテメエなんざもう足手まといでしかねーんだよ！バカ！」

杏子の怒りの理由はただ一つ。言い方こそきついもののほむらの身を案じての事であつた。残された武器もワルプルギスの夜を相手にするには頼りないマシンガンのみ。攻撃を防ぐ為の魔力も尽きた。そして、時を止める為に必要な小盾は希望に託してその手にはなかつた。

そんな状態でありながらもなおワルプルギスの夜を睨み、闘志をみなぎらせるほむらは杏子にとってはただの死にたがりにしか見え、ヤケになつているようにしか見えな。い。だから、杏子は半ば強引にも彼女を下がらせようとしていたのだが…

「そうかもしれないわね…だけど、このままじゃ見滝原の町も人も…全てが滅んでしまふ！そんな事は絶対にさせないわ」

「…!?何がアンタをそうさせる？そういうタマじやなかつたはずだ、アンタは…」

「それが今私の出来る唯一の贖罪になるからよ。もつともこれもただの自己満足でしかないけど…」

「あん？贖罪だあ……？」

そこまで言った所でワルプルギスの夜が動きを見せた。口元にメラメラと燃えたぎる炎。攻撃を仕掛けてくる…瞬時にそう判断した二人はその場を離れ、周囲の瓦礫の影へ隠れる。読み通り炎が口から吐き出された。それは姿を隠したほむらと杏子をあぶりだす為に周辺を念入りに焼き焦がしていく。

『きつとこの時間軸で全ての片がつくわ。その結果、どうなるかは私にも全く想像がつかない』

『カービーがまどかの力を手に入れるとか言ってたな…はつ、確かにどうなるのやらだ。でもそれじゃあアンタがこうまでして戦う理由にはならねえだろ？』

凄まじい熱気と溢れる煙にたまらず姿を現してその場から離れる二人はテレパシーで会話を続ける。出てきた二人にワルプルギスの夜が生み出した影が襲いかかる。

『…ワルプルギスの夜が進行するあの方向。あの先に何があるかわかる？』

回り込んできた影に応戦するほむら。だが、持っていたマシンガンの弾薬が切れた為か引き金を引いてもカチカチという音しかならなくなってしまう。それを見逃す影ではなく、丸腰の彼女に対して剣と槍が突き立てられた。ほむらの鮮血が影を赤く染める。

「っ!!ほむらっ!!」

貫かれた腹部や腕から血を吹き出す。同様に襲われていた杏子は魔力を最大まで高めて周囲の影を薙ぎ払うと慌てて彼女の元に駆け出し、得物を突き立てる影を貫く。

霧散した闇は穢れとなつて消えたが、ほむらは血を吐いて片膝をついた。ソウルジェムへの致命傷こそ避けているものもはや限界だ。ワルプルギスの夜が再び口元に炎を溜めているのを確認しつつ、舌打ちした杏子は彼女を背負つてこの場から撤退する。

「…げほっ…あつちにはママの家もあるし、美樹さやかの家だつてある。風見野も…奴の通り道に近いでしょう?」

「っ…ホントどういう風の吹き回しだよ。まるで…アイツらみてえじゃねえか…」

「この町を守っていた魔法少女はもういない。でも、思い返してみれば…私もこの見滝

原で生まれた魔法少女の一人で…かつこいい…あの人達に…憧れてた…」

火を吹くワルプルギスの夜と襲い来る影の猛攻をほむらを背負いながらも懸命に耐える杏子。手を組んで鎖の結界を生み出した彼女だったが、ワルプルギスの夜の攻撃を前にその鎖も徐々にヒビ割れていく。

「…貴方もそうなんでしょう？杏子…だから、来てくれた…」

「…気まぐれだよ。何一つ守れない…何も出来なかつたクソみたいな人生だったんだ。最後に華々しく散つてやろうと考えただけさ！」

燃えたぎる炎は幾多にも重なる鎖を焼き焦がし、杏子とほむらに向かって伸びる。鎖の数を増やして二重、三重、重ねていくがそれでも炎の勢いは止まらない。

なんとか押しとどめる杏子の手にかかると何かが重なる。それは彼女に背負われていたほむらの手だ。

「ふっ、私も最後に皆が守りたかつたものを…これまでまどかの為に、自分の為に見捨ててきたものを守りたい…そう思つたのよ！」

その言葉と同時にほむらの残った魔力が杏子へと送られる。重ねられたその手に光るソウルジエムは黒く変色し、今にも溢れ出しそうな程に穢れを放っていた。

「まさか……お前!!」

パキ、パキパキツツ……ほむらのソウルジエムは音を立ててヒビ割れていく。それと同時に莫大な魔力が杏子へと流れ込む。強まった魔力は暴走し、ワルプルギスの夜の放った炎を防ぐどころかかき消す事に成功した。だが、その代償は大きい。

「くっ……ほ、ほむら!?!」

爆風で後方へと吹き飛ばされた杏子は瓦礫に叩きつけられながらもダメージはない。だが、背負っていたはずのほむらはいない。彼女は……いや、彼女だったものはワルプルギスの夜と共にこの見滝原から完全に消えていた。あるのは砂時計、それと彼岸花を組み合わせたような魔女の結界のみ。

「あのバカ……魔女に……魔女になったってのかよ」

策も武器もない。保有していた魔力も全て使い切った。そんな暁美ほむらの最後のとつておき。それが魔女化。彼女はわざと魔女になる事でワルプルギスの夜を自らの魔女結界へと引き込んだのだ。

呆然と立ち尽くす杏子の前にはほむらの魔女結界がある。そして、その反応もすぐに消えた。そう、いくら魔女になったとはいえ相手は伝説の魔女で到底勝ち目がない。結果は見えていた事だった。杏子は槍を構え、いつでも動けるように警戒する。しかし：

「出てこねえ……まさか……アイツ……やりやがったのか!？」

魔女結界は完全に霧散し、魔女となった暁美ほむらの気配も消えていた。しかし、一向にワルプルギスの夜は顕現しない。魔女には性質がある。魔女結界も同様だ。

バمامィが魔女化した際の事を思い出した杏子は悟った。魔女の性質なり、敗れた時には魔女結界を別の場所に開くなりでワルプルギスの夜を退けて見せたのだと。そう、彼女は本当に見滝原を守りきって見せたのだ。

「…あのバカ…カツコつけやがって…カービィに、まどかにどう言えばいいんだよ！クソツ!!」

残った杏子のやり場のない怒りが空に響く。その空は綺麗な青さで晴れ渡り、彼女の怒りを受け止めていた。だが、それと同時に避難所の近くから天に昇る凄まじい光の柱と遅れて飛び立つピンクの影が見えた。

それがなんなのか。直感で理解した杏子は流星の如く空を駆ける星に願う。絶望はもう終わった。なら、次に起こるのは希望のはずなのだ。たった一度でいいから本当の奇跡を見せてくれと…

?? c (???)
 (???) f へはあい!

カービィの声が聞こえた気がした。間の抜けた声ではあったが、何故かとっても頼もしい…そんな声であった。

35. この宇宙を守る者との戦い

「そんな…ほむらちゃんは魔女になったって言うの!？」

「間違いないよ。暁美ほむらは…いや、此岸の魔女 Homulily と名付けておこうか。彼女はワルプルギスの夜を自身の結界に引きずり落とした。そして、敗北した」

「…」
 「…」
 「ただど凄まじい執念だ。再び顕現しようとしたワルプルギスの夜を強制的に太平洋のど真ん中に移動させたのだから…これじゃあさすがのワルプルギスの夜も海上を進行するだけで消えてしまう。見事と言わざるを得ないよ」

「それじゃあほむらちゃんは死んで…」

「?? c (つゝ C??) ?? ♪ へほむら…!」

「これで君の願いも無駄になったという事かな? 残念だったね。暁美ほむらを救う事が出来なくて…」

「?? c (? o??) ?? ♪ へムダじゃない!!」

「…うん、これから救うんだよ！カービィ！」

涙を拭いたまどかがある物を取り出した。それはほむらから受け取っていた小盾。時を止め、巻き戻す事が出来る時間操作の道具だ。それをカービィに渡す。

“…それは…暁美ほむらの盾かい？何故それがここに…君は！君達はまさか…”

「これで過去にだつて戻れるはず…こんな結末にならないように歴史だつて変えられる。ううん、カービィの力なら世界を書き換える事だつて出来る！」

“馬鹿な!?そんな事したらカービィが望む世界が出来てしまう!!それがどんな結果を生むのか…世界は…この宇宙は破滅するかもしれないんだよ!?!どうしてそこまで彼を信じられるんだ…わけがわからないよ”

「人の感情をなんとも思つてないあなたにはわからないかもしれないね。カービィは誰よりも優しくして誰よりも強い!そんなカービィならきつと皆が幸せな世界を作ってくれる…そう信じてるの」

??c (???)
 ???f へまろか…ありがと!

空を見上げたカービィ。どこまでも青く澄み切ったこの空はほむらが守ったものだ。

今度はこの空をさやかとマミと杏子とまどかとほむら。全員に見せる事を彼は誓う。

そして、まどかとほむらより託された希望を吸い込んで自分の力とする。彼の左腕が輝いたかと思えば時を操る小盾が装着された。カービィは振り返る。まどかとキュウベえが彼を見つめていた。

“…止めても無駄なようだね。この時ほど自分の行いを悔いた事はない…まさか、自分の力で自分の首を絞める事になるなんてね。でもこのまま君の思いどおりにはさせないよ？絶対だね”

??c(???) ??fへだいじょーぶ！

「カービィ！皆を助ける前にお願いがあ…」

まどかの願いを聞いたカービィはそれを二つ返事で領き返す。そして…

「お願い…カービィ！」

??c(???) ??fへぼよ！

まどかのエールを受け取り、彼は空へと飛び立つ。まどかのお願いを果たす為にある

場所へ目指していた。その途中で片膝をついて祈りを捧げる杏子の姿が見えたので彼女は手を振っていた。彼女は気づいたのか、気づいていないのか：絶えず祈りを捧げ続けた。

— || ≡ Σ ?? (??) つへみえた！

瞬く間に見滝原を抜けて海上までやって来たカービィ。彼の視線の先にいるのは激しい暴風を伴いながら進行を続けるワルプルギスの夜だ。逆位置だったその体軀は魔女となったほむらとの戦い影響か、正位置となり本来の力をフルで発揮出来る状態となっていた。本能のままに笑い続けるその声は愉しげではあったが、どこか悲しげで：彼女もまた被害者の一人である事を理解する。

まどかの願い。それは伝説となって何百年も魔女として生き続けているワルプルギスの夜を楽にしてほしいというもの。そうでなくとも彼はさやかやマミ、杏子とほむらの為にワルプルギスの夜を倒してから歴史を変えるつもりだった。ワルプルギスの夜の悲痛な笑い声を聞いてますますその意志を固める。そして：

?? c (???)
 ??? f へしよーぶ！

そう高らかに宣言した彼はワルプルギスの夜がこちらを見て魔力を高めると同時に弓を握り締めてピンクの矢をめいっばい引き絞る。すると彼の周りにピンクの魔法陣が何重にも展開されていく。

莫大な魔力を放つカービィを前にワルプルギスの夜も本能で危険を感じ取ったのか、己の持つ全力の力でカービィに攻撃を加えようとしていた。

それは全体重をかけた暴風の如き超スピードの体当たり。しかし、ただの体当たりではない。これこそが地表すらひっくり返し、全てを無に帰してきたワルプルギスの夜最大の技であった。

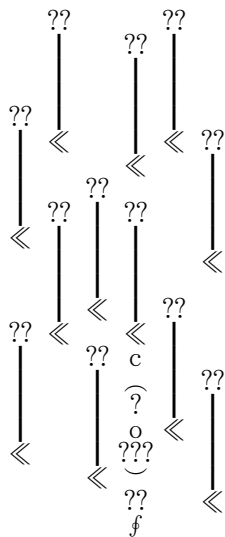
だが、ワルプルギスの夜の攻撃が彼に当たる事はなかった。なぜなら…

??



??





まさに圧巻。まどかから受け取った思いとほむらから託された想いを乗せた幾千、幾万とも言えるであろうカービィから放たれたピンクの矢がワルプルギスの夜を貫いて昇天させていた。

最後に響いた笑い声。それは心の底から笑ったような声で：彼女もまた希望を持って逝けたのかもしれない。そう思い、カービィは小盾へと手をかける。

そう、これで終わりでは無い。ここからが始まりなのだ。交わした約束を守る為に、自分自身の望みの為に！左手の小盾がカシヤーンと音を立てて回転を始める。そして、カービィの周りに異空間が広がっていく。

— || ≡ ??
 (???)
 つ

彼はなんの躊躇いもなくその異空間の先へ飛び込んだ。進む度に彼は思い出している。

ほむらから託された想い。魔法少女になると決めたまどかの覚悟。希望を持って消えたマミの笑顔。隣で同じ目的の為に戦った杏子の叫び。絶望へ沈んで魔女へ成り果てたさやかかの最期……

そして、時を遡行して辿り着くのはあの日、夜空の輝きの下でまどかと出会う前。カービイがこの星にやって来たその時から全てを書き換える。

だが、全てを書き換えようとしたその時。不意にカービイの身体が空へと引きずり込まれた。いや、遙か空を突き破って引つ張りこまれたその場所は月。そして、そこにいたのは……

“きたね、待っていたよカービイ……”

?? c (? o ???)
?? ♪ へキュウベえ!?

カービィに背を向けて地球を眺める可愛らしい真つ白な小動物がそこにいた。その姿は紛れもなく散々少女たちを食い物にしてきたインキュベーターではあったのだが、何やら様子がおかしかった。

“ふふふ…時を越えて歴史を変えようとする、か。あと少しだったね。でも、もうそれは不可能だよ”

振り返ったキュウベえ。それはいつもの彼そのものだ。だが、身に纏う雰囲気と放つ威圧感は歴戦の勇士であるカービィですら警戒する程。感情がなく何を考えているのか理解出来ない彼をこの時ばかりは読み取る事が出来る。

“普段はこんな事はないんだけどね。未来から君の情報が送られてきたよ。そして、今相対してわかるその力…僕らとしても個人が持つ力としては危険すぎると判断した”

ビリビリと凄まじいプレッシャーと緊張感が高まっていく。もはやカービィも話し合いでなんとかしようなどとは思わない。いや、思えない。

何がなんでもここでカービィを始末するという絶対の意思。それが彼から感じられるただ一つの目的なのだから。

“宇宙の均衡を保ち、あらゆる犠牲を尽くしてこの宇宙を存続させ続けてきた。僕らインキュベーターの総力をもってここで君を抹殺する！”

??c(???)??fへキュウベえ!!

“これは宇宙を守る為の戦いだ……さあ、いくぞ！星のカービィ!!”

その瞬間、音もなく驚く間もなく、視界を埋め尽くす程大量のキュウベえが四方八方に現れた。超スピードなどではなく、一瞬で。それは見慣れたほむらの時間停止と同じもの。

そして、それら全てが器用に耳から生えた手のようなものでマミのマスクット銃を持つており、その銃口を驚愕するカービィへと向けていた。

“まずは小手調べといこうか”

号令と共に一齐に砲撃が放たれた。これらを完全に避ける事、防ぐ事は不可能。迫り来る弾丸がヒットする一瞬の内にそう考えたカービィは羽根をはためかせて宙へ飛ぶ。超スピードで動く事で斜線に入った弾丸こそ何発か被弾したものの大したダメージは受けていない。

“逃がさないよ？次はこれだ”

超スピードで宇宙空間を駆けるカービィの前に青い光と赤い光が立ち塞がる。それは杏子の槍とさやかかの剣を手にしたキュウベえで彼女らとも勝るに劣らない速さで突撃してきていた。

?? ———— ??

?? ———— ?? (っゝ??) っ ♪ へぼよ！

最初の攻撃をひらりと身を躲し、その後次々と降ってくるキュウベえに対し、花の弓魔法陣を展開させて正確無比に矢をお見舞いする。幾千、幾万の矢がキュウベえを襲うが彼もまた無尽蔵にも思える程に数で攻めてきていた。

“星のカービィ。こんな事がなければ宇宙の救世主として君は生かしておく手はずだった。問題児ではあるけれど君は数々の邪悪と戦い、そして打ち勝ってきたからね。これからも宇宙存続の為に働いてもらおうつもりだった”

次々とヘッドショットを決められて撃ち落とされていくキュウベえ。しかし、横目で月の表面を見たカービィはとんでもないものを目にする。それは撃ち落とされた死体の肉片を食べて山のように大きくなってムキムキになったキュウベえが何匹も誕生していたからだ。

そして、そのうちの一体が宙で矢を射続けるカービィに向かって体当たりを仕掛けてくる。その速さは尋常ではなく、ワルプルギスの夜に匹敵する。

??c (?o??) ??f へぼ、ぼよっ!?

それを慌てて飛び退いて躲すカービィだが、射続けていた矢が止まった事により頭上から青と赤の猛襲が再開する。それだけではなく、完成したムキムキなキュウベえが群れを成して襲いかかってきた。

“だけど、君が得てしまったその力。それはたとえ君に侵略の意思がなくなるともその力は利用され、宇宙に害を成す存在となる：過ぎた力はその身を滅ぼす事になるという事さ”

?? (っく???) っ??

一度止めてしまった弓矢を構える時間はもらえず、四方八方から拳と剣と槍の応酬がカービィを襲う。飛んだり、躲したり、弾いたりと必要最低限な動きでそれを防ぐ彼の身体は次第に小さくも確実なダメージが刻まれていた。

“理不尽だと思ukai?でも、それが君のした愚かな選択の結果だよ。人間なんていう下等生物の為に戦う事を選んだ君のね!”

言葉を発していた個体。彼の前にはマミの十八番、テイロ・ファイナーレの砲台があった。銃口から光が収束していき、重厚な魔力が溢れだす。もみくちやにされているカービィはその場から動けない!そして:

“さあ、これが奇跡と魔法の力だ！耐えられるかな？カービィ!!”

立ち塞がる敵を滅ぼす為に研ぎ澄まされた必殺の一撃が放たれた。その威力はママのものと同様。即ち当たればただではすまないという事だ。だが、カービィの周りにいるキュウベえは避けようともせず、ただただカービィをその場に抑え続ける。

?? (っゝ C??) ?? へくう!!

閃光がこの宇宙を走った。キュウベえの放ったテイロ・ファイナーレは直撃だった。

インキュベーターはさらにカービィが使う本来の持ち主であるまどかの弓を模倣し、念入りにピンクの矢を放ち続ける。

“さて、生きているかな？それとも宇宙の塵となってしまうたかい？カー…”

そこまで言った所でヒュンと風を切る音と共に話していた個体が爆散する。放たれたのはピンクの矢でそれは彼の背後から放たれていた。

“…なるほど、時間停止か…”

近くにいた別のキュウベえが声を上げた。ふう…と息を吐いたカービィは小盾を構えている。

時間停止をする際にほむらがやっていた事を思い出した彼はすんでのところで小盾のギミックを発動させて時を止めたのであった。

一緒にくつついてきたキュウベえは停止した世界でも動いていたのだが、たかが数匹のキュウベえでは彼を止められない。

そうしてティロ・フィナーレとピンクの矢を躲したカービィはキュウベえの背後に立ち、矢を放ったという事だ。

“さすがは宇宙の救世主と言っておこう。けどもうそれは通用しないよ？元は僕から生まれた能力なのだから！”

?? c (???)
 ??? f へぼよっ!!

再び向かい合うカービィとインキュベーターの群れ。永遠に続くかと思われる宇宙を守る為の戦い。しかし、この戦いの決着は近い…

36. 銀河にねがいを

太陽が照らす月の裏側。青々と輝く地球の背にそこで星の救世主と宇宙の守護者と
の死闘が繰り広げられていた。

お互いに時間停止をし、止まった時の世界で矢を撃ち合うカービィとインキュベ
ターの群れ。宇宙を縦横無尽に駆けながらカービィが放つ幾千、幾万の矢は数の暴力と
言うべきか、月面とカービィを包围する数万のキュウベえが同様に模倣した矢を放つて
いる。時が動き出すと凄まじい音を立てながら矢の打ち消し合いが始まる。

数の上では1しかないカービィは勝ち目がない無謀な戦いに挑んでいると言えるだ
ろう。実際キュウベえもつい先程まではそう睨んでいた。しかし、それは間違いであつ
た事を彼は今悟った。

“なぜだ……？先程に比べて動きに無駄がない……僕の攻撃を見切っているというのか
？”

キュウベえの放った矢は全て弾かれたり、超スピードで躲される一方でカービイの正確無比に放たれた矢は一匹、また一匹と白い死骸が増やしていた。

彼が放つ矢の数や威力に一切変わりはない。キュウベえの言う通り、ただ動きに無駄がなくなっただけ。だが、それはカービイを翻弄していたキュウベえの攻撃を見切られたという事を意味していた。

“なら…これでどうだ!?”

そう言ったキュウベえは弓矢を消し、奇跡と魔法の力で新たな武器を具現化させる。それはこれまで一度としてカービイの見た事のない、どこかの魔法少女の力。

巻き戻しを利用したクロスボウでの一撃。光を纏う救世の剣。最悪の魔女の攻撃をコピーしたかのような炎や影の攻撃。などなど、いずれも必殺の一撃に相応しい攻撃がカービイを襲う。

もちろん初見の技にはカービイは対応出来ておらず、ダメージを受ける事も何度もあった。しかし…

?? (っく? *??) つ?? ♪ へふんすっ!

その度に次は当たるものかと言う気迫を持つて立ち上がる。そして、それは気迫だけに終わらず動きにも現れていた。襲いかかる数万の群れの攻撃をまたもや無駄のない動きで避け始めたのだ。

“馬鹿な…これが宇宙を何度も救ってきた救世主の力だと言うのか…!”

やがて、巻き戻しの一撃は時を止めて数瞬出来た隙に回避。光を纏う剣は頼りなくとも決して折れない小盾で防いで反撃。最悪の魔女の攻撃は近くにいたキュウベエの死体を盾にする。そして、怯んだキュウベエをチャンスと言わんばかりにピンクの矢で殲滅していく。一対多の完成系の動きがそこにあった。

“なぜだ…君にとってはたかが数週間共にした人間の為になぜそこまで戦おうとする？それは命を賭ける程のものなのかい？”

自然と戦いの中でそうキュウベエは言葉を漏らしていた。純粹な疑問だった。それは大立ち回りを続けるカービーにもテレパシーとなって届いていた。彼はその答えを

自分の言葉で伝える。

『前に言わなかったっけ？地球の食べ物美味しいって！』

“…？確かにそんな事を言ってたね。確かに地球の食べ物は数ある惑星の中でもそれなりに美味であると言つてもいい。けど、他にもそんな星はあるじゃないか？地球にこだわる事も…『でも!!』”

『他の星にはマミが作ったあの美味しいケーキはないでしょ？あれは今まで食べたケーキの中で一番美味しかったんだ！』

宙を駆けながら矢を放つ。そんな彼が矢を具現化する僅かな隙を見計らつて山のように大きなムキムキキュウベえがタツクルを仕掛けてくる。だが、それは先程みた攻撃だ。読んでいたカービィは矢の具現化をやめて時間停止をし、その場から飛び退く事でそれを完全に回避する。

“…自分の弱さを強がつて無理をして、挙句の果てには君達を道連れにしようとした。そんな愚かな人間だったけど…そういえばお菓子作りの腕に関してはピカイチだったね”

そんなカービィに対してなおも攻撃を続けるキュウベえ。それは次第に苛烈さを増していき、躲す事も防ぐ事も困難になっていく。耐える事で精一杯だが、それでも倒れないカービィにキュウベえは一つの提案をする。

「なら、こうしよう。僕が君の望むケーキを用意してあげよう。いや、ケーキだけじゃない。これまで食べた事のないとびつきりに美味しい、最高の食べ物を君にあげるよ！それで…きゅっぷい！」

声をかけていたと思われる個体が爆散する。言わずもがなカービィの放ったピンクの矢だ。反撃も無理だと思うほどに爆発と閃光が飛び交うこの戦場の中で時間停止を駆使して彼は静かに矢を放っていた。

『どんな美味しいものを用意してくれたって、代わりに何でもあげると言われたってダメ〜！だってもうあの綺麗な星の事が好きになっちゃったんだもん！』

「っ!?!」

『食べ物も美味しく暖かくてお昼寝にちょうどいい！あんなにいい星ってなかなか

いよ？まーでも、何を言っても…』

そして、一度出来ればそれは何度でも出来る。ただ耐えるだけであつた彼は攻撃の糸口を見つけ、確実に数を減らしていく。いったいどれだけのキュウベえが死骸と化しただろうか。どことなく感情のないインキュベーターの瞳にも焦りの色が見える気がする。

『あそこにはボクの友達がいる！まどかにほむら、キョーコにマミにさやか！それだけじゃ理由にならない？』

“友達か…実にくだらねえ。そんなくだらないものの為に命を賭ける価値があるとは思えないよ”

『キュウベえには友達はいないの？』

激しい攻防の中でカービィも疑問に思っていた事を聞く。返事は四方八方からのティロ・ファイナールと共に返ってきた。

“そんなものは僕達には必要ない”

『そうかな？友達がいたら楽しいのに！』

くると踊るように優雅に躲していくカービィの動きは相手を挑発するように見える。というより挑発していた。だが、キユウベえはそれには乗らない。なぜなら…

“あいにく感情なんて無駄なものを持ち合わせていないからね。楽しさも怒りも必要がないんだ”

『えーつまらないよ。そんなの…じゃあさ、キユウベえは何を持つてるの？』

“…何を持つている、か…強いて言うならば使命かな？僕も、他の生命も…全てはこの壮大な宇宙を存続させる為の駒にすぎない”

『もう…本当にそればかり！宇宙が滅びるとか、守るとか…よくわかんないけどさ、意外となんとかなると思うよ？』

“知らないからそう言えるのさ。僕たちがどれだけ宇宙崩壊の目を潰してきたと思っっているんだい？今もこうして、君という害を排除しているというのにね”

時間停止と共に攻撃のパターンが変わる。今度は赤と青の槍にサーベルなどなど見えのある武器からない武器まであらゆるものが天よりカービィへ降り注いでくる。

宙へ浮かぶ彼はたまらず地上へと落とされた。

『うう、僕はそんな事しないって！ならキユウベえの方がよっぽど邪悪だよー！さやかとママは君にやられたようなものじゃないか！』

「僕だつてやりたくてやっているわけじゃない。この宇宙にどれだけの文明がひしめき合い、一瞬ごとにどれ程のエネルギーを消耗しているのか君にわかるかい？消費したエネルギーを蓄えるのに彼女達の犠牲も必要だった。そして、莫大なエネルギーを持つまどかの犠牲もね！」

まるで流星のように宇宙空間からカービィを覆うが如く降り注ぐ武器を前に時間停止をしたところで身動きは取れず、全てを防ぎ続ける事も不可能。すなわち逃げ場がない。そんな状態に陥ってしまう。それでも最低限の箇所だけガードしつつ懸命に耐え続けるカービィ。その瞳に諦めの文字は無い。

「鹿目まどかの力があればこの先エネルギーに困る事は無い！まどかの犠牲があればこの宇宙は存続するんだ！僕達のエネルギー回収の使命も終わって残す所、宇宙のゴミ掃除だけ……」

ボロボロに傷ついていく彼を見てそんな事を口にするキュウベえ。慢心はせずこのまま何もさせずに圧倒的な物量で攻め切ろうとしていた。

『まどかを犠牲になんかさせない！この星も、この宇宙も絶対に守る！あくこれもなんか言つた覚えがあるなあ』

避ける事もなくただひたすら受け続けながらカービイは話す。その中で彼は思い出した。暁美ほむらが使っていたもう一つの能力を。

攻撃を防いでいた小盾を降り注ぐ武器に突き出すように掲げて力を込める。すると異空間が開き、カービイを貫かんとしていたサーベルや槍はその中へ吸い込まれていく。

自分が繰り出す本気の攻撃にまたも回避法を見つけてみせたカービイ。そんな彼は何を思ったのかキュウベえはしばらくの沈黙の後にカービイへとテレパシーを送った。

“…そうだね。ならば聞かせてもらおうか、カービイ！あの時の答えを！君はどうやってこの星、この宇宙、全てを守る？”

『答え…それを言う前に…いろいろあつたし、君を一回ぶつ飛ばしとかなきや気がすまないんだから…』

キュウベエの攻撃はやんだ。今のカービイには効果がなく、エネルギーの無駄だと悟つたのだ。カービイはキツと月面からキュウベエを睨む。

『良いだろう。決着をつけようか。無限に近い数の僕たちを相手に君が勝つ事は不可能だろうけどね!』

『無限じゃないんでしょ?なら…』

?? c (???)
 (???) ?? ♪ へかつ!!

その時、カービイの金色の瞳が光つたかと思うと彼の周りを眩いオーラが覆う。それは優しくも強く輝く白い光。それはまどかが持っていた神にもなれる力。それはなんでも叶えられる最高の魔法少女としての可能性。

それらがカービイの持つ無限の可能性と溶け合つて一つの力を生む。

“こ、この力!?まさか…君は…!今まで本気じゃなかったっていうのかい!?”

先程までと比べ物にならない力を放つカービィにキュウベエのルビーの瞳が一斉に揺れる。

キュウベエは思い返した。カービィが使っていたのは己の身体能力とまどかが魔法少女になった時に手にした花の弓。そして、暁美ほむらの持つ時間停止とそれに付随した能力のみ。自らが欲していた鹿目まどかの力は一切使っていなかった事を。

“ば、馬鹿な…こんな!こんな事があつていいはずがない!これが一個人が持つ力だつていうのか…もはや神を、神を越えている…!”

キィイイン。静かに構えると花の弓が展開し、カービィの周りに無数の魔法陣が広がっていく。高まりすぎて感じ取る事すら出来ない凄まじい魔力は奔流となって月を…いや、この銀河を揺らす。

?? c (?)
 (? ? ?)
 ?? f へキュウベエ!

月に輝いた光の柱はとても綺麗で無慈悲に仇なす者を焼き焦がす。それは万単位いたインキュベーターを一匹を除いて全滅させてしまうほどだ。

“……………君の勝ちだ…”

残った。いや残されたというのが正しいか。彼は戦意をなくしたようだった。項垂れていた彼はごろんと腹を見せるような格好を見せる。

“…煮るなり焼くなり好きにするといいさ。君にはそうするだけの権利がある”

『待つてよくキュウベえから言われた事の答えをまだ言つてないでしょ？』

“…そうだったね。僕とした事が忘れていたよ。でも、君がちゃんと答えを用意していたなんて意外だな”

『むく…でも、答えは簡単！それは…』

“それは？”

カービイは寝転がったキュウベえに手を差し伸べる。そして…

……
……
……

「はい。それじゃあ自己紹介いってみよー！」

教師に促されて興味津々で注目する生徒達の前に絹のように美しい黒髪を三つ編みおさげにした少女が出る。

「あ、あの…あ、暁美…ほ、ほむらです…その、ええと…どうか、よろしく、お願いします…」

「暁美さんは心臓の病気で入院してたけど先日良くなってこの見滝原中学校に通う事になりました。久しぶりの学校で色々戸惑うことも多いでしょう。身体も病み上がりで万全とは言えないから、みんな助けてあげてね」

口ごもった彼女の言葉を教師が引き継ぐようにこれからクラスメイトになる少年少女へ説明していく。人見知りをする性格でこのような事に慣れていなかった暁美ほむらは恥ずかしそうにもじもじとしていたが、そんな中三人の少女と目が合った。

一人は青髪の元氣と人当たりが良さそうな少女。もう一人は教科書を立ててお菓子を食べながらこちらを見る赤髪の少女。そして…

「あっ…」

目が合ったただけなのにビックリしたように慌てて目を逸らす赤いリボンが特徴的な桃色髪の少女だ。何故か彼女の事が気になってずっと見つめていたほむらだったが、話の済んだ教師より席に案内されてようやく我に返る。

取り留めのない話が終わり、すぐに休み時間となるが都会から来た転校生というのは

珍しかったようでほむらの周りには人ばかりが出来て人と会話が苦手だった彼女は目を回していた。

「あの、わ、私、その…」

「暁美さん」

とめどなく飛んでくる質問に思わず俯いていたその時、突然ほむらの名前を呼ばれる。顔を上げるとそこにいたのは先程目が合った桃色髪の少女。彼女は体調を崩しがちなほむらを保健室に案内するという名目の元、質問攻撃から助け出してくれた。

「その…ありがとうございます」

「ううん、いいんだよ！私、鹿目まどか！まどかって呼んでね」

「えっ!? えっど…」

戸惑うほむら。初対面なのにそんなに馴れ馴れしくいってもいいものかと悩んでいたが…

「わ、わかりました…ま、まま…まどか、さん」

「あは、あははっ！さんはいいよおく私もほむらちゃんって呼んでもいい？」

「も、もちろんですっ！はい！」

「よかったあ…ねえ、ほむらちゃん！私と友達に…」

………

……

…

「お〜い、転校生！まどか！」

「えっと…美樹…さん？」

「何で疑問形なんだよ〜！さっき言ったでしょ？あたしもまどかみたいにさ・や・かって

呼んでくれてもいいんだよって！」

「ははっ、コイツはバカさやかだからバカでいいよ。アタシは佐倉杏子、アンタとはなんか上手くやってけそうな気が…」

「はあ!?!杏子!?!誰がバカだっ!?!あんたが一度でもテストの点数で勝てた事あつた!?!」

「うわ〜そうやって何でもかんでもテストを持ち出すところがバカ丸出しだよ…あんなの社会に出たらクソの役にも立たねーってのにな」

「け、喧嘩はダメですよ！」

「ふふっ、大丈夫!こう見えて仲がいいんだよ?」

「喧嘩するほど仲がいいって事…?」

「誰がこいつと!?!」

……

……

…

「鹿目さくらん！ちようど新作ケーキが出来たの！良ければ…あら？」

「あつ…えつと…わ、私向こうに行き…」

「ま、マミさん！この子はほむらちゃんって言って私の大切な友達なの！だから、あの…！」

「…ウフフ、じゃああなたのぶんのケーキも用意するわね。そうだ！せっかくだし美樹さんと佐倉さんも呼んでお茶会しましょう！」

「マミさん！ありがとうございます!!」

「え…あ…いい、いいんですか…!？」

「もちろん！私もあなたとお友達になりたいわ。その…あなたさえ良ければ…だけど…！」

「ぜ、ぜひ！暁美ほむらです！よろしくお願ひします！」

「巴マミ、3年生よ。よろしくね、暁美さん！」

……
……
……

鹿目まどか、暁美ほむら、美樹さやか、巴マミ、佐倉杏子。彼女達は再編した世界で普通の少女として暮らしていた。それをしたのは願いの力を使ったカービィ。それと……

“全部終わったよカービィ……ふう……人類が発展する前の時代から歴史を書き換えていったから流石の僕も疲れたよ”

耳から生えた手で額を拭うのはキュウベえ。どういう理屈か、いつもの整った毛並み

ではなくボサボサでボロボロのぬいぐるみのようになっている事から本当に疲れている事が窺える。

『よ〜し！これでまどかとの約束もバッチリだ〜！はい、じゃあこれ！』

そんな彼にカービイが何気なく吐き出したのは鹿目まどかの力だ。それにより神にも等しき聖なる力を身につけていたカービイは元のピンク玉の姿に戻ってしまう。まどかの力は星の形となってカービイの周りをくるくると回っていた。

“本当にいいのかい？こう言っではなんだけど…少し不用心すぎるんじゃないか？”

『ん？キュウベえはなんか悪い事するの？』

“いや、しないけど…”

『それより早く取らないと消えちゃうよ？』

“わっ！わわっ…それを早く言ってくれ！”

星の形をしたまどかの力はぴよんぴよんと跳ねていたが、消えかけていて消滅一歩手

前だ。思わず叫んだキュウベえは慌てて追いかけてキャッチし、ふうと一息ついていた。そんな彼を見てカービー疑問に思った事があるようでそれを口にする。

『この前、感情がないなんて言つてたけどさく絶対あるよね？なんか前とちよつと違ふよ？』

“…君もそう思うかい？はあああ…あの時の戦いからなんか変なんだよ。やっぱりこれがそうなのかな”

『あはは…でも、とつてもいい感じだよ。前のロボみたいな君と比べたら何億倍もねっ』

悪意のないカービーの言葉にムスツとした顔を見せるキュウベえ。彼はまどかの力をひとまずソウルジェムに移した彼は地球にいる皆を映し出したホログラムを消すとカービーに向き直る。

“…………ともかく君の要望通りにいい感じに歴史はやり直したよ。それとは関係ないマミの事故や杏子の家庭事情、それと不本意だけどほむらの病気に関しても幸せに暮らせるように多少サービスを入れておいた。まあ僕からの謝罪という意味を込めて受け取ってくれ”

『おおー！なんかよく知らないけどありがとう！』

“ありがとう、か…なんだかむず痒いね。本当に感情なんてものは無駄でしかない事がよくわかるよ”

『じゃあ次は楽しい！と美味しい！を知ろうよ！』

“君が言つてた奴だね…まあ、それは実のところ興味がないわけでもない”

『じゃあ行こー！ちようど皆でケーキ食べるって言つてたし、口移しでも半分こでもいいから分けてもらおうよ!!』

“ちよ、ちよつと待つて！今の彼女達は君や僕の事は覚えて…あ、あ…ああああああああああああ!!”

ワープスターを呼んだカービィはキュウベエの首根っこを掴んでそのまま地球へ向かう。行き先は…そう、ケーキの匂いと皆がいるあの…